



都内某所、ほぼ埼玉県との県境。某商店街の外れに有る小さな喫茶店、『めたる屋』通称『メタルカフェ』。初代店長の羽賀根（はがね）氏の時代は『はがね屋』だった。店長が代わった時にその『はがね』が『鋼鉄』になってさらに『めたる（なぜか平仮名）』に改名されたと客は思っている。真実は不明。で、この人がその2代目店長、浦辺一樹（うらべかずき）。34歳、独身、身長「171cmはあるはずだ。」と本人は言い張る。学生時代から『はがね屋』の常連客で、いろいろあって従業員になり、店長になってしまった。初代の羽賀根氏はどうなったかということ、札幌に移って喫茶店を営んでいらっしゃる。理由を聞いたら「東京の夏は暑いから。」それで札幌というのも安易な発想な気がするが、なにはともあれ順調に営業中とのこと。あだ名の『メタルカフェ』にはちゃんと由来があって、それは別に世界中に展開する『ハードロックなんとか』に対抗するためでもなく、毎月第一、第三金曜日の『HR（ハードロック）／HM（ヘヴィメタル）ナイト』。2代目店長の浦辺氏の音楽の趣味が普段店内に流れているスムーズジャズやボザノヴァよりも『HR／HM』寄りなので、店長の権限を利用して毎月第一、第三金曜日の午後17時以降は『浦辺コレクション』から厳選された『そっち方面の名曲』が店内に流されることになっている。お客の反応はというと、明らかに普段とは『違う種類』の客が増加する。ま、時代遅れとは言え、『HR／HM』愛好家はまだまだいらっしゃるようで。「バロック音楽だって愛好家がいるんだからいいじゃないか。」と浦辺氏はのたまひ。ちなみに先代の羽賀根氏は『ROLLING STONES』の大ファンでした。

浦辺氏に続く『めたる屋』の責任者となっているのがハンセンこと柏田葉瀬雄（かしわだはせお）さん。35歳。この人も独身だが浦辺氏とは対照的に背が高い。最終公式記録（高校3年の身体測定）203cm。浦辺氏とは学生時代からの付き合い。肩がよく凝るらしくてその時に片腕を突き上げる。その仕種から（某プロレスラーにたとえられ）『ハンセン』と名付けられてしまった。肩書上は副店長。本人は『ヴァイスプレジデント』と呼ばれたいらしいが誰もそう呼ばない。で、あとは数名のアルバイト従業員でこの『めたる屋／メタルカフェ』を切り盛りしている。毎週月曜日は定休日。

ところでこの『めたる屋／メタルカフェ』は午後17時以降はアルコール飲料もふるまっている。「浦辺、ハンセン両氏が仕事中に飲みたいからだ。」と従業員は言う。しかしカクテルに関しては浦辺氏もハンセンさんも限られた種類しか作れないので一見のカクテル通の客に文句をつけられると「とりあえず追い出す。」のだそう。

特に浦辺氏は眉間にシワがよるとかなりの強面というか悪人面。何にせよ、先代からの営業成績もあって常連客もけっこういらっしゃる。彼らのうちの何人かは浦辺氏を『マスター』と呼びたいらしいのだが、当人にとっては「『メタル界』でマスターは『master of puppets/METALLICA』のみなんだそうで、さらに『店長』と呼ばれるのも照れるのだそうで、皆『ウラベさん』とか『カズさん』とか呼んでいる。しかし、ハンセンさんも含め個性派ぞろいの従業員達を上手くまとめる姿はまさに『マスターオブパペッツ』だと人は言う。HM好きじゃないと理解しかねる話だけでも。

2005年7月某日、土曜日。午後15時。外は真夏日でセミが『これでもか』ぐらいに鳴いている。今日はハンセンさんがお休みで、この時間帯は浦辺氏とアルバイトが二人だけ。平川篤（ひらかわあつし）くん。21歳の大学生で彼もまたハンセンこと柏田氏に続いて背が高い。196cm。しかも比較的細く、色白いくせに動きが素早い。高校時代はサッカー部。狭い所をスッスッと移動する。この平川くんとハンセンさんの間に浦辺氏が入ると、その身長差の為に「捕まった宇宙人の写真みたい。」と誰かが言っていた。もう一人は高校3年生の女の子、長谷部麗子（はせべれいこ）ちゃん、18歳。この娘がまたよく喋る。でも仕事もちゃんとなしているし最低限の礼儀もわきまえている様なので誰も何も言わない。進路の事とか相談したがるが浦辺氏もハンセンさんも若者の進路に関して偉そうな事を言える立場ではなかった。ちなみに彼女の子供の頃の将来の夢は『野球の審判』だったそう。何故？

店内の奥の小さなキッチンで浦辺氏が食器を洗いながら平川くんの『最近別れたばかりのガールフレンドとの思い出話』を適当に聞き流していると入り口のドアのカウベルが『カランコロン』と鳴った。カウンターにはレーコちゃんがいる。「いらっしゃいませー、、、ってアンタかい。」「『アンタかい』って君はお笑いのつっこみ人か？」と浦辺氏がタオルで手を拭きながら奥から出てきた。

「あ、カズさんコンニチハ。」とカウンター席に来たのこのお嬢さんはレーコちゃんの親友の福田香（ふくだかおり）ちゃん、17歳。よくこの店に顔を出してくれる。二人ともかなり勉強できるんだそう。しかも可愛いもんだから浦辺氏もハンセンさんもいろいろサービスしてあげている。この娘はまた変わった娘で流行ものにはあまり興味がないらしい。そして学校が休みの時には『かなり奇抜な髪のかき方』をして現れる。「レーコ、見よ。どーだ。入魂の作品。」と黒いプラスチックのチューブからA3ぐらいの丸めた画用紙を取り出してカウンターに広げた。文化祭のポスターのようだ。幾何学的かつ流動的なラインに囲まれて一人の女性が踊っている。アールヌーヴォー調。アルフォンスミュシャを連想させる構図で、実際影響を受けているのだろうが良く描けている。

「あいかわらず絵え上手ね。スポーツは全然ダメなのに。」「関係ないじゃない。スポーツは」「ねえ、カズさん聞いてよ。香ったら、英語の成績はクラスでトップなのに、ソフトボールのポジションの『ライトとレフトの区別』がつかないんだよ。」「そら、なんか完全に日本語チャンネルと外国語チャンネルが別れているみたいだな。」と浦辺氏。そしたら香ちゃんも仕返しとばかりに「『アジとサバの区別』が

つかない人に言われたくないわよ。」それを聞いた店長浦辺氏、一瞬ギョツとして「レーコちゃん、それは事実？」「、、、だって似た様なモンじゃないんですか？あ！でもマグロとハマチなら区別できますよ。マグロは『赤い方』でしょ？」寿司屋に握ってもらわないとダメみたい。浦辺氏、静かに溜め息。

幸か不幸か、店内には奥でひたすら『何かの勉強会』をしている予備校生三人しかいないので、平川くんは二人のお嬢さん達のやり取りを笑いながら見ている。ちなみにこの平川くん、何故だか年上の女性に気に入られることが多い。本人も年上の女性が好みみたいで『例の別れた彼女』も6歳年上だったそう。それを知っているのでレーコ嬢も香嬢も平川くんには特に警戒心を抱いていないみたい。

「なんだか今日はよく喋るな、香ちゃん。」と、浦辺氏。するとレーコちゃんはカウンターに拵られたポスターの下の方の日付等を確認しながら、「そうですか？香は学校じゃいつもこんな感じですよ。」「年がら年中喋っている君にはそう言う資格は無い。」と、浦辺氏。ちょっと『むっ』ときたようで、「いいじゃないですかあ。若い女性とたくさんお話できた方が。」と、レーコちゃんは完全に店長浦辺を『おっさん扱い』。

その一方で香ちゃん、何やらバックパックの中から取り出した。今度はポストカード大の画用紙にポスターと同じイメージが印刷されている。不思議な事に小さくなるとミュシャだけでなく棟方志功的なラインが見え隠れしているようにも見える。

「じゃーん。文化祭実行委員会に提出する前に勝手に作ってしまった。宣伝に一枚その壁に貼っておいて、カズさん。私のサイン付き。」「じゃ、後で原宿で売ってくるよ。アイドルグッズに紛れこませて。」と、どういう冗談か。あまり面白くなかった様でレーコちゃんも香ちゃんもキョトンとしております。とりあえず苦笑いを浮かべて後頭部を掻きながら浦辺氏その『サイン入りプロモーションカード』を店内の伝言用コルクボードに掲示しに行く。と、そのときドアが開いて男性客が一人やってきた。

「こんちゃ。お？浦辺君、何やってんの？」「某アイドル歌手のサイン入りポストカードの掲示係。」「カズさん、そういう冗談もういいから。」とカウンターからレーコ嬢。「いいの。香ちゃんだけでも笑ってくれれば。なんてな。はっはっは。」アンタ、そんな事言うからオッサン扱いされるわけで。で、やって来たお客さんは常連客の一人、鈴木攻治（すずきこうじ）さん。36歳のイラストレーター。結婚、離婚一回ずつ。美術史の知識もたいそうあるらしくて美術関係の雑誌にコラムなどを連載中。彼は一瞬コルクボードの前で立ち止まってからカウンターの平川くんアイ

スコーヒーを注文する。先払いで料金を支払い、奥の窓際の席に座るとカバンから分厚いファイルとボールペンを取り出して何やら読み始めた。一方、浦辺氏カウンターに戻って来てまた女の子達の会話に参加。

「二人とも三年生だっけ？大学に進学するとか言ってたけど受験勉強とか大丈夫なの？」「ふっふっふ。御心配なく、カズさん。私たちケッコウ成績いいんだから。来週から予備校の夏期講習もしっかり気合い入れて行ってまいります。」「って、レーコちゃん。じゃ、このバイトは？」「あ！言うの忘れてた、、、、、、じゃ月曜から勤務時間短縮ということでよろしく。」と、レーコちゃん警察官の敬礼の様な仕種で笑ってごまかす。大学には行けると思うがその後は大丈夫か？そんな調子で。香ちゃんは何も言わずにニコニコしているが何か言いたそうな感じもする。浦辺氏なんとなく『それ』を読み取って話題を彼女にふる。「香ちゃんも夏期講習？」「あ、はい。一応、、、、」少し表情が曇ったか？女性の表情の変化には敏感な浦辺氏とりあえず話題を変える。

「しかし、レーコちゃんに彼氏がいて君に彼氏がないのは不思議だよなあ。」「カズさん、それはどういう意味？」と、レーコちゃん。昔の怪談の幽霊のごとく浦辺氏を振り返る。「確かに彼氏の一人や二人いてもおかしくないよね。香ちゃんなら。」と、平川クンが加勢する。レーコちゃん今度は平川クンの方に向きを変えて「香なら？私は？」「ちょっと店の前の掃除してきまーす。」平川クン、ホウキとチリトリ持ってそそくさと彼女の視界から退散。

「香はね、昔っからモテるんだよ。今まで何人の男子が愛の告白して来てフラれたことか。理想高すぎじゃないの？」「別に理想が高いとか、そういんじゃないなくてえ、、、、低い理想は妥協だし、、、、何でしょうね、カズさん？」「俺が知るか。ところで、このオッサンと後で映画でもどう？」「「寝言は寝てる時にお願いします。。」」レーコちゃん、香ちゃん、見事なデュエットで跳ね返す。「ちょっと、さっきから奥の予備校生が香のことチラチラ見てるんだけど。（レーコ嬢）」「あらヤダ。（香嬢）」「あんたはオバさんか。（レーコ嬢）」と、レーコちゃん、香ちゃんの頭をパコンとトレイで叩く。仲が良いんだか悪いんだか。とりあえずオッサンこと浦辺氏の完敗。キッチンの方へとぼとぼ歩いて行く。平川クンが戻って来て「あれ？カズさんは？」「「反省室。。」」「君たちは双子の子役か？」「じゃ、平川さんは『家来のロボット』役ね。」と香ちゃん、よく分からない切り返し。表ではまだセミが鳴いている。

そんな調子で特にトラブルも無く、お客が大勢押し寄せるということも無く、かといって経営難に陥るほど暇になることも無く午後の17時。『巨人口ボ』平川クンも、香嬢、レーコ嬢も帰ってしまい、山田真樹（やまだまき）さん、30歳、一児の母の出番。この人もかなり個性的。というか行動派。現在はこの『めたる屋』のすぐ近くに住んでいらっしゃるのだが、その前はフランスに住んでいたそうな。学生時代はオーストラリア。日本の某有名企業でOLをしている最中にふと思い立ってワーキングホリデーというやつで渡仏。柔道を教えたり、パン屋で働いたりしていたという。ちなみに柔道三段保持者の様には見えません。小柄だし、線も細い方だし。ところが「某女子プロレス団体にスカウトされた。」という噂もある。その一方で「パリで知り合った。」というダンナさんは普通の家庭的会社員。外見も地味。で、現在は夫婦そろって『ある夢』に向かって日々精進しているのだという。外野の人間はマキさんがダンナをその夢に無理矢理引き込んだに違いないと思っている。ちなみに普段は週末には働かないのだが、マキさんの実家が近いのでダンナさんが忙しくても『お子さん』の方は大丈夫。

ずっと奥の席で書類の束と格闘していたイラストレーター鈴木氏が荷物をまとめて静かになったカウンター席までやってきた。「なーんか暇そうだね。」するとマキさん、急に鈴木氏に背を向けてカウンターの後ろの紅茶の葉っぱの缶を整理。「そんなことないですよー。ちゃんと仕事してるじゃないですか。」さっきまではただサイフォン（観賞用）を眺めているようにしか見えませんでした。テンポよくマキさんはカウンター裏の流しの掃除。そこへ浦辺氏がキッチンからサンドイッチ用のパンとプラスチックの容器を抱えてやって来た。

「さて、これから店長の権限で新メニューを排他的、独占公開します。」なんだそれは？この浦辺氏、見た目のわりには料理が達者。和、洋、中、いろいろ作る。ところがマキさんも料理上手で浦辺氏とよく新メニュー会議（口論）をしている。「今度は何？」と、鈴木氏、興味深気にカウンターから乗り出す。「『めたる屋』特製、サマースペシャル。」と、浦辺氏はトースターで程よく焼かれたパンのスライス2枚に何やら挟んでいる。その脇でマキさんが腕組みをして『突っ込みどころ』を探している。出来上がったサンドイッチを豪快にナイフで二等分してマキさんと鈴木氏の前にトンと置いて「ボンナペティ。」と浦辺氏何故かフランス語。（マキさんに以前教えてもらった。）かなり薄いモッツァレラチーズのスライス、スモークサーモン、さ

らに魚肉ソーセージ (!?) のスライス、レタスとオリーブオイルで炒めたと思われるシトウ、そして『浦辺特製ソース』のサンドイッチ。鈴木氏は口をもごもごさせながら親指を立てている。どうやら気に入った様である。それを見て浦辺氏は満足そうな顔。一方、マキさん曰く「味はまあまあだけど、食べにくい。女性にはどうかなあ。」それに対し浦辺氏「なんじゃ、ボスに向かってその口の聞き方は。火い吹くぞ。火。」とワケ分かりません。とりあえず慣れているのでそんなに怒っているわけではない。「太めのバゲットか何か使った方がいいかな？」と一応本題に戻る店長浦辺。「その方がこの具の場合、見栄えがいいかも。」とマキさん。

「ごちそーさん。悪いね。タダ飯いただいて。」と試食を終えた鈴木氏が口を開く。「ん？誰もタダとは言っていないぞ。」「な!?!」「冗談ですがな。」どこの人だ、あんた。鈴木氏とりあえず『ホッ』として続ける。「しかし、アレだね。浦辺君。やっぱり料理のセンスいいわ。何はともあれ良かったね、良い仕事に落ち着けて。一時期、ハードロッカーっていうかヘヴィメタラーを本気でやってたじゃない。」それを聞いたマキさん、目を丸めて「ウッソー!?!初耳。そんな時期があったんだあ。この人に。『聞く方専門』のただの洋楽好きかと思ってた。」「あ、知らないの？そう、あったんだよ『この人』に。(鈴木)」「昔の話だよ、もう。いいとこまで行ったんだけど、、、(浦辺)」

二人のお客が店を出て行く。「あ、ありがとうございましたー。」と、流石マキさん。一応、勤務中だということを忘れない。で、鈴木氏を除いて店内のお客がゼロになってしまった。マキさんは再び『ワイドショーを見る主婦モード』に戻る。「で？で？どんなバンドだったの？なんで止めたの？」鈴木氏はカウンター席の小さな背もたれに深く背を押し付けて、後頭部で両手の指を組んで、「熱かったよ。この人たち。よくこの店に『いかにも』っていう格好で来ててさ。馬鹿話をしてるかと思ったら急に真剣な顔になって口論もした。そーいや、なんで解散したのか俺も詳しく教えてもらってないなあ。」と浦辺氏を見る。

浦辺氏、今帰っていった客の食器をかたづけながら溜息。「ジャンルは正統派ハードロック／ヘヴィメタル。解散の理由は、、、たぶん半分は俺のせいで、もう半分は、、、よく分からん。」珍しく真剣な顔。それを感じ取ってマキさんはそれ以上の質問を避ける。

浦辺氏は激しく首を縦に振ってもとの『店長面』に戻して鈴木氏の問う。「鈴木さんも今の仕事を転職だと思っているでしょ？以前はアメリカで芸術家として一旗揚げようとしてたらしいけど。」不意打ちに一瞬面食らった鈴木氏、一気に顔が真っ赤。

マキさんはまた目を丸くして「へえー!!そーだったんですかあ。カッコイイ。」鈴木氏、軽く咳払いして「美術留学。俺にも若くて熱かった頃があったの。」

『カランコロン』。突然、会社員風の男性が5人やって来た。カウンター前で少々もめた後、先頭の一人が「アイスコーヒー2つとカプチーノを3つ。」と言って残りの4人は奥のテーブルへ。全員見たトコロかなり若い。先払いで会計を終えて、最後の一人が4人に加わる。浦辺氏とマキさんは手際良く仕事を分担。カプチーノを作りながら浦辺氏「そーいえば、ああいう会社員に憧れた時期もあったなあ。音楽を続けるか否か迷ってた頃。ああいう人たちって、いかにも『社会を上手く潤滑させてます』みたいでさ。俺なんかいわゆる『経済関係者の目の上のタンコブ』フリーターだったから、、、年金も払ってない時期があったし。っていうか払えなかった。」それに鈴木氏加わる。「ああ、それ俺もなんか分かるよ。俺もいろいろあって日本に帰国して、でもいろいろ思ったように行かなくて創作活動への欲求と社会と自己不信の間でかなり悩んでた。「そうそう『俺はこのままでいいのか?』っていう感じ。よっしゃ、完成。マキさん、お願い。」「ハイ。」と、マキさんトレイにアイスコーヒーとカプチーノを乗せて奥のテーブルへ。

「確かに今の仕事と生活に満足している、、、と思う。」鈴木氏が続ける。「イラストレーターとして業界じゃ知名度も上がって来たし。描いてて楽しいし、、、腰痛がなければ。」マキさんが戻って来て再びカウンターの中へ。会話に加わる。「もう芸術家の夢はいいんですか?」鈴木氏ちょっと困った顔をして、「ん?今でも自分のこと『芸術家』だと思っているよ。俺にとってイラストも芸術だし。まだ個展には遠いけど。それに、いろいろ責任を背負い込んでしまうと、、、ねえ。『元アーティスト』の浦辺君。」浦辺氏はマグカップを拭きながら「何、同意を求めてンですか?ま、分かりますけど。俺も今でも『心は常にロックンローラー』だけそ今の仕事にプライドも責任もあるから。それに自分を取り巻く社会への責任もあるし。あまり無茶なことはできないね、、、今のところ。」マキさん、ニヤニヤしながら「エプロンとキッチンの似合うロックンローラー。」「カッコイイだろ?」と、浦辺氏。苦笑い。

鈴木氏、カウンターに肘をついて「でも、、、でもそうすると、いままで半ば意地になって何かを追いかけていた日々が無駄になってしまうような気もするんだよなあ。たまに。」それを聞いて浦辺氏、必要以上にうなづきながら「そうそうそう。確かに気持ちの整理はつけたはずなんだけど、、、みたいな。」それを聞いてマキさん、キョトンとして二人の『なんかブルーなオッサン』を見て「諦める『タイミングが良ければ』結果オーライだと思う。」とあさり(ばっさり?)。さらに続けて「タイミ

ングが良ければ充分『正当化できる行為』ですよ。諦めることも。」「あっさり言うね。マキさん。」と、ボス浦辺は半ば啞然としているが、納得もしている感じである。

「そーだ。何にせよ良い結果出せばいいんだ。人生のどこかで。（浦辺）」「それが人生の最後の方であっても。（鈴木）」「そーですよ。（山田マキ）」決して年月を無駄にしたわけでわないという珍しくいい話。

鈴木氏は何やら感慨深気に遠くを見つめて「タイミング、、、確かに大事だよね。良いタイミングを見計らって、、、もしくはその時が来るまで挑戦を続けるかそれとも別の挑戦とか別の満足を見つけるか。」と言う。それを聞いた浦辺氏も遠くを見つめて「芸術関係は特に『タイミングが大事』って、どこかで会った人が言ってましたね。」と続いた。

「挫折には強くないとねえ。特に男性は。」と山田マキ30歳はデザート類の入っているショーケースの中を整理する。浦辺氏はそれを聞いて「マキさんトコの旦那さんはどうなの？」と聞いてみる。するとマキさんは右手の肘を曲げて力こぶを見せる仕種をして「私が強くした。」とのたまい。それは一体どういう意味か？鈴木氏がクスクスと笑う。浦辺氏「『ヤマギッさん』トコでバゲット焼いてたかなあ、、、」と、急に独り言。「あのパン屋はケッコウ保守的だからバゲットなんて小洒落たモン、、、」

「ところで、」と、鈴木氏。「あの『特製サマースペシャル』の値段はいくらにするの?」「時価1200円。」「高っ!」「特製ソースにいろいろイイモン入ってるから。」「何が?」「何かの葉っぱ。」「何の葉っぱだ!?!」鈴木氏、いつもの『浦辺式ジョーク』であることに気付く。「それからキャビアにフォアグっ、、、」『パコーン』とマキさん、拭いたばかりのトレイで強烈な突っ込み。浦辺一樹34歳の後頭部に。「せめて最後までボケさせてくれ。」と、後頭部をさすりながら浦辺氏。新入社員風の団体が不思議そうに彼らを見て出て行く。楽しく無駄な時間が流れて行く。

翌日の日曜日。午後17時。夕立が来そうな空模様。その空模様を気にして5、6人をお客がほぼ同時に帰ってしまった。店内には浦辺氏と昨日休みだった『もうひとりの巨人』ハンセンこと柏田氏。それから数人のお客さん。加えてカウンター席の一番端にイラストレータの鈴木氏。「近くまで来たから。」と二日続けて御来店。またペンを片手に書類の束と格闘している。お客の注文が一応終了して浦辺氏、ハンセンさんがいろいろかたづけたり、テーブルを拭いたりしていると男性客が一人やって来た。福田春人（ふくだはると）さん。50歳。あの天才不思議高校生、香ちゃんのお父様。月に2回ぐらいはコーヒー豆などを買いに来てくれる。「こんにちは。蒸し熱いね。」「ああ、福田さん。いらっしやい。」浦辺氏もハンセンさんもカウンター内の定位置に戻る。スポーツ選手並みの素早いアイコンタクトでハンセンさんはレジへ、浦辺氏は後方の『いろいろ機会やらコンロ』のある方へ。福田パパは店内の『コーヒー豆の樽』の上に陳列されているコーヒー豆の袋を2種類手に取って「あと、アイスコーヒー。Sの。」と言って会計を済ませた。そんでもってカウンター席中央へ。

「柏田さん。昨日うちの娘が来てたみたいだけど何か私のこと言ってなかった？」「む〜。」と、ハンセンさんアゴに手を当てて少し考えて「あ。俺昨日休みでした。」昨日の記憶がすでにあやふやか。浦辺氏アイスコーヒーを福田パパの前に置いて、「香ちゃん来てましたけど、福田さんのことは特に何も言ってませんでしたよ。元気そうだったし。相変わらず複雑な髪型してたけど。何か？喧嘩でもしたんですか？」「イヤ、喧嘩って言うほどのモンじゃないんだけど、、、ちょっと娘の進路のことで。最近意思の疎通が難航している。」そういうと福田パパ、明らかにサイズが大きい灰色のTシャツのシワを少し正してアイスコーヒーを少し飲んだ。「へー。進路で。大変んだ、お父さんは。大事な一人娘でしたもんね。」とハンセンさんが言うと、「イヤ、二人娘の下の方。香は。」と、普通に福田パパが訂正。ハンセンさんの記憶回路は大丈夫か？そこで浦辺氏「ハンセン、ほら、加奈子ちゃんっていう眼鏡の女の子がいつだったか、夏祭りの忙しい時に手伝いに来てくれたの覚えてない？」と彼の記憶を刺激する。「ああ、、、ああ！え？ウソ？姉妹？、、、ああ、そーいえばそだった。」本当に大丈夫か？でも立派な副店長。

とにかく、昨日の香ちゃんの少し『アンニュイな』雰囲気は、なるほど進路のことで何か抱えていたのが原因か。浦辺氏が福田パパに尋ねる。「進路って、一体何が？」福田パパはちょっと座り直して溜め息をついて「いや、あのね。香が少し前から外

国の大学に、、、留学したいって言っている。「それで父が猛反対と。」と、ハンセンさんがポンと手を前で叩く。「イヤ。『猛』反対とまではいかないんだが、、、」
「でも、とりあえず反対はしているんですね？」浦辺氏はそう言いながら客の帰ったテーブルを片付けに行く。福田パパが浦辺氏の方を振り返って「だって最近ますます外国って物騒な感じがするし、留学した日本人の若いコが『悪い事』ばかり覚えて帰って来るって聞くし。麻薬だとか、、、」「ま、そら確かに。分かります。」とハンセンさん。この人は大学を出た後、半年ほど『バックパッカー』でいろいろ外国を巡っていた。それも人生で最初の競馬で獲得した大金で具体的どこの国で何をしていたかは誰も知らない。ただ「インドで自分で撮った。」という写真の彼は『修羅場を潜った人を信用しない男』の顔だった。福田パパは今度はハンセンさんの方に振り返って「そう思うでしょ？」と賛同を求める。「それに、美術とかデザインの勉強したいとか言ってて、、、それなら日本でもできそうなモンだし。」

そこへイラストレーター鈴木氏が乱入。「いや、環境が変わるとケッコウ違うんですよ。あ、私こういう者です。」と言って名刺を差し出して福田パパの隣に一席あけて座る。ずっと会話を聞いていた様子。「やはり、日本でしか経験できないモノもあれば外国でしか経験できないものもあるんですよ。最近は留学をいろいろサポートしてくれる企業があるし、いいんじゃないですか？」

そこへハンセンさんが加わって「そうそう。でも人によっちゃヒドイ目に遭遇する。」ますますネガティブにしてどうする。福田パパ「やっぱり。だから反対しているんだけど、ちょっと娘とコミュニケーションが、、、」と肩を落とす。浦辺氏『カタカタ』とトレイに乗せた食器を運んで来た。「カッコイイじゃないですか。外国で美術の勉強。」と鈴木氏をチラリと見る。鈴木氏はそれに気付いて苦笑い。そうそう、この人はアメリカで某美術大学に通っていた。カウンターの向こうの流しに食器を運んで行く浦辺氏を見ながら福田パパは「美術なんてそんな『いかにも実力の世界』であのコがやっていけるかどうか、、、」と言う。すると鈴木氏は入り口付近のコルクボードを指差して「それなら大丈夫。私が保証します。」初対面の人間に『保証します』なんて言われても困ると思うが。指差した先には昨日香チャンが持って来た文化祭のポスターの縮小版が。

「浦辺君。あれ、昨日来てたこの人の娘さんの高校生が作ったんでしょ？」
「そう。よくココで見てると思うけど。昨日の『ハイジとクララみたいな』二人組のクララの方。」父親の前でそんな風に喩えるのもどうかと。とりあえず鈴木氏が話し続ける。「あれを昨日見た時、正直ショックでしたよ。本当に高校生の作品かって。」浦辺氏後ろに寄りかかって「どういう事？」と尋ねる。「ま、個人個人の好みにもよ

るんだけど、一時期本気でアートしていた人間から見て『本物のセンス』みたいなのを感じたね。多少荒削りだけど、構図、ラインの表現の幅広さ。悔しいくらい。高校生レベルを飛び越えている。」「へえー。」とそれを聞いて福田パパは驚いて「それ、本気で言ってるんですか？」「ええ。もちろん。悔しいくらい。」よほど悔しいらしい。「俺は以前アートを売る側だったこともあるけど、そこまでとはねえ。」と浦辺氏。この男、『元ロッカー』やら『元アートディーラー』やらいろいろ肩書がある。他にも何か有りそうだ。

ハンセンさんが突然『肩の凝りを訴える』左腕の突き上げを始めて曰く「でも本人が本気で将来アーティストになりたいのか、それとも単に『好きな事の研究』が目的で、将来の、、、就職の希望他にあるのか確かめた方がいいんじゃないですか？」「それもそうだ。」と、浦辺氏。福田パパは「でも、どっちにしろ留学したい事に変わりはないんですよね。」とまた溜息。「でも。その辺の親子の会話は必要でしょう。」と再び浦辺氏。「必要でしょう」とハンセンさん。さらに鈴木氏も「必要でしょう。」まるでエコー。さらに浦辺氏がからかうように、「パパがんばって。」続いてハンセンさん「がんばって。」やはり鈴木氏も続いて「がんばって。」芸歴の長いコメディアンのごとき以心伝心。でも良い大人のすることじゃない。福田パパはこんな三人に対し「危険な目には逢わせたくない、けど大好きな娘に『嫌われたらどうしよう』っていう葛藤って分からない？」と訴えるが、当然浦辺氏、ハンセンさん、鈴木氏子育ての経験なんてないから（鈴木氏は結婚はしたことはあるが）敬礼の仕種をして「理解しかねます。」「しかねます。」「しかねます。」だめだこりゃ。遠くで雷の音がして間もなく雨が降り出した。

突然ドア開いて4人組の20代ぐらいの男女がバカ笑いしながら入って来た。「いらっしやいませー。。」と、浦辺氏とハンセンさん。あからさまに雨宿りが目的らしい。一人は携帯電話片手に大声で喋っている。代表者一人をレジに残してその他は奥のテーブルへ。「あー、あれあれ、アイスコーヒー。S四つ。」その『あれあれ』って何だ？ま、とりあえず浦辺氏がコーヒー、ハンセンさんがレジ。流石は浦辺氏、慣れたモンであつという間にアイスコーヒー4人分をセット。トレイに乗せてその会計を済ませたお客に自分で持っていってもらおう。奥からはまたバカ笑いが聞こえる。それにしても『賑やかな』連中だ。さらにもう一人が携帯電話を取り出して大声で会話を始めた。耳でも悪いのか？

さて、福田パパの『親子問題』に戻る。「仮に、娘に充分外国でやっていける力があるとしても、やっぱり治安とか心配だ。鈴木さんは留学にさっきから賛成みただけど。」「大賛成。もったいない。あの才能を日本の閉鎖的かつ権威主義かつ何かと費用のかかる日本の美術界に吸収されてしまったら。」と、鈴木氏。日本の美術界と何かトラブルでもあったのか？ハンセンさんが腕組みをして、「でもねえ。確かに治安はねえ。気になりますよねえ。僕なんか無事に帰って来れたのが不思議なぐらい。しんどかった。」って、あんたの『バックパッカー一人旅』と優等生の留学を一緒にしたらいけません。そんな事言うからますます福田パパが『外国は危険』派に。「いやいや、最近は大抵の大都市には日本ごの話せる人を雇っている企業とか政府機関とか、あと病院なんかもあるらしいし、、、」と浦辺氏。続いて「それに大都市では在住日本人同士のネットワークが発達してて、日本人向けの情報誌とかよく発行しているんですよ。」と鈴木氏がフォロー。そこで福田パパ「浦辺さんは香の留学には肯定的なの？」と聞いてみる。「はい。良い経験になると思いますよ。香ちゃんはしっかりしてるし、英語の成績がクラスでトップだっていうし。他の成績もいいんでしょ？体育以外は。それに経済的に問題があってもあのコなら奨学金とかもらえそうな気がしますよ。」と浦辺氏が答える。

と、そこへ奥のやかましい4人組の中から『寝癖頭(?)』が一人カウンターにやって来て「あの、灰皿無いんスか？」と『ぶっきらぼう』に聞く。その無礼な態度に浦辺氏ちょっと『カチン』。「残念。吸いたけりゃ店の外に行ってくれ。」と『ぶっきらぼうに』答える。ちょっと大人気無い。ちなみにこの店は先代の頃から完全禁煙。店内にもそう表示してある。コーヒーや紅茶の香が汚れるからだとか、壁や窓が汚

れるからだとか、味覚や嗅覚が鈍くなるからだとか健康志向以外にもいろいろ理由はあるらしい。

『ガタン!』と音がしてふと店の奥を見るとソファ席に横になっている(!?) ヤツの足が角にある花瓶に当たってそれを倒したみたい。幸い花瓶は割れなかったが、お構い無しで何か可笑しいのかやっぱりバカ笑いをしている。それにオイ、もう一人がすでにタバコくわえて火をつけてるよ。それを見て『ロックンローラー』浦辺が切れた。たいがいのことには動じない『巨人』ハンセンさんも表情が変わった二人は「「ちょっと失礼。。」」と福田パパと鈴木氏に告げると『あからさまな殺気』を放ちながら、途中でハンセンさんは『寝癖頭』の髪をグイと掴んで引きずって（さすが巨人）動揺する3人の方へ。浦辺氏は『黄土色頭』の手から火のついたタバコをパッと左手で奪うと、そのまま右手の指でつまんで揉み消した。無言で店内に二カ所ある『完全禁煙』の表示をそれぞれ指差すと二人大きく息を吸い込んで「「出て行けえっ!!」」と一喝。彼ら曰く、あの手のバカモノには長いセンテンスを聞く集中力が無いから『一言で』済ますんだと。絶妙のタイミングで雷が轟いた。店内の他のお客から拍手が起こって、4人組はブツブツ文句を言いながら『強面店長』と『巨人』と目を合わせないように雨の中を走って撤収。最後の一人が外の傘立てを蹴飛ばして行った。

「お見事。」と鈴木氏が拍手で二人を迎える。福田パパは初めての状況なのでちょっと驚いた様子。「たまに来るんだよねえ。『若者と書いてバカモノ』が。」とハンセンさん。福田パパは少し心配そうに「いいの? あんなことして。」と尋ねる。浦辺氏曰く「こうした方が効果的なんですよ。（根拠は無い）あーゆー一連中は携帯電話で我々の想像以上にネットワークを拡げてるから『この店じゃ好き放題できないぞ』っていう情報があつという間に広がる。悲しいかな。結局一人じゃ何もできないんだ。集団で悪さするけど。」いささか極論な気もするが。「あーゆー一連中なんですよ。留学して悪い事ばかり覚えて帰ってくるのは。ドラッグとか。」と言いながらハンセンさんが思い出したように倒れた花瓶（実は自分が骨董市で『貴重品に違いない』と勝手に思い込んで買って来た。）を直しに行く。「留学の話に戻すけど、、、」と、鈴木氏。「治安に関しては今は日本もだんだん犯罪大国に成りつつあるから、どこ行っても同じかもしれませんよ。」続いて浦辺氏が口を開く「道德の無い若者。忍耐の無い人々。外国人窃盗団。今の日本国憲法が平和憲法だということは認めよう。しかし、今の日本が本当に平和か? しかもあれは、半世紀以上も昔に、ほとんど外国人に書かれたんじゃないー!!」と熱くなって両手を突き上げた。窓の外を見て。表はまだ雨が降っているが明るくなって来た。

あっけにとられている福田パパの肩を鈴木氏、ポンと叩いて「どうでしょう。ここは一度日本の外から日本と日本人について、ヒューマニズムについて深く考える機会を娘さんに与えては。」ちょっと大げさじゃない？「むしろ日本にいた方が悪い連中との接点ができやすいかもねえ、、、ケータイで。」と浦辺氏『ニヤッ』と福田パパを見て続ける。「大丈夫ですよ。香ちゃんなら。今出て行ったバカモノじゃないんだから。バカモノみたいな雰囲気もまったく無いし。ちゃんと育てた自身があるでしょう？」そして賛成派鈴木氏もたたみかける様に「サンフランシスコなら私に任せてください。私の母校があるし、ホテルを経営している知人とかいるから。」そんな二人の意見を聞いた福田パパ「させてもいいかな、、、留学。」と、ついに陥落か。「そうそう『欧米化』と『国際化』の区別もつかない大人が盲目的に英語崇拜しているこの国を外から見てもらいましょう。ちなみにアメリカ東海岸なら私の友人がいますし、あとウチ（『めたる屋』）にパリに詳しいのが一人いますし。」と浦辺氏。その一人とはマキさんのことか。しかし喜劇のセールスマンみたいだ。二人とも。

「でも、、、（福田パパ）」「でも？（浦辺）」少し間を置いて「長女の加奈子の方も大学院留学したがつているんですよね。」と福田パパ。いいじゃない。それもよく家族会議で話し合えば。「それに、、、」「それに？」「もし娘が外国人のボーイフレンドでも連れて来たら、、、どう対応していかが、、、」と、それを聞いたとたん浦辺、鈴木両氏が大笑い。「あはは！それかー！一番の心配事は。（浦辺）」「そんなのそんな時に考えればいいですよ。（鈴木）」「父親にとっては一番大事なんだよ。」と、福田パパちょっと恥ずかしそう。顔真っ赤。ちなみにこういう話になったらこの二人はほとんど相談役になりません。ハンセンさんがトレイにグラスを乗せて帰って来て「日本人女性はとにかく開国で男性にモテる一方で悪者にも狙われやすいっていうからねえ。気をつけないといけませんねえ。」と、話をフリだしに戻す気か。

雨はすっかり止んで、良い打ち水代わりになったみたい。幾分過ごし易い夏の夕暮れ。ハンセンさんが錆び落としスプレーと雑巾をもって表の自分の自転車を見に行く。大男のクセに折り畳み自転車。（福引きで当てた。）

月曜日。午後14時頃。真夏日。『めたる屋』店長、浦辺一樹は定休日なんだけども特にすることが無いので『めたる屋』の2軒となりの手作りパンとケーキの店『パラディ』へ行く。ちなみに起きたのは1時間前。初代店長の羽賀根氏の頃から『パラディ』よりサンドイッチ用のパンやらベーグルやら、あとケーキやマフィンの類いを仕入れている。「こんちやー。」と浦辺氏が洒落た内装の店内に入ると二人の女性客がいてカウンターには店長夫人がいた。「あら、いらっしゃい。主人に何か御用？」と言うと浦辺氏が答える前に内線電話でその主人を呼び出してくれた。2、3分すると階段を降りる音がしてカウンター後方の扉が開いた。山岸尚（やまぎしひさし）さん、60歳。『パラディ』の店長にしてこの商店街の権力者の一人。「おう、二代目。どうした？」と言うと他のお客に邪魔にならない様に浦辺氏と店内窓際にあるテーブルの方へ。「あのさ、ヤマギッさんのトコでバゲットって焼いてたっけ？」と浦辺氏が尋ねる。「バゲット？ああ、あの『長パン』か、以前はよく焼いてたけどなあ。何に使う気だい？」「いや、新しいサンドイッチに使いたいなあ、とって、、、」と浦辺氏。実は浦辺氏、このヤマギッさんの前だと何故だか恐縮してしまう。昔近所にいた『おっかないオッサン』によく似ているんだそう。「あそこでサンドイッチに使うんならバゲットよりも同じフランス流で『ヴィエノワ』か『バタール』のライスの方がいいんじゃないかねえの？ま、確かにバゲットの方が安上がりだけど？」何故かニヤニヤ笑みを浮かべている。

「う～ん。」と浦辺氏が迷っていると、「ま、イッペン自分で喰ってみろや。」と浦辺氏半ば無理矢理『パン工房』に連行される。その辺にあったパイプ椅子に座らされて浦辺氏『天然レーズン酵母にこだわって約40年』のパン職人の仕事を観察させられるハメに。中ではヤマギッさんの息子さんとその奥さんと思われる人と、3人のバイトの人が作業をしていた。帽子が無いので浦辺氏その辺にあったタオルを頭に巻かれる。で、数種類の生地をこねたり発酵させたり形を整えたり、また発酵させたり、その間浦辺氏には手伝う事は許されずタダ見ている。でも自分でも何か作りたくてしようがない様子。で、さすが職人。店内に告知してある『次回の焼き上がり時間』ピッタリ、17時30分に完成。『パン工房』には空きっ腹にこたえる香ばしいパンの香が充満している。浦辺氏の口の中は唾液が充満。

通常よりも小さなバゲットとヴィエノワとバタールが一個ずつ。店長の責任を果たすべく、他の従業員の指導者たるべく、あと仲が悪いわけじゃないが『どこかの主婦

』に差をつけるべく、例の『サマースペシャル』をよーく頭の中でイメージして、さらに挟む具の味を思い出して試食する。『めたる屋』初の『サブマリン型』にしたかったのでバターのスライスは却下。残るは素朴で安上がりのバゲットか、それよりも柔らかく少々甘みのあるパンヴィエノワか。またしても「う～ん。」と浦辺氏が迷っていると「ホレ、2代目。今朝多めに焼いたから持ってけ。がははは。」と『ピタパン』を数枚ビニール袋に詰めてくれた。浦辺氏は充満する各種パンやらマフィンやらの香りでかなり食欲を刺激されていたのでその場で一枚いただく。そして『ガクっ』と浦辺氏床に崩れ落ちて「これや、この手があったんや。」と、いつから関西の人になったのか？その脇でヤマギッさんは「がははは。」と笑いながらその様を見ている。「今日の午前中によ、『主婦の噂』で2代目の考えた新しいサンドイッチの噂が流れてきてよお。」「主婦の噂？、、、や～ま～だ～。（怪談話風）」ゆっくりと顔をあげる浦辺氏の脳裏に山田マキさんのVサインの笑顔が浮かんだ。ヤマギッさん、また「がははは。」と笑って、「ま、噂の提供者のその主婦と考えたんだがよ、ピタの方がいいだろ？」浦辺氏は床に崩れたまま苦笑いを浮かべて「負けた、、、」と呟く。ヤマギッさん、それを聞いて「負けたんじゃねえよ。先を越されたけど。がははははは。」

「というわけで、2代目。今喰ったパンの代金はいいから（え？始めからタダじゃなかったの？）一杯付き合え。」このヤマギッさんはお酒が入ると誰それかまわす『説教』したり『社会批判』聞かせたりすることで有名。しかも長い上に「もう終わったかな？」と相手が思うと「お前ちゃんと聞いてたか？」ってまた繰り返すこともしばしば。何にせよ浦辺氏、近所の居酒屋へ引きずられて行く。「助けて～。」

レジには山岸夫人。諦めてます。止めようともしません。笑って引きずられて行く様を見届け、レジの前に列を作っているお客さんの相手をする。蒸し暑い夏の夕方。熱帯夜になりそうだ。

なんとか暑い夏が過ぎて9月某日。でも日中はまだ暑い。火曜日の夕方。『めたる屋』店内には浦辺氏と二人の巨人、ハンセンさんと平川クン。嘘か本当か知らんが大学の方は午前中の講義だけだったらしい。食器を洗いながら平川クン「まだレーコちゃん受験生なのにバイト続けるンですかね?」とカウンターを拭いている浦辺氏に尋ねる。「さーね。何だ?新しいバイト探すのかってか?それも君よか年上で美人の女性を?新しい出会い探しなら他でやってくれ。」さらにハンセンさんが笑いながら加わって「そうじゃないと意地悪なオッサンと世話好きな主婦の恰好の餌食になっちゃうねえ。」「イヤ、そーいう意味で聞いたンじゃないっすよお!」と平川クン。でも少し期待してたろ。

『カランコロン』とドアが開いてバックパックを背負った男性客が一人やって来た。「よお、ウラベー。久しぶり。」「おお、よく来たな。このJリーガー。」と、『Jリーガー』と呼ばれるこの人、本物のJリーガー。赤戸玄白(あかとげんぱく、すげ一名前)。34歳。浦辺氏の高校時代の同級生らしく、現在プロサッカーJリーグ一部、『さいたまフレイムス』の人気選手。若い頃には日本代表にも選出されている。『めたる屋』には今日が初来店。「ずうっと来ようと思ってただけどさ、なかなか機会がなくてね。やっと来れた。」とカウンター席に座る。「何だ?じゃ、サッカー界は今暇なのか?」と浦辺氏。そんなことはなかろうに。リーグ戦もカップ戦も後半戦に差し掛かっている。「はっはっは。」となんか知らんが赤戸選手は笑っている。その一方で平川クンが石化している。奥の戸棚の中をいろいろ補充していたハンセンさんが気が付いて平川クンに「どうしたン?」と声をかけると、長身の平川クン、柳の枝のごとくヨロヨロ動き出して赤戸選手の前へ。「あ、あの今後も宜しくお願いします、、、じゃなくてあの、その、宜しくお願いします。」大丈夫か?どうやら憧れの有名選手を前にしてかなり緊張しているらしい。とりあえず握手。

「ん?何か飲む?一応喫茶店なんだけどさ。」と浦辺氏。すると「あのバンドー筋だったウラベーが喫茶店ねえ、、、」と赤戸選手、カウンターに肘をついてニヤニヤする。「それを言うな。いろいろあったんじゃ。」と浦辺氏が返す。

「とーりあえず、ブレンドコーヒーいいかな?」「サイズは?」「一番安いの。」人気サッカー選手とはいえ儉約家なのか、それとも味を信用していないのか。浦辺氏、「安心しろ、おごりだ。」とコーヒーを入れながら「ハンセン、こちら、高校生の同級生で、サッカー選手の赤戸。」と彼を紹介する。「柏田です。ヴァイスプレジデントと呼んでください。」とハンセンさん、あまりサッカーには興味無いが自

己紹介。「あ、どうも。ウチのディフェンダーよりもデカイな。」

浦辺氏は「最近、フレイムスどう？ 確か今リーグ3位だっけ？ 優勝できそうか？」と話しかけ、コーヒーを差し出す。赤戸選手は「まだまだ可能性はあるよ。6位までがかなりの混戦状態だし、来月には首位の『横浜』と直接対決があるし。」と答えるが「しかし、、、」と言うとコーヒーを一口飲んでマグカップを両手で包み込む様に持った。「「しかし??」」と浦辺氏とハンセンさんが同時に尋ねる。平川クンはカウンターの方をチラチラ見ながら店内の奥の方で片付けをしている。「、、、俺が若い選手や外国人選手の動きについていけなくなって来た。おそらく監督も気付いてる。実際ここ7試合『途中交代』だし、、、」「そのうち『途中出場』になるかもねえ。」とハンセンさん、ますますネガティブなことを言う。「そうなんだよなあ、、、」と赤戸選手すごい溜息。浦辺氏は元同級生としてなんとか励ます言葉を探すが、「まだ34歳だぜ?、、、なんとか、、、34か、確かに難しい年頃だな。結局お前次第か。赤戸。」と、上手い表現ができず。赤戸選手、また溜息をついて、「実はそのことで相談したかったんだよ。『関係者以外』の誰かに。まだまだいけるつもりでも『上の人たち』はケッコウ冷たいからな。この世界。チームも若返りを押し進めるみたいだし。どうする？」と先程の気さくな感じとは違い、大分悩んでいる様子が浮かび上がって来た。

「どうするってもなあ。分からんよ。専門家じゃないし。超人的な身体能力のお前でもフォワードはもうキツイか。いっそポジション変えれば？ あ、いらっしゃいませー。」と浦辺氏、とりあえずコーヒー豆とサンドイッチを買いに来た客に早めの対応。「平カーくん、ハンセン、チキンサンド2つ頼む。」平川クンとハンセンさん、二人の大男がテキパキとサンドイッチを流れ作業で作る。会計をパッと済ませて浦辺氏はまた赤戸選手のところへ。「まるで司令塔だな。」と頼杖をついた赤戸選手。「かつてサポーターから『バーニングキャノン』なんて呼ばれて年間得点王になった俺としてはフォワードにこだわりたいのが正直なところだけど。わかんねえよ。」「なんだ？ すでにポジション変えるように提案されたか？」「ああ、コーチのマルクスに。守備的ミッドフィルダーやってみないかって。さらに、、、」「さらに？」「ここだけの話、まだ誰にも知られていないんだけど『東京ヴェロシティー』から誘いが、、、」

「まじっすか!？」と平川クン、顔だけこちらを見ている。サンドイッチ用意しながら叫ぶのはどうかと唾が飛ぶよ。唾が。「君は目の前の仕事に集中。」と浦辺氏、店長らしいことを言う。ポジションチェンジが移籍か、はたまた引退か？「わからねー。

どうしよう。カッコいいサッカー選手って何だ？ サポーターの望みって何だ？」「だから俺にもわからんテ。少なくともまだ解雇されたわけじゃないんだろ、、、今のところ。」試合中の勇ましいオーラーはどこかに消え去り、サポーターにはあまり見せられない姿。まるで映画『ゴッドファーザー』の登場人物、ジョニー・フォンテーンの様だ。お話の初めの方ね。あのドン・コルレオーネに助けを求めに来る、、、って見てないと分かんないか。紙袋を受け取ったお客さんが店を出て行く。

「ありがとうございましたー。」と挨拶をして平川クン(少しは緊張がほぐれたか?)がカウンター席の赤戸選手の前に来て「あのワールドカップフランス大会の最終予選の最後の試合。すごいシュートしたじゃないですか。相手ディフェンダー二人を背負いながらも斜め後方から来たボールを大きく胸トラップして『振り向きざまシュート』。しかも『落ちる』シュート。あれ、試合の翌日、当時の男子中学生みんな真似しようとしてましたよ。」と嬉しそうに語る。

当時中学生? 赤戸選手、少し気になって聞いてみる。「君、今いくつ?」「21歳です。」少し間を置いて、「はあ～あ。歳とったなー。オイ、ウラベー。」と両手の指を頭の後ろで組んで反り返る。

『カラン』とまたドアのカウベルがなって、お客さんかと思ったら、蟹の様に横向きになってパン屋のヤマギッさんがプラスチックのパンの容器2段を両手に抱えて入って来た。その姿勢で歩いて来たのか? 2軒隣から。「よ。二台目。わりいな、変な時間に。」「連休取るんですって? ヤマギッさん。赤戸、ちょっと失礼。」浦辺氏はパッとカウンターから出て行ってヤマギッさんからパンの容器を受け取る。

「ああ、『ドクターストップ』ってやつだ。左足に違和感が、、、なんてな。がはは。」どこかのスポーツ選手か。この人の場合、ドクターストップは9割がた『通風』の再発。「大事に保管して明後日までに何とかやってくれ、その後は息子に任せてあるから。」とりあえず2段になっている容器をカウンターの向こうの邪魔にならない所に置いて浦辺氏が尋ねる。「『その後は』って今回はけっこう長いんですか?」ヤマギッさん、後頭部をゴツイ右手で掻きながら「ん?今回は通風(やっぱり。)だけじゃなくて(他にもあるのか。)結石の疑いもあるからなあ、、、よく分からん。」少し離れた所からハンセンさんが「そろそろ『引退』ですか?」と茶化す。引退という言葉に赤戸選手がピクと反応。「けっ。まだまだいけるぜえ。お客が入る限り、体が動く限り。俺にも意地がるからなあ。何の迷いも無い。」と胸を張って見せるヤマギッさん。年齢に不相応な胸板と上腕筋。さすが『天然レーズン酵母にこだわって約40年』。ヤマギッさん、少し真面目な表情になって続ける「それにな、まだまだ息子に見せて教えることが沢山あるしな。それが年寄りの役割だからよ。ま、俺のやり方だけを押し付けるつもりはねえけどな。がはは。」

そしてヤマギッさんは奥に置かれたパンの容器を指差して、「その2段目に白い箱が入ってるだろ? うちの新商品の試作品が入ってるから良かったら喰ってくれ。」浦辺

氏が一段目をどけると確かに『パラディ』のケーキ用の箱の中に小型の可愛らしいモンブランが4つ入っている。「これ、、、本当にヤマギッさんが作ったんですか?」と疑わし気に浦辺氏が尋ねると「俺じゃねえ。息子が作ったんだ。あいつはパンよりも洋菓子の方頑張ってるなあ。『パテしえ』って一のか?よく分からんが。よくできてンだろ。がはは。」浦辺氏、ハンセンさん双方の脳裏を『この親バカが』という台詞がかすめたが口にする度胸はありません。「あいつの作る洋菓子は確かに若い女性に人気だし、俺の苦手な分野だからこれから『パラディ』も進化するだろ。『変化』じゃなくて『進化』な。ここの商店街もいつの間にか『いんたーねっと』に『ほーむペーじ』持ってるしな。この店もちゃんと紹介してあるんだぜ、知ってたか?じゃ、またな。」と左足の痛みをかばいながら店を出て行く。もちろんあまり商店街の会合に出ない(ほとんどマキさんに行ってもらってる)浦辺氏、ホームページのことなんてすっかり忘れていた。

カウンター席中央では『ほったらかし』にされた赤戸選手がパン屋のオヤジの出て行く様子をジッと見ている。そして「そっか。」と一言。「ん、どーした?あ、平カーくん(*平川)、このパンとかいつものところにしまっておいて。」と言いながら浦辺氏が元同級生、赤戸選手の前に戻って来る。「そーだよ。悟った。ってか、覚悟ができたかな。」と赤戸選手は一人で納得しています。表情も明るくなった。それを見て浦辺氏「一人で納得してないで、なんとか言え。」と言う。

赤戸選手はコーヒーを少し飲んで、咳払いをする。「いや、あのな、俺の理想のサッカー選手像ってさ、やっぱりひたむきでまっすぐで、ファンの望む結果をキッチリ出す選手なんだよ。俺にもまだサポーターがいるし、まだフレイムスで好きなサッカーができる。国内最高の舞台上。俺にも意地があるからさ、ピッチに立てる限りチームの勝利を目指していればいいんだよ、ポジションが変わっても。勝利が最高の結果。俺にもサポーターにとっても。それに俺の体がダメになってきているとしても『元得点王』のスキルを若い連中に叩き込めば、、、『フレイムス』の進化の為に、サポーターのために。」

「ま、そーんなもんかな。」と浦辺氏。「どんな名選手も必ず最前列から引退するわけだし、指導者として活躍してファンを喜ばせることも『有り』だし。恥ずかしいことも何もないわな。」

とにかく現役にこだわり移籍を選ぶ選手がいる。ボロボロになる姿をファンに見せたくない『潔い引退』を選ぶ選手がいる。チームの勝利や出場機会の為にポジションのこだわりを捨てる選手がいる。どれが正しい選択なのかは赤戸選手にも浦辺氏も決める権利は無い。ただ、自分のしていることに対する迷いの無い選手の方が迷いな

がらプレーしている選手よりもカッコイイことは確かだった。

「そ。妙な意地が行き過ぎたプライドになっちまっていたんだなあ。で、恥の感覚が何処かから芽生えちまった。何か楽になったな。あの『パン屋』に後でお礼に行こうかな？」

それを聞いたハンセンさん、「あー、それは止めといた方がいいよお。ヤマギッさんは根っからの野球ファンでサッカーを『西洋かぶれ』扱いして嫌ってるから。」と伝える。そういえばハンセンさんは過去にヤマギッさんの大好きなプロ野球チーム『東京ガーディアンズ』の不調を馬鹿にして激しいお怒りを買いました。ところでパン屋という職業は『西洋かぶれ』のにならないのか？

「『バーニングキャノン』の後継者探しか、、、何かカッコイイな、おい。お前本当に俺の同級生か？ハハハ。」と浦辺氏が笑う。「カッコイイっすね。」と平川くんが奥のキッチンから出て来る。で、また握手。「頑張ってください。」「おう、まずうちのミューレル(若いブラジル人選手)の性格を直す。あいつはチームプレーができる様になればヨーロッパのクラブでも通用しそうな力がある。」

浦辺氏がニコニコしながら二人の会話を聞いている。

「よし、悩み解決。わざわざ来た甲斐があった。あ、ウラベー、これ前から約束してたやつ。店に飾るんだろ」と、赤戸選手はバックパックの中からサイン入り色紙を取り出した。

『めたる屋さんへ、さいたまフレイムス9(*背番号)赤戸玄白 本日全品半額!!』

浦辺氏ズッコけた。「この最後の一言はなんぞ?」「昔憧れた選手がやってたんだよ。このジョーク。こうして彼のサッカー魂も生き続けるってもんだ。」と、赤戸選手。さっきまでの溜息をついていた姿が嘘みたいだ。でもそのジョークはサッカーと関係ないぞ。とりあえず『最後の一言』の上にピンクの蛍光ペンでバツを書く浦辺氏。それを見ながら赤戸選手「カッコイイっていえば、ステージに立ってるウラベーもスゲーカッコよかったんだぜ。もう未練はないのか?音楽には?」と心配する様な表情で尋ねる。間を置いて浦辺氏が真面目な顔つきになって何か言おうとすると、勢い良くドアが開いて学校帰りと思われるレーコ嬢と香嬢がやって来た。

「カズさん、ハンセンさん、平川さん、それから、、、えーとお客さん(*赤戸選手のこと)、こんにちはー!」「おー、どうしたいきなり?(浦辺)」レーコちゃんは嬉しそうに話続ける。「私たちこないだの全国模試の結果が良かったから親の承諾を得ました!」得ましたって、何の?レーコちゃんはキョトンとする一同を無視してさらに喋り

続ける。「ここでバイト続けます。私にも『看板娘』のプライドがありますから。(一同は心の中で『いつから看板娘に!?!』)勤務時間は確かに減らさなきゃだけど、その分は香が埋めてくれるのでご心配無く。」

浦辺氏が眉間にシワを寄せて「いいの香ちゃん?」と尋ねると「はい。父にも話しました。私もできるだけ留学費用を自分で稼ぎたいし、父は『カズさんのところなら大丈夫だろう』って。何か信頼されてますよ。」困った様な嬉しい様な表情の浦辺氏。

「ま、いーか。」そしてハンセンさんが平川クンの肩をポンと叩いて「綺麗なお姉さんはしばらくおあずけみたいだね。」とボソッとと言う。平川クン「だから違いますって!」と、慌てて反論。「カズさん、ちょっと水もらいますね。」と、レーコ嬢と香嬢二人でカウンターを通過してキッチンの冷蔵庫の方へ。赤戸選手が彼女達を目で追いながら「元気なお嬢さんだね。バイタリティーの塊みたいな。」と少し笑みを浮かべて言う。

「じゃ、俺そろそろ行くわ。」「おう、また来いや。バーニングキャノン。」『フッ』と笑って赤戸選手が出て行く。突然キッチンの方から「あー!」と、レーコちゃん。「どーした!?(浦辺)」「かわいー!モンブランがあるー!いただいていいんですかあ?」浦辺氏、半ばあきれて「好きにしたらエエ。」

10月某日。水曜日。雨のち晴れ。だいたい午後13時。『めたる屋』店内には浦辺氏とハンセンさんと『基本的に平日のランチタイム限定』のマキさん。それからお客さんが数人。まだまだランチタイムの時間帯とはいえ、この辺界隈には他にも飲食店があるので『どちらかというところ軽食屋』扱いの喫茶店『めたる屋』は3人の従業員でなんとかやっていけるようである。それに必要最低限の人数で切り盛りしているので財政的にもなんとか大丈夫みたい。でも今日のようにオバチャンの団体が続くとけっこうしんどい。そんな時に限っていろいろ食材の発注確認の電話があったり、郵便配達が入って来たり、しかも何か海外からの。忙しくてまともに相手してられません。

今日5組目のオバチャンの団体の注文が一段落してカウンターでホッとする浦辺氏。その前のカウンター席には常連客、某TV局スポーツ担当アナウンサー、永井美里(ながいみさと)さん、29歳、が座っていて、カプチーノの入ったマグカップを肘をついた両手で持っている。「珍しく急がしそうですね。」

「『珍しく』とはなんだ。でも確かに今日はシンドイな。外で韓国人俳優のイベントか何かやってんのか?」と浦辺氏、グラスを拭きながら窓の外を見る。そこへ「どいた、どいたー。」と時代劇調でハンセンさんが両手にグラスやらその他食器やらでいっぱいになったトレイを持って浦辺氏の後ろを『ガチャガチャ』と音をたてて通過。食器洗い中のマキさんにパス。

永井アナが浦辺氏に尋ねる。「あのさ、カズさん今の仕事やって『このままでいいのー?』みたいなことってあります?」いきなり何だ?と思った浦辺氏「ああ、しょっちゅうあるよ。『このままでシアトルカフェ系の連中に勝てるのー?』って。」永井アナはちょっとズッコけた。「い、いや、そうじゃなくて、、、」その彼女の表情を見て浦辺氏ピンときた。「どした? また仕事上の悩みかい?」 「あ、わかります? 最近、念願だった『サッカーメイン』のスポーツ番組を始められたのは良かったんだけど、、、」

そこへ「永井先輩すいませーん。遅くなりましたア。」と勢い良く田中陽子(たなかようこ)さん、24歳がやって来た。同TV局の人気女子アナ。永井アナ程の出番は無いが最近『朝の顔』になりつつある。彼女は永井先輩をたいそう尊敬しているらしく、永井アナと同様に首から携帯電話を下げ、似た様なメイクをしている。が、顔つきがハッキリ言って幼い。ちなみに浦辺氏とハンセンさんは過去にこの二人にサインをねだっております。

田中アナは永井先輩の隣に座って、「カズさん、クランベリーマフィンまだ残ってます? じゃ、それとブレンドコーヒー、Sで。」とオーダー。マキさんもハンセンさんも手が離せないで浦辺氏が一人で会計を済ませてコーヒーを入れてマフィンを出す。「はい、どうぞ。で、永井ちゃんはサッカーの番組がどうしたって?」と永井アナに中断した話の続きを促す。「私にはよくある事なんだけど、、、デスクの人たちの出す原稿に納得がいなくて、、、でもディレクターの趣向もあって、仕方なく『読みたくもない文章』を読んでるみたいなの。で、私このままでいいのかな? って。」「例えば?」と浦辺氏はまたさっきと同じグラスを拭いている。

「例えば、どこかのスター選手がちょっとボールに触っただけで『得点の起点になりました』とか、人気選手がたいした活躍もせずに交代しても『チームの勝利に大きく貢献しました』とか、単なる警告ギリギリのラフプレーを『闘志溢れる熱いプレー』と形容したり、、、どう思います?」「ははは。それね。俺もたまに『なんだかな』って思ってるよ。おおっと。」と浦辺氏は傍を通過するハンセンさんを上手くかわす。「でも、国民の多数派はそういう『前向きな』形容を期待しているんじゃないの? 番組スタッフも単にミーハーの集まりじゃないだろう?」と浦辺氏『あまり気にするな』といった感じで答える。ちなみによく例のグラスを拭き終わったと思ったらまた同じの拭き始めた。「それに、、、」と永井アナがマグカップの中を覗き込みながら「日本代表の試合にはあんなに時間を用意してくれるのに、国内のJリーグの試合結果なんて殆ど動く映像無しで、、、あったとしても人気チームのカード、一つか二つで、、、国際試合の度に『国内のサッカーをもっと盛り上げましょう』みたいに言っても結局は『欧州組』の選手やアメリカのMLBでプレーする日本人選手の映像が優先されて、、、こないだなんてイングランドの男前選手がCM撮影で来日したってだけでかなりJリーグの枠を削られたんですよ。」と言って上目使いで浦辺氏を見る。浦辺氏、目の大きな女性の上目使いに弱いのでちょっとドキッとした。しかし、さすが女子アナ。長〜く、一気に喋る。浦辺氏「ん〜。花形職業もいろいろあるんだね。」とあたりさわりの無い返答をするが表情は『同感』を表している。そして例のグラスがやっと後方の戸棚の中へ。

すると、それまで幸せそうな顔をしてマフィンを頬張っていた田中アナが会話に参加。「さすが永井先輩。ちゃんと自分の意見持ってるんですね。」「持っても放送に活かさなきゃ意味無いわよ。」と永井アナが溜息をつく。「私が間違ってるのかな?」「ままま、永井チャン。そう深く考えなさんな。」と浦辺氏がカウンター越しに永井アナの肩をポンと叩く。田中アナがそれを見て、「永井先輩は『若い頃』か

らそんなにいろいろ真剣に考えてたんですか?」と尋ねる。永井アナ「今も充分『若い』でしょ?」と答える。まずはそこが気になったか。「あんたも何も考えてないわけじゃないでしょ? 最近はどこかの野球選手との噂が立って大変みたいだけど?」と『意地悪姉さん』みたいな表情を浮かべるが、少しは明るい顔になったか。田中アナ「あ、アレは、やだ、アレじゃなくて『彼』はただのお友達ですってば。」と凄まじい動揺を見せる。そこへ「何何何? 例の野球選手の話?」と食器洗いが一段落した『ゴシップ大好き』マキさんがタオルで手を拭きながら参加。「あ、山田さん。お疲れさま。」とマキさんに挨拶をすると永井アナは後輩田中を見ながら「そーいえば、朝のニュースやってた頃は大物芸能人の結婚とか離婚の報道がスポーツよりも大事にされてたっけ、、、」と言う。そーいえばそうか? ま、確かに朝のニュースでわざわざやる事でもないわな。

「でも民放ニュースに携わる人って大変よね。」と、マキさん。「だって顔の見えない不特定多数の人を相手にするのに加えて、視聴率の事も考えなきゃいけないわけでしょ? で、どこも報道する出来事なんてたいして変わらないんだし、、、」「そーなんですよお。山田さ〜ん。」と永井アナ、眉毛が『ハ』の字になっている。そこへハンセンさんが左腕をぐるぐる回しながらやってきて会話に参戦。「女子アナの発言力ってどんぐらいなの?」田中アナ曰く「みなさん親切にしてくれますけど、、、?」いや、そういうことじゃなくて。永井先輩曰く「土橋さんぐらいのベテランになれば別ですけど、制作スタッフの殆どは男性だから私が何か言っても『女は黙ってろ』みたいな雰囲気がありますね。人気者を御神輿に乗っけて担ぐだけじゃなくて、私は沢山の人にもっと『いろいろ』伝えたいだけなんですけどね。チームの不調のおかげで活躍が目立たない選手とか。」「これだから男は、、、。永井さんっていう人気者を御神輿に乗せとけばいいとしか思っていないのよ。」とマキさんが前で腕を組んで、「でも、より沢山の人に伝えるのだったら、より沢山の人を知りたい事を優先するのは自然な事なのかもね。つまり多数派向け? 一般向け? 質はともかく。」と、言う。「そだね、」とハンセンさんが口を開く。「あの外国で事故があった時とかに『日本人は含まれておりません』ってまず報告するのと一緒だね。」解り易い様な、解りにくいような。

「永井先輩は人気者だから出番が一般向けの時間帯がほとんどですもんね。新しいサッカーの番組も一応深夜枠ですけど『最近は深夜も手を抜けない』ってみんな言ってますもん。(田中)」「ちょっと、私は手を抜くつもりなんてないわよ。(永井)」「ま、その土橋さんぐらいになるまで、今は『これも報道の勉強』だと思って耐

えるしかないんじゃないの？大丈夫、我々がいつでも永井チャンも愚痴を聞いてあげるから。」と浦辺氏が『いい人そうな事』を言う。「そうそう。」とマキさん。「土橋さんぐらいまでか、、、私、それまでに結婚できるかしら？」と永井アナ。冗談とも真剣ともつかぬ。『めたる屋』従業員一同は適切な反応の仕方が分からず。田中アナは「あはは。できますよお。」とあっさり、軽〜い感じで言う。

と、その時、永井アナ、店内に飾ってある赤戸選手のサイン色紙が目に入った。「そうだ、カズさん赤戸選手と仲がいいんですね。よかったら紹介してくださいよ。」と言う。浦辺氏「赤戸？いいけど、アイツもう結婚して子供もいるよ？」と返す。「そーゆう意味じゃありません！」永井アナ顔真っ赤。一同大笑い。「イヤ、あのいつかベテラン選手の特集をやりたいんですよ。できたら毎週一人か二人。最近はやたら若い選手のデビューばかりもてはやされてるから、他の局が手をつける前に。赤戸選手独占インタビューなら『観客動員数日本一』のフレイムスですからね。偉い人たちもそこそこの数字を深夜でも出せると思うはずですよ。」「それにフレイムス、カッコイイ選手何人かいますもんねー。」と田中アナ。なんかポイントがずれてますな。ちゃんと永井アナが教育しないと女子アナの悪いイメージを増幅させそうだな。いいコなんだけどね。

浦辺氏、「ははは。」と笑って「なんなら今から赤戸に電話してみようか？あいつスッゴイ機嫌悪いと思うよ。どこかのスポーツ新聞に『ついに引退か？』みたいな事勝手に書かれたから。ははは。」と言って店内のファックス付き電話の受話器を外す。「いや、今じゃなくてもいいですよお。」と手を振って浦辺氏を静止する永井アナ。「正直なところ私、赤戸選手の大ファンなんですよ。(平川クンに続いて君もか。)カッコいいんですよ、彼は。今でも。あのピッチでのリーダーシップとカリスマ性、試合中のあの勇ましい表情、、、」浦辺氏はそのカリスマ赤戸選手が先月来た時の『悩んで困り果てた姿』について教えてやろうかと思ったがファンのイメージを崩してはイカンと思いやめた。その代わりに「まだ引退しないだろうが、あいつ来年からポジション変えるかもね。」とだけ機密情報を教えた。

ハンセンさんが思い出した様に、「時に、テレビの人ってひいきのチームとか『アンチ』とかあるの？」と言うと、永井アナ曰く「ありますよー。サッカーにも野球にも。公言はしませんけど。」「じゃ、なおさら原稿読んでてストレス溜まるわけだ。」と浦辺氏「好きでもないチームに『優勝おめでとうございまーす』なんて。ははは。」「その辺は全国ネットの宿命だと思って『我慢』してます。一般的に平等に番組やらないと。」と永井アナ。「それができるならこれからも心配なさそううだ。」と浦

辺氏、『ニッ』と笑って永井アナを見る。永井アナは一瞬キツネにつままれた様であったが、すぐに納得した。「そっか、、、でも、あからさまに人気者だけをひいきするような体質は少しずつ変えていきたいと思います。同志でも募って。」かなり野心家な目つきになったが良い輝きを放っている。

すると田中アナは「私はたまにスター選手にインタビューできるだけで幸せ。」と幸せそうに言う。それを聞いたマキさん、ちょっと考えてから「田中さんってサ、ケータイが普及する前、TVドラマの電話の音を自分の家の電話の音と勘違いしたことよくあるでしょ?」と尋ねる。「え? なーんで分かるンですかあ?」「分かるのよ。(山田マキ)」浦辺氏、永井アナ大笑い。

『人は幸福を求めて生きる』と言うが、『知って幸せ、知らなくて幸せ』ってことがあるわけですが。報道という職業は人々に、あらゆる情報とその中身を自分自身で吟味、選択する機会を与える職業という認識で良いだろうか。不誠実な嘘が無い限り、『知りたい真実』も『知りたくもない真実』も聴く者、見る者の自由意志による『信じる』という行為の結果によるモノだが、結局『大勢という超人』による常識の支配がモノを言い、喜ばれるということか、、、しかし、皆が同じ方向ばかり見ていたら背後に在る脅威になかなか気付けない訳だから、、、で、困った事に彼らは限られた時間で『他人の注意や好奇心を惹き付けながら伝えなければいけない』ということ。何にせよ、『大勢』と違った視野を持っていると『ハードロッカー』的なカッコよさがありますね。

突然オバチャン達の団体が一斉にガヤガヤと席を立ち始めた。

「「「ありがとうございましたー。。。」」」勤務中であることを思い出した従業員3人。

「しかし、いったいなんなんだ?今日は?」と、浦辺氏は首をかしげてハンセンさんとテーブルに残された食器を片付けに行く。すると田中アナが「今日、この近くで最近話題のイケメン演歌歌手の『シークレットライブ』があるんですよ。私、ここに来る前にウチ(*某TV局)のID使って潜り込んでサインもらってきちゃった。あはは。」と体をひねって店の奥のテーブルに向かう浦辺氏に言う。永井先輩「あんたねえ。演歌に興味無いクセに。それで遅くなったのね。」と注意する。浦辺氏、食器をトレイに乗せて戻って来て「シークレットライブなのに知られてるのか。相変わらずレコード会社の考えることは解らねえな。」と言う。『流し』でスタンバイしているマキさんに食器をパス。マキさんは「私も行ってこようかしら?」などと言う。最前列で演歌歌手に声援を送るマキさんを想像して浦辺氏が「似合わね〜。」と一言。「冗談に決まってるじゃない。」とマキさん浦辺氏の腹部にヒジ打ち。それを見た田中アナ「新しい『仮面レンジャー』の俳優さんなんてどうですか?」と尋ねると、マキさん『パッ』と振り返って「あの人イイよねー!」と嬉しそうに答える。ハンセンさんがその脇で「男前かもしれないけど、あの『レンジャー』ハッキリ言って弱そうだ。」と辛口コメントをする。って、アンタも見ているのか『仮面レンジャー』を?「あれならまだ『マサノンちゃん』の方が、、、」それが誰かは今は秘密。

「しかし、誰のファンになろうと、ファンでもないのにファンのフリをして有名人の写真を撮ろうとかまわんがサ、どうかと思うよ。最近の日本人は。」とその日本人であるはずの浦辺氏が窓の外を眺めて言う。オバチャン3人が嬉しそうにさっき店を出て行ったオバチャン達と同じ方向に歩いて行く。浦辺氏が続ける。「二枚目韓国人俳優に群がって『きゃー』、二枚目サッカー選手に群がって『キャー』、美人テニス選手に群がって『きゃー』、、、」「でもウラベツちゃんのタイプだよねえ。あのテニスの人。」と古い付き合いのハンセンさんがツツこむ。「ま、確かに。が、それは置いといて、、、」と浦辺氏、ちょっと顔を赤くして両手で何か物体を右から左へ移動させるような動作をする。

「凄かったですよ。練習用のコートに群がって、み～んなでケータイのカメラで写真撮ってるの。異様ですよ。何かの宗教みたい。」と永井アナ。「ファンなら写真撮りたくなくて普通じゃないですか?」と田中アナ。「本当に選手本人とその競技のファ

ンなら練習の邪魔になる様な事しないだろう。大事な大会の最中に。フレイムスのサポーターを見てみる。ちゃんと『見る側のルール』を守ってる。ま、一時期負けが込んでタチが悪い時期があったけどな。(浦辺)「さすがロックンローラー。流行に噛み付くのが好きね。でも、私もカズさんに少し同感かな。(山田)「別に『流行』を嫌ってるわけじゃないよ。『自分の基準』で善し悪しを決めているだけだ。(浦辺)「ロックンローラーだねえ。ルーブルのモナリザに群がって作品をロクに鑑賞しないで記念撮影だけ楽しんでた日本人も似た様なもんかねえ。(旅人柏田)」

「芸術家やその作品に対する『自分の基準』も大半の現代人からは感じませんね。確かに難しいけど。歌手がちょっと国外で活動しただけで『世界進出!』だとか『ニューヨークでも話題に』なんて話が出た途端、たいしたことない(ちょっと言い過ぎ。)アーティストの国内でも扱いが急変したり。」と永井アナ。「個人個人の『何らかの志』の無さがそのへんに出てるんだらうなあ。」と、浦辺流極言。「マスメディアに価値観を任せると楽だもんね。一目を気にしたり悩まなくて済むから。きっと『苦しいから』って怪しい宗教に流れちゃう人もそう。」と、マキさん。「大丈夫かねえ、この国。何処へ行くのやら。」と旅人ハンセンさん。あんたは一体どこに行っていたのか?「でも『LAでレコーディング』ってだけでなんかカッコイイですよえー。」とニコニコ田中アナ。だから君の様な人の心配をしているのだよ、周りの人が。

「アナウンサーとしてその辺は変えられそうかい?」と浦辺氏が永井アナに尋ねる。「どうでしょうね。番組を作る全員と偉い人にその意識が芽生えないと無理なんですよね、結局。永井先輩の溜息を聞いて田中アナ、小さく拍手する様な仕種で「先輩がんばれー。」って、アンタには他人事か?「ま、私も今の仕事好きだし、私の大切な人の為にも(「誰!?!」と一同が心の中で。)この国を少しは良い方へ向かわせたいから、できるだけことはやってみます。志もプライドもありますから。」と永井アナ。

「うん。スポーツ担当でも一人でもそういう人が報道に携わってれば安心だ。まあ、永井チャン、飲め。」と浦辺氏が足下の棚からバーボンのボトルを取り出してカウンターに『ダン!』と置く。もちろん冗談だが、永井アナびっくり。それを見たマキさん、片手で口を隠す様にして「まさか永井さんを酔わせて昼間っからよからぬことを、、、」と、からかう。「あのな、俺がそんな無法者なら今頃、六本木に支店出しているわ。」と浦辺氏が返す。「無法者じゃなくても、喫茶店のクセに去年の夏は『ウナギの蒲焼』売ろうとしてたよねえ。」と言いながらハンセンさんがバーボンを自分専用のマグカップに注ぐ。飲む気か、オイ。「そうそう。『夏場の中年層はウ

ナギに飛びつくはずだ』って。」とマキさんが加わる。大きな目を丸くして永井アナが「それ本当ですか？」と笑いながら言い、田中アナが「私、ウナギ好きー。皮以外。」と相変わらずな事を言う。「ま、俺もこの仕事好きだし、プライドも有るし、何よりもハードロッカーな自分が大好きなわけよ。規制の概念に捕われずに、、、」とワケの分からん事を言う。ちなみにその『ウナギ計画』は手頃な仕入れ先が見つからずお蔵入り。

「あ、もう行かなきゃ。」と二人の女子アナが席を立つ。「「じゃ、またね〜。。」」とマキさんとハンセンさんが手を振る。浦辺氏は腕を組んだまま、まだブツブツ言っている。こんな人たちを多数派の人はどう思うか。

同日。午後15時頃。『めたる屋』店内が禁煙の為、喫煙者従業員のハンセンさん、入り口付近の灰皿の傍で仕方なく一服。ホウキとチリトリを壁に立てかけて。ランチタイムも終了し、午後のお茶の客も4人なので中は浦辺氏一人で充分みたい。山田のマキさんは既に帰宅。「フー。」煙を吐いてその行方を眺めていると「ちゃーす。」と平川クンがやって来た。「今、中は暇なんすか?」と平川クンはカバンの中からタバコとライターを取り出した。この二人が店外で並んで喫煙するのはケッコウ見られる光景。ハンセンさんが目を細めて空を見上げ「ん～。いい天気だねえ。」と言う。「そうっすね。」と平川クン。「平カーくんはいつからタバコやってんの?」「、、、実は高校の時から。カズさんには内緒ですよ。あの人その辺に厳しそうだから。」「ははは。確かにねえ。ウラベツちゃん、詳しくは覚えてないけど(覚えておけ。)高校生の時に軽音部の部室でタバコを吸うヤツがいっぱいいたおかげで校内外の活動の大半を自粛させられたって。上の圧力で。(先生方のことね。)だから喫煙者に対しては『他人に平気で迷惑をかける連中』みたいに思ってるのかもしれないねえ。」「へー。でも実際そうかもしれないっすね。空気汚して、壁汚して。他人の肺まで汚して。人によっちゃポイ捨てして街を汚して、子供の目線の高さに火のついたタバコ手にして歩いたり。あ、俺はそんな事しないっすよ。最低限のマナー守ってますから。ははは。」と、平川クンはタバコ持っていない方の左手で胸を誇らし気に叩く。「ハンセンさんはいつからっすか?」「あ、タバコ?俺は浪人してた時。やっぱり未成年。ははは。今まで何度か禁煙期間もあったけど、、、なんか薬物中毒と一緒にだよねえ。『ドーパミン』さんが関わって来ちゃあ。」「タバコの生産と販売と、箱の脇の注意書きは明らかに矛盾ですよね。」「矛盾だよねえ。そーいや、ウラベツちゃん、矛盾した事も嫌いだねえ。一応、歴史のある大地の恵みの一部なんだけどねえ。」ハンセンさんがそう言ってもうほとんど吸う所の無い吸い殻を灰皿へ。

「大地の恵みですよねえ、、、一応。」平川クンが一本タバコを勧めるがハンセンさんは両手で小さくバツを出して断り「マナーを守らない連中のおかげで良い喫煙者が最近世間で肩身が狭くなって行くけど、一番大変なのはタバコ会社かもねえ。」と言う。「俺のカンっすけど、未成年喫煙者がいなくなったら絶対売り上げ激減しますよ。この国。」「あはは。そうかもねえ。」実際に調べてみたい気もする。

ふとハンセンさんが向かいの塀を見ると茶色の猫が一匹こちらを見ている。「あ、タマ。こっちゃん来～い。」と手招きをする。この猫のタマは『めたる屋』付近に住みついている(たぶん)野良猫でハンセンさんやレーコちゃんからよく食料を提供されている。浦辺氏の許可を得て『招き猫代わり』に入店も許されている。ちなみにレーコちゃんはタマとよばずに『カステラ』と呼んでいる。ヒョイと塀から飛び降りてタマ(もしくはカステラ)が本当にハンセンさんの方にやってきた。ゴロゴロ言いながら彼の足に顔を擦り付けている。「たぶんハンセンさんの言ってる事、8割は理解してますね。」

「どしたタマ?腹減ってンのか?(柏田)」「いっつも腹空かせてますよ、この猫は。(平川)」「よし、俺の非常食を分けてやろう。」とハンセンさんが店内を振り返る。浦辺氏はキッチンにいるようで姿が見えない。平川クンがタマの頭をなでながら「非常食って、あの『イカの

薫製』っすか? 」と尋ねる。ハンセンさんは常に酒のつまみになる様なモノを2階の『マイデスク』の引き出しの中に用意している。「いんや。今日は『味付け海苔』。」そう答えるとササッと店内の『授業員以外立ち入り禁止』の表示のあるドアを開けて2階へ。オフィス兼仮眠室に入り『マイデスク』の引き出しを開けて味付け海苔を一袋取り出して階段を下る。『立ち入り禁止』ドアを開けたところで洗っている途中の皿を持った浦辺氏に遭遇。「ハンセン。掃除&タバコ休憩にしちゃ長くないか?」「すまぬ。外でタマがお腹空かせているのだ。」と海苔の袋をパタパタと振ってみせる。「じゃ、いいか、、、なんて言いたいけど、あと2分な。」「アイサー、ジェネラル。」と戦争映画の様な事を言って店を出て行く。急いで出て行ったので何やら焦げ臭いのに気付かなかった。

電気工事関係らしいユニフォームの客が二人帰り際「ごちそーさん。浦辺さん、何か焦げてない? 」と尋ねる。『何やら考え事』しながらカウンターで食器を洗っている浦辺氏の両腕が『ピタッ』と止まった。「やべ! 」とダッシュでキッチンへ。自分の『まかない』に『余った食材フレンチトースト』の様なモノを調理していたのだが、うっかりコンロの火を消し忘れていた。キッチンの天井には煙が漂っていてフライパンの上ではトーストがほぼ炭になっていた。大慌ての浦辺氏は反射的に洗剤の泡の付いたままの手でアツアツのフライパンをキッチン内の水の張ってある流しへ。『じゅう。』という音がして蒸気が天井へ。エプロンで手を拭きながらキッチンから出て来る。「大丈夫? 」と客。「なんとか助かった。俺のメシ以外は。」「あはは。」と笑いながら出て行く客に「ありがとうございやしたー。」と言うと、浦辺氏、入り口付近で猫と戯れるハンセンさんと平川クンを発見。「平カー! 早く仕事、仕事! 減給と連休のどっちがいい! ? 」とワケの分からんことを叫ぶ。怒ってるんだか、ふざけてるんだか。浦辺氏は自分の失敗が許せないタイプで、特に得意分野の調理で失敗するとかかなり機嫌が悪い。そこへ空腹が追い打ちをかけてさらに悪い。

@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }

「社会の規則と自分の体を統率する規則か。」と、しゃがんでいた平川クンが呟いて立ち上がりタバコを灰皿へ。まだ火のついていたタバコは灰皿に溜まった水に触れ『ジュっ』と音を立てて煙が漂う。「この煙は重力に逆らっているようで実は自然の規則には逆らっていないんスよね。(平川)」「深い事を言うねえ。」とハンセンさん。タマの頭を撫でて、海苔の袋をクシャクシャと手の中に丸めて立ち上がる。浦辺氏の声の感じから彼の『何かやらかしたイライラ』を感じた二人。そこへドアが開いて中から浦辺氏が出て来て「交代。」と重い声で一言。

タマが『パッ』と3人の足下から飛び退いた。店の前の一方通行の車道を車内が『ぬいぐるみ畑』になった自動車が不相応なスピードで通過。その運転席から運転手の手が出たと思ったら火のついたタバコが一本飛び出して3人の前に転がってきた。その時ハンセンさんと平川クンには何かが『プチッ』と切れた音が聞こえたという。浦辺氏が過ぎ行く自動車を睨みつけ叫ぶ。「

光の速さで事故って死ねー!!」ハンセンさんは『携帯吸い殻入れ』を身分証明のごとくかざしてそそくさと店内へ。平川クンがそそくさと続く。

```
@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }
```

11月某日。木曜日。午後19時前。「だんだん寒くなって来たから。」というので『めたる屋』裏口の辺りでレーコちゃんと香チャンが猫の『カステラ／タマ』小屋を設置してる。小屋といっても魚屋でもらってきた発泡スチロールの箱を上手く加工したモノで、中に香チャンが古着を利用して作ったというクッション的なモノが入っている。

この店は基本的に食事は『軽食的』なモノ(サラダとかサンドイッチとか、あと日替わりパスタとか)しかメニューにないので、味は評判良いが、近所の洋食屋程の組み合わせは見られない。特に平日のこの時間帯は。今日は「用事がある。」と言ってボスの『最近何やら考え込んでいる』浦辺氏があがってしまって、店内にはハンセンさんと客が数人、その一人はカウンター席の(いつの間にかレーコちゃん、香チャンとも仲良くなった)イラストレータ鈴木氏。コーヒーをすすっている。ところでこの店は『軽食メニューの注文の場合は後払いも可』というややこしい、というかい加減な仕組みになっていて、二人組の客がレジで会計を済ませている。「ごちそーさん。柏田さんも料理かなり上達したね。」「ぬっふっふっふ。伊達にウラベツちゃんの指導を受けているわけじゃねえぜ。」この人の場合、味付けが『多国籍』になりがちだが。「ありがとやした一ん。」と二人組に手を振るハンセンさん。そこへ香チャンが裏口から戻って来た。

「あれ？レーコちゃんは？」とハンセンさんが尋ねる。「まだカステラが来るの待ってます。」と香チャン。そう答えて今帰った客のいたテーブルへ食器をかたづけに行く。原稿か何かを片手に鈴木氏がその姿を眺めながら「久しぶりだけどあのコ良く働くね。それに可愛いし。」と言う。「鈴木さん、今の世の中あまりそう言う事を口にするると不審者扱いされるよ。」とハンセンさん。「、、、こないだニュース見てたら目撃者いよる『強盗の描写』が俺にそっくりだった。」と苦笑いの鈴木氏。「でも、可愛くってさらに絵の才能もあって、いいなあ、、、」

『カラン』とドアが開いて女性客が二人。「こんばんは一。」最近『常連候補』の子供英会話講師、室井真琴(むろいまこと)さん、29歳とカナダ人講師、エイミー・ルソーさん、25歳。ハンセンさん「おやおやおや。ご兩人。毎度。今日もコーヒーとプチモンブラン持ち帰り？まだ残ってるよ。」と左肩をクルクル回しながら尋ねる。

「Absolutely.」といかにも英会話講師的な発音で答える。「すっかり私も、エイミーもファンになっちゃいましたよ。ここのコーヒーとモンブラン。」「実はそこの『パラディ』で作ってるンだけどねえ。」とハンセンさん。室井先生はカウンター席に腰

掛けると「あれ？ 浦辺さんは？」と尋ねる。「ウラベツちゃんは何か用事がるからとかで帰ったんだねえ。これが。」「じゃ、ハンセンさん厨房仕切ってるの？ へえ、カッコイイ。格上げだ。」「あのね、俺はいつもウラベツちゃんがない時は店全体しきってるの。あ、ちなみにコチラはイラストレーターの鈴木さん。バツイチ独身だから気を付けて。」「な？ 人聞きの悪い。あ、どうも。」と鈴木氏。英語が達者なのでエイミー先生にも自己紹介する。

「寒ーい。」とレーコちゃんが両手を擦り合せながらキッチンの奥の裏口から帰って来た。外はだいぶ冷え込んで来たらしい。「香いつのままにか戻っちゃうんだもん。」食器を持って来た香ちゃん、それを聞いて「え？ 私、中、ハンセンさん一人じゃ不安、じゃなくて可哀想だから戻るよって言ったじゃない。」と返す。ハンセンさん「なぬ？ 不安？」と、後ろを通過する香ちゃんを振り返る。「あいよ。コーヒーお待ち。」と二人の英会話講師にマグカップを差し出して従来のものより小さいがその分値段がお得なモンブランを小さな箱に別々に入れる。レーコちゃんはカウンターのところの流しで手を洗いながら「けっこう寂しいんだからね。裏に一人でいるの。カステラ結局来ないし。」と言う。その隣で「一人っても5分ぐらいじゃない。」と香ちゃん。「私は寂しがりやなの。」って、自分で言うかな「それに寒くなってくると余計に一人の時、寂しくない？」とレーコちゃんが言うのを聞いて「「確かに。。」と独身鈴木氏&ハンセンさん。しみじみと。

「寂しいって言えば、」と室井先生が口を開く。「ウチの生徒のお母さん達の中に『出会い系サイト』とか『ホストクラブ』の話している人たちがいるんですよ。私の介入する事じゃないから何も言いませんけどね。『大丈夫かなこの家庭？』って思っちゃいますね。主婦ってけっこう寂しいモノなんですかね？」ハンセンさんは後頭部を掻きながら「うーん。そういうことはウチのマキさんからは伝わって来ないなあ。(確かに。)でも何にせよ最近の日本の人たちはすぐに『孤独イコール人生つまらない』とか『独りイコール人として劣ってる』みたいに考える傾向があるみたいだねえ。」あんたは独りで放浪の旅に出過ぎ。そこへ鈴木氏が加わる。「そーいや、こないだ奥の席に座ってたら、隣のテーブルに女性客が4人いたんだけど、競う様に『私は今すごく寂しいの』とか『家に帰ると孤独感に襲われるの』みたいな事を楽しそうに話してたな。あはは。何か変だよな。」それは単に自己主張欲と自己陶醉ですな。「エイミーは日本に一人暮らしで寂しくない？ カナダ恋しくない？」と室井先生がエイミー先生にゆっくりと尋ねる。「トキドキ。」と微笑んでエイミー先生が答えると「Sometimesね。」と鈴木氏。何故いちいち日本人のアンタが英語で言い換える？

「一人でいることは別に悪い事でも何んでもないですよ。」と『自立派不思議高校生』香ちゃんが食器を洗い終えて会話に加わる。「そうだけど、私は5分でも寂しいモノは寂しいの。」とその隣で食器洗いを手伝っていたレーコちゃんが両手の水を払いながら顔を上げて振り返る。「ハンセンさん。ちょっと彼氏にメール、、、あれ? 先生? 私、長谷部麗子です。私が小学生の時に教育実習で来てましたよね?」「ああ、うそ? 長谷部さん! 覚えてるわよー。一同『一体何事か?』とキョトンとす。

カウンターを挟んでレーコちゃんと室井先生が手を取り合う。「お久しぶりです。」「久しぶり。すっかり大きくなって。あの頃アナタ6年生だったっけ。」そこへ「何何? 室井先生は小学校の先生だったの?」とハンセンさんが割って入る。「ええ。でもこのコの会った時は教育実習生の時。」と室井先生。ハンセンさんはさらに「その頃からレーコちゃん、こんなだった?」と尋ねる。香ちゃんも興味津々で室井先生を見る。「ええ。もう喋る、喋る。最初の質問は『先生、彼氏いるの?』だった。あははは。」と一同も大笑い。少し困った様な顔でレーコちゃんが赤くなる。エイミー先生は一生懸命に会話についていこうとしている。鈴木氏が気を使って(おそらく良い印象を与えようとして)通訳を買って出るが「ダイジョウブ デス。」と断られた。残念。

「でもまた何で今は英会話?」とハンセンが質問。レーコちゃんも『そうそう』といった感じでうなずく。室井先生は一回溜息をつくと言葉を選ぶ為か少し間を置いて喋りだした。「無事に実習終了になって念願の小学校の先生になったものの、、、いろいろあってね。いわゆる理想と現実のギャップもあったし、私の小学生だった頃と今の著しいギャップもあったし、、、悩んで悩んで退職しちゃった。」それを聞いて「ここにも夢破れし者が、、、」と『夢破れし者でも気持ちの整理はついた』鈴木氏が呟く。ハンセンさんがそれを聞き逃さず「あんさんとは違いますから。」と、鈴木氏の前で左手で払いのける様な仕種をする。

窓際のテーブル席にいた2組の客が同時に店を出て行く。「あいがとやしたーん。」「「ありがとうございます。。。」」香ちゃんとレーコちゃんがじゃんけんを始めた。どうやら誰が食器をかたづけに行くか決めるようである。「イエイ!」とガッツポーズをとったのはレーコちゃん。「悲願の連敗脱出!」一体何連敗していたのか。香ちゃんが悔しそうに口を尖らせて窓際のテーブル席へ向かう。

レーコちゃんが体の向きを変えて室井先生に質問する。「そんなに大変だったんですか? 小学校。」「いろいろね。私の被害妄想も少しあったかもしれないけど。現場の事を知らなさすぎる文部科学省や教育委員会に勝手に行動を制限されたり、過保護な親が自分のしつけの無さを棚に上げて何でも学校に押し付けて来たり、昼夜を問わず理不尽な苦情を言って来たり。さらに中年男性職員からセクハラ受けたり。」「そら大変だ。女性教員だけでなく女性ともセクハラまがいなことされるみたいだしねえ。『教師の自覚』無いんかいな。」とハンセンさん。室井先生が続ける。「決定的だったのが将来役立つとか言って『ビジネスマン養成訓練』みたいな授業を奨励し始めた

ことかな。学校ぐるみで。」「何それ？」と鈴木氏が興味深気に尋ねる。「株式会社の運営や、投資とかを簡単なロールプレイで体験させようっていう試みなんですけど。小学生にですよ。「へー。」とハンセンさん。「良かったー。今の時代の小学生じゃなくて。俺、経済とか興味無いもん。」と鈴木氏。「私も。」とレーコちゃん。憤慨したような室井先生はまだまだ続ける。「まず先に教えることがあるじゃない、金融よりも、英語よりも。農林水産の類いをますます衰退させる気かしら。この食料自給率4割の『自称先進国』の。夢も何も無いクセにお金に対する欲だけがある子供なんて嫌じゃない。」と、だいぶ熱くなってきた。でもそれが子供の将来の『幸せ』につながると信じている親が大半を占めるのも現実。親心といえど親心か。食料自給率の計算に関しては、いろいろ『賛否』がありますが、でもお金があっても食べ物が無かったら生きていけないよね。普通の人。それに周りの大人が何事も金銭的利益で物事の価値を測っているから、人の心をおろそかにする子供の増加は止まらないのかもしれない。

ハンセンさんが話題を変えようと別の質問をする。「で、英会話業はどうなの？天職になりそう？」「う～ん。ま、民間企業だから新しい状況に比較的速く対応できるのはいいけど、やっぱり現場の事を知らない偉い人の勘違いには苦労しますね。私の尊敬していた先輩なんか、こないだ支部長に反発してクビになっちゃった。仕事そのものは、、、楽しかったり辛かったり、半分半分かな？」おそらくどんな仕事もそうなのだろう。「ただ子供相手に体動かす事が多いのにワザワザ動きにくいフォーマルな服装させられるのは疑問だわ。未だに。フォーマルな方が子供の親が信頼するっていうんだけど、、、」

そこへ香ちゃんがトレイを食器でいっぱいにして戻って来た。「レーコお。ちょっと『ヘルプ』。」それを聞いたエイミー先生、「日本の人タクサン、、、英語のコトバ使いマス。ワタシ思いマス。」と言う。「そうねえ。良い事か悪い事か知らないけど。」と、その隣の室井先生。左肩をグルグル回しながらハンセンさんが続く。「でも単に英語の単語をカタカナにして日本語の中で使ってるだけだからねえ。『異文化の表面の模倣』？おおおっと。」大男が狭い所で肩を回すもんだから後方を通過する香嬢、麗子嬢にぶつかりそうになる。

香ちゃんが立ち止まって「カズさんがよく言ってますね。『今の日本人は国際化しているんじゃないで単に欧米化だ』って。」と言う。「そうそう。ウラベツちゃん言ってるねえ。『欧米の後ろを真似してついて行くだけで先進国といえるか？』って。『未だに頭の中は明治時代並みか？』って。熱いねえ。ウチのハードロッカー。」とハ

ンセンさん。鈴木氏が身を乗り出す様にして「でもそのおかげで英会話ビジネスは儲かってんじゃないの？競争も激しいだろうけど。」と室井先生に尋ね、エイミー先生には『パパッ』と英訳して差し上げる。「アリガトゴザイマス。」とエイミー先生。やや苦笑い。室井先生がちょっと天井を見る様にして考えて口を開く。「ま、お給料の事は特に言いませんけど、いろいろ問題もありますよ。外国人スタッフの労働条件がなかなか改善しなかったり、その外国人スタッフも全員が全員本気で英語を教えたくて来日してるわけじゃないからコロコロ入れ変わったり。その店、このエイミーはすっごく真面目で助かるわー。」それを聞いたエイミー先生「Am I doing all right?」と尋ねる。「Absolutely, yes.」と室井先生。

ハンセンさんが『フッ』と笑って喋り出す。「そーいや、こないだウチの『嫌煙家』ウラベツちゃんがね、どこかのビルの入り口付近でそのビルの中にある英会話学校の日本人スタッフと外国人スタッフがタバコをポイ捨てしてたとかで『社会のルールも守らねえヤツに他人にモノを教える資格あるかー!』だって。」少々浦辺氏のモノマネが入った。「あはは。彼らしいね。」と鈴木氏。

「教える資格と大人の自覚か。」と室井先生が呟く。「先生頑張って。私応援したげる。」と言ってレーコちゃんが洗剤の泡のついた両手をグーにする。室井先生『ニコッ』と笑って「ありがとう。一人でも味方がいると思うと心強いわ。」と返す。「『頑張って』といえは、長谷部さんはどうなの？確か今高校三年か二年生でしょ？」「三年生です。花の大学受験生。まだ推薦のチャンスもあったりで、たまに勉強の息抜きでここでバイトしてまーす。」とレーコちゃん、Vさいん。それを聞いたハンセンさん。「息抜きかいな。」とレーコちゃんの頭を叩くフリをする。レーコちゃんはタオルで手を拭きながら「それでね、予備校で英語と小論文の講義を受けてるんだけど、英語の先生が面白いの。香も一緒に講義出てるんだけど、あの先生面白いよね。教え方は普通だけど。」まだ食器洗い続ける香ちゃんはそのままの姿勢で「なーに？仙道先生のこと？不思議な人だよね。」と言う。それを聞いたハンセンさんは「君も充分不思議だがねえ。」と言った。室井先生はエイミー先生に『予備校』について説明してあげている。

今度は鈴木氏が口を開く。「最近の予備校とか学習塾の需要を見てるとさ、従来の学校教育って何だろうって思うよな。偉い人たちが子供の休みを増やして、学習内容減らして、でもその一方で社会は受験を通して子供達に高い知識を要求している。それに学歴社会が以前程ではないにせよ、こんどは資格社会。その個人が社会で上手くやっていくために必要な資格の為に『それ用』の勉強が学校出た後も必要でさ。」

それに室井先生が加わる。「学歴にしる資格にしる結局は個人の肩書。英語なら猫も杓子もTOEICや英検。そのうち『資格のインフレ』が置きますよ。」「何それ?」とハンセンさんが尋ねる。「ただでさえ横並び意識の強い社会ですからね。会社が社員に、親が子供に『まわりの他の人がそうだからアナタも』って感じで英会話とかやらせて自分たちの偏見で基準レベルをどんどんあげるみたいに、よりたくさんの方が盲目的に同じ肩書を目指して、共有する事でその資格や技術がどれほどの価値のモノかが曖昧になると思うんです。それに学ぶ喜びも。」「そーかもね。」とハンセンさん両手を組んで感心する。

さらに室井先生「それに英検とか絶対にマグレで受かっちゃう人いますよね。」と言う。「いるいる。絶対。」とレーコちゃんがニヤニヤしながら食器洗いを終えて会話に加わろうとする香ちゃんを見る。「何よ?」と香ちゃん。高校一年の時に英検2級を取得している。「マグレでも受かったモン勝ちなんだよねえ。所詮。社会道徳的にどうなんだろう?」とハンセンさん。鈴木氏が少し真剣な顔になって右手の人差し指を立てて「アレ、『实用』英語検定とか言ってるけど、全然実用的じゃねえぞ。」と力説する。この人も初めて渡米した時にすでに英検2級を持っていたが予想以上に言葉の面でアメリカ生活に苦労したという。「私も同感。」と室井先生。「デモ、Jポップス タクサン英語のコトバ ツカイマスね。オドロキマス。」とはエイミー先生の意見。でもそれは意思の疎通の為に使っているわけではないし、歌っている人間がちゃんと意味を理解しているのかも不安、そんな感じのことを鈴木氏が英語で説明する。エイミー先生はその『外国語に対する柔軟な構造』は日本語の長所に成り得るといようなことを英語で言う。一理あるかも。

ふと室井先生が壁の時計を見て「いけない。もう行かなきゃ。エイミー、We have to go.」と言って立ち上がり淡い茶色のジャケットの袖に腕を通す。「じゃあまた。」「サヨナラー。」と二人の英会話講師が出口に向かう。「ちよとちよと、コレ、コレ。忘れ物。」とハンセンさんがモンブランの入った箱を両手に持って二人を呼び戻す。「そうそう。これ。何の為に寄ったのか分かんなくなっちゃう。」と小走りでカウンターに戻ってくる。レーコちゃんが「しかりしてよー。先生。とにかく頑張ってる。」と声をかける。「あなたも頑張ってるね。一応、私の教え子なんだから。ま、またここで会うでしょ。」「是非また御来店ください。」とハンセンさんが無理に上品な低い声で高級ホテルの従業員の様に頭を下げる。「俺はそんな事言われた事一度もないなあ。」と鈴木氏。一同大笑い。「ま、お互い頑張りましょう。誠実にやってみましょう。」と苦笑いのハンセンさん。そ、みんなできるだけ誠実にいこう。

室井先生とエイミー先生が店を出て行くと閉まりかけたドアから猫のカステラ(もしくは『タマ』)が『タタタ』っと入って来た。「あー! カステラ! やっと来たー。」とレーコちゃんがカウンターから駆け出す。そしてカステラを抱き上げるが何か嫌がっている様子。仕方なくカステラを解放してあげることに。するとカステラ／タマはハンセンさんの足下に来てゴロゴロ言っている。それを見てハンセンさん、「発泡スチロールの家が気に入らなかったんじゃないの? ま、定期的に何か食べ物置いておけば定住するよ。でも『野良』かどうか未だに知らないけど。」と言う。「せっかく作ったのに(勉強はしているのか?)何かショック〜。」とレーコちゃん。それを聞いて鈴木氏が片方の肘をカウンターについた姿勢でレーコちゃんの方を振り返る。「ああ、わかるよ。その気持ち。俺もせっかく提出した作品をボツにされるとえらいショックだ。」レーコちゃんはそれを聞いて「それよりもあのコが私よりもハンセンさんになついている方がショック。」とのたまい。「私もショック。」と、からかうように香嬢。「そらショックだな。」と鈴木氏。

「なはははは。」とハンセンさんは笑って、急に「そうだ。気になったんだけど、香ちゃん。さっき予備校の先生、仙道先生って言った?」香ちゃんはテーブルを拭きながら「そうですよ。理科系もたまに教えてる面白い英語の先生。どことなくカズさんに似た雰囲気してるんですよ。音楽の好みも一緒みたい。『英語の成績上げたきゃロック聞け』って。あと、よく昔の映画の話してるの。あはは。」と答える。ハンセンさん、眉間にシワを寄せて「その人の下の名前は分かる?」と尋ねるが、香ちゃんは知らない様で「レーコ知ってる?」としゃがんでカステラの頭を撫でていたレーコちゃんに尋ねる。しかし「ん? しらない。」とアッサリ。

「どうかしたんですか?」と香ちゃんが『考える巨人』の顔を見上げる。ハンセンさんは小さな声で「ひょっとしたら、その英語の先生は『ヒデキちゃん』かも。」と言う。香ちゃんの頭の上に『? マーク』が点灯している。鈴木氏が『ピシャリ』と手を打ち、「そうか。仙道秀樹。でもただの同性じゃないの?」と言う。そしてカバンからメモ帳を取り出して一人の男性の似顔絵を描く。さすがイラストレーター。慣れたモンである。「あのさ、香ちゃんその先生ってこんな感じ?」とその似顔絵を彼女に見せる。すると「あはははは。そっくりー! ね、ね、レーコ。見て見て。髪型違うけどそっくり。」と香ちゃんがレーコちゃんに手招きをする。レーコちゃんがメモ帳を覗き込む。「あははははは。仙道先生に会った事あるんですかあ?」似ている事は分かったが何故二人ともそこまで笑う? 鈴木氏が一言「仙道くんか。」

「ウラベツちゃんの前にはやっていたバンドのベーシストで仙道秀樹っていう人がいてねえ。バンドが解散すると旅に出るとか言って、、、ま、あのバンドの4人はみんな何らかの『心の旅』みたいなものに出て、、、ほとんど音信不通状態だったんだけどね。3年前に『まだ予備校の講師とかしながら全国まちこちまわってる』ってEメールがあったんだけど、、、あれ? 2年前? いや、もっと前か?」と、ハンセンさん、アンタの記憶回路は大丈夫か? 「東京に戻って来てたのか。ヒデキちゃん。」

「おとなしくしなさい。」とレーコちゃんがカステラを抱きかかえる。それを見てハンセンさんが「タマ。」と少し厳しい声色で言うと、その猫はジタバタを止めた。すげー。

もうそろそろあがる時間なので香チャンがエプロンはずしながらハンセンさんに尋ねる。「カズさんのバンドって、他にどんな人がいたんですか？」それにハンセンさんが答えようとする、鈴木氏が「いいねえ。エプロンと学校の制服の組み合わせ。」などと(極めて軽い気持ちで)のたまうも凍り付いた女子高生二人の視線に気づき「いや、あの、別に変な意味で言ったんじゃない、自粛します。」とペコリ。そのうち本当に社会から不審者扱いされるぞ。ハンセンさんが『ゴホン』と咳払いをしてあらためて話を始める。

「大学で知り合ったモン同志の4人組のバンドでねえ。ウラベツちゃんがギター弾いてて、ヴォーカルやってたのは、フルネーム忘れたけどマサノンちゃん。ギターも弾いてた、確か。今そのマサノンちゃんは実は某TVアニメの主題歌を歌ったり、前の『仮面レンジャー』にチラッと出たり、その歌も歌ってた。ん？ごめん。前の前のレンジャーの時だ、歌は。」「横山君が？俺それ知らなかった。へ〜。」と鈴木氏。そしてレーコちゃんも会話に参加。「すごーい。じゃあハンセンさんもカズさんも芸能人と知り合いってことですか？ここに呼んでくださいよ。」香チャンもそれに続いて「すごーい。全然知らなかった。」と言う。ハンセンさんは右手で左肩を揉みながら「ん〜。今まで話題にならなかったからねえ。黙ってたワケじゃなくて。ウラベツちゃんはたま〜に連絡取り合ってるみたい。」と言う。

鈴木氏が割り込むように口を開く。「で、残りの一人がドラムの市川君、、、だったっけ？今何やってんの、彼？」「そ、もう一人が市川ユートちゃん。彼に関してはニューヨークに修行に行ったってこと以外はよく知らない。あれ？ロサンゼルスだったかな？あ、ちょっと待って、ロンドンかも。」とハンセンさん。有名な地名ぐらい覚えておけ。「ニューデリーじゃないの？」と鈴木氏がからかう。「そこまでオイラの記憶は腐ってない。」と眉間にシワを寄せるハンセンさん。留学希望の香チャン「へー。カッコイイ。その人もすごいですね。」と関心と感心の両方を示す。その脇でレーコちゃんはまだ猫のカステラを抱えています。今回はもう降参した様でカステラはジッとしている。

「でも何で解散しちゃったんでしょうね？」とレーコちゃん。「ん〜。いいところまで行ってたみたいなんだけどねえ。ライブして、デモ(テープ)のレコーディングも何回かしててさ。解散の原因は、、、ちょっとは知ってるけど、ウラベツちゃん、人に話したがないから教えない。でもあの頃、なんかすごい悩んでたって聞いた。みんな。」その頃この大男は例の『賭博で得た大金』で一人旅の最中だった。

突然「あ! 雨降ってるー! 香い、早く帰ろ。」とレーコちゃん。人の話ちゃんと聞いていたか? 「そーいえば、確かあの人たちの最後のライブもこんな晩秋の雨の日だったらしいねえ。」とハンセンさんが遠くを見てしみじみと言う。すると鈴木氏が「え? 浦辺君は月の綺麗な夜だったって言ってたぜ、真冬の。」と言う。さてさて真実はどちらか。鈴木氏が近所に自動車を駐車しているので「送っていこうか? 」と二人の高校生にオファーするも当然「「その方が危険だから。。」」と、あっさり断れた。ハンセンさんが無言でうなずく。そして客の忘れていった傘を渡して(いいのか?) 「でもくれぐれも気を付けて。風邪ひかないように。」と見送った。

その頃、都内某所、某ファミリーレストランには二人の人物とテーブルを囲む浦辺氏の姿があった。その二人とはちょうど『メタルカフェ』で話題に出ていた仙道秀樹（せんだうひでき）34歳と横山正乃（よこやままさの、通称マサノン）35歳。マサノンがフォークでフライドポテトをつつきながら「アレから、、、最後のライブからもう10年になるんか。」と言う。「スゲーな。来年でちょうど10年だ。」と、何が『スゲー』のか知らんがヒデキちゃんがアイ스티ーのグラスを傾ける。浦辺氏は何やら思い出を頭の中で高速回転させ「何にせよ、二人とも生きていて何よりだ。」と言う。それに対し他の二人が「「お前が活着ている方が奇跡だ。。」」と笑いながらステレオで言う。久しぶりに会う者同志の心地良い冗談と笑い。

「ったく。俺が髪切ったにブーイングしたクセに、二人とも髪バツサリ切りやがって。ヒデキなんか、ケッコウ来てんじゃないの？ はえぎわ。」と、自分の額をぺちぺちと叩いて見せる浦辺氏。ヒデキちゃん「浦辺さんほどじゃねえよ。」と返す。この人は何故か皆を『さん付け』で呼ぶ。苦笑いを浮かべて浦辺氏、今度はマサノンの方を見て「どうよ。二人目の奥さんとは？」と尋ねる。それを聞いてヒデキちゃん「え？ 二人目なの？ いつの間に。」と驚いた様子。マサノンは「ん～。ぼちぼち。いい感じ。」と、何がいい感じなのか？

マサノンはグラスの水を一口飲むと「また東京にそろったものの、ヒデキが予備校講師でウラベが『アートディーラー』クビになって『はがね屋』の店長ねえ。しかもハンセンと。」と言う。それを聞いて浦辺氏「クビとか言うな。あんなアートに関心もこだわりも無い連中と一緒に仕事できるか。で、お前がアニメソングシンガーってか。あ、それとまだ言ってなかったかもしらんが、今、店の名前『めたる屋』になってるから。」と言って大きなチーズバーガーにかぶりつく。「『メタルヤ』？ まじ？ あははは。」とヒデキちゃんが大笑い。

マサノンは少し笑いながら「俺は知ってたけどさ。勝手に店の名前変えんなよー。札幌の羽賀根さんの許可はちゃんともらったのか？ ユートが知ったら何て言うかな。『メタルヤ』。」と言って足を組み換え話を続ける。「で、今日の本題はその、しばらく音沙汰の無いユートだ。勝手に死亡説でも流すか。その後、誰か連絡取ってる？」

「いや、俺はずっとあちこち行ってたから。函館で大手の予備校の講師やってた時、羽賀根さんには会いに行ったけど。ちなみに最後にいたのは石川県。学習塾であまりにも態度の悪い生徒がいたんでゲンコツ喰らわせたならその親が怒鳴り込んで来てクビになってしまった。あはは。」とヒデキちゃん。この人も、よく言えば、まだまだ

熱いようだ。さすが浦辺氏の同類。

「浦辺は?」とマサノンがまたフライドポテトをつつきながら尋ねる。浦辺氏少し間を置いてから「あの『2001年のテロ』の時、一回連絡をとったきりだったけど、実は先月アメリカのユートから小包が届いてサ。しかも俺のアパートじゃなくて店の方に。その時、店の方が忙しかったんでハンセンは気付かなくて、知ってるのは俺だけ。未だに内緒にしてあるんだよ。もう少ししたら脅かしてやろうと思って。ユートも覚えてたよ。俺たちの『10年計画』。」と答える。「小包の中身は?」とマサノン。ヒデキちゃんも身を乗り出す。

「ヤツのライブDVDと手紙。ライブは、なんか今年の6月にニューヨークの小さなジャズクラブで行われたらしい。他の日本人ミュージシャンとまともなジャズやってるよ。ケニーGみたいな髪型で。『QUEEN』の『The Show Must Go On』をアレンジしたやつもやってて、けっこういい感じ。」と浦辺氏は言うと自分のセカンドバッグから封筒に納められた手紙を取り出してテーブルの上に放った。マサノンが目の前のグラスを避けて右手を伸ばし手紙を取り上げた。その脇からヒデキちゃんが手紙を覗き込む。

拝啓 浦辺、

おいっす。お互いしばらく音信不通だったが調子はどうだ?俺はN.Y.でDVDに納められている内容の様な事をしている。こちらでの活動もなんとか、少しずつ軌道に乗ってきてはいる。カミサンも元気だ。私事で12月の頭に日本に帰る。日本のレコード会社を周りながら2ヶ月ぐらい滞在する予定だ。こないだインターネットで冗談で『メタルヤ』を検索したら出て来た。あの商店街も近代的になったモンだ。いつの間に名前変えたんだ?それも『はがね屋』改め『めたる屋』ってか。さらにお前が店長でハンセンが副店長?まるでカオスだ。まだ『メタルヤ』に未練があるのなら、あのプロジェクトを完全燃焼させたいのなら、もう一度4人でやってみないか?ライブ。お互いこの宇宙のどこかで未だに生き長らえているのなら一度ぐらい再結成もそろそろ悪くないと思う。実際もうすぐ10年経つはずだから。それに最近気付いたのだが、一緒にロックやるのならお前らとじゃなきゃやる気がしないみたいだ。じゃ、返事は以下のアドレスへ。最近やっとインターネットを自由に使える余裕が出て来た。

Stickman123@chaudmail.com

敬愚、市川勇人(色男)

最後の『色男』のところでマサノンが『フッ』と吹き出した。ヒデキちゃん

は「『カミサン』って、あれ？ 東尾さん？マジ？ 何で誰も教えてくれないかなあ。」と、少々不服そうに言う。マサノンは「お前はあっちこっち行ってたから所在が掴めなかったんだよ。そろそろ定住しろ。この遊牧民。」と笑いながら答え、さらに「どうするよ？ もう一回できるかな？ ライヴ。」と言って浦辺氏を見る。

浦辺氏は深い溜息をついた。「リユニオンってか。ハッキリ言って複雑な心境だよ。だって51%は俺の責任だから。あのバンドが『解散せざるを得ない状況』になったのは、、、」ヒデキちゃんはそれを聞くと「いや、100%でしょう。あはは～。冗談冗談。実は俺ね、イギリス映画の『スティルクレイジー』っていうのを見てね、やっぱり俺はロッカーをしたいんだって気付いて、それで東京に戻ってみようと思ったんだ。」と言う。ヒデキちゃんによるとその映画は『かつて一世風靡したハードロックバンド』が『中年になってから再結成』するお話なんだそうだが、実は浦辺氏もマサノンもその映画を見ていた。それぞれ違う場所で。まるで双子の超能力か。

というわけで、どういうわけで？ちょっと昔の話。都内のそこそこ名の通った某大学で知り合った浦辺氏、マサノン、ヒデキちゃん、市川氏はそれぞれが高校時代に別のパート(ギター、ヴォーカル、ベース、ドラム)を経験していたというので、少々音楽の趣向の違いは無視してバンドを結成したのであった。「この出会いは偶然じゃない。」とか『今思うとけっこう恥ずかしい』事を言って、『80年代バンドブームの生き残り』をキャッチコピーにして活動を開始。バンド名は二転三転したものの、結局『METAL SMILE(メタルスマイル)』で落ち着いた。浦辺、市川両氏はバンド名のどこかに『DEATH(デス)』を入れたかったのだが「今時それじゃあ『女性客』が来ないだろうに。」というハンセンさんの助言により諦めた。ついでに『メジャーデビューした時』に改名しようと別のバンド名も考えていた。それぞれがアレがやりたいとかコレがやりたいとか、初めの頃はソフトロック、ハードロック、ヘヴィメタルいろいろなプロのコピーをやっていた。

周りの学生が就職活動に本腰を入れ始める頃になっても彼らはバンドとバイトに夢中。でも単位は確実に重ねていた(講義によってはギリギリパスがいくつかあったが)留年を経験する事は無かった。そしてその頃には『いっちょまえ』にオリジナル曲も数曲抱えていて都内だけでなく千葉、神奈川、埼玉でのライブも行っていた。マサノンの『比較的ポップでキャッチー』なヴォーカルラインにヘヴィなギターとドラム。そして(当時まだMR.BIGだった)ビリー・シーンを崇拜するヒデキちゃんの『うねる様な』ベース。ところがお互いに感化し合いながら世間の流行とは逆に彼らの趣向は着実に『ヘビメタ』寄りになって行った。「どんなスタイルであれロッカーである以上、一般社会の流行は気にしない。」と4人はよく言っていた。そしてその姿勢はいわゆる『コアなファン』、『固定客』を惹き付けた。その数はともかく。

そして卒業と同時に『社会人としてのステイタス』と『生計の確保』という現実と直面した。もっとも貧乏暮らしはその時に始まった事ではなかったが。

四人とも「ココまで来たら。」と、どうしても音楽で食べて行きたかったのでデモテープをいろいろなところに持って行って地道にプロモーションをした。やはり世間の流行とは逆行するスタイルが故になかなかいい返事はもらえなかった。そしてついにヒデキちゃんとマサノンが『少し路線変更』を提案した。初めにそれを提案したのはかの有名な喫茶店『はがね屋』。当然二対二の激しい口論になった。「何か偉い人たちを食いつかせるエサが必要だ。」ということになったのであった。ところが『長いものに巻かれる事を良しとしない』浦辺氏と市川氏が猛反対。ちなみに、その口論の目撃者に『アメリカ留学が終了したばかり』の鈴木氏がいたのだが、初めの頃は『怖そうな人たち』だと思っていたような。『ROLLING STONES命』の羽賀根氏はその若いロッカーを暖かく見守っていた『つもり』だったという。

もちろん『コアなファンや固定客』の存在は何よりも彼ら『METAL SMILE』の支えだったが、その数は充分とは言えなかった。何の為に充分でなかったか？そりゃあ、喰って行く為に。ライブハウス側も時代の流れか少しずつ対応が変わり『一、二ヶ月に一度のメタルナイト』でしか登場できない所も出て来ていた。メインの音楽活動とあくまで副業のアルバイトの比率が逆転してはいけなかったので浦辺氏と市川氏も泣く泣く『規制緩和』を視野に入れなければいけなくなってきた。ちなみに両氏はバイトの関係で長髪も泣く泣く辞めていた。そして、それまですべて英語の歌詞だったオリジナル曲に日本語歌詞にチョコチョコ英語のフレーズが登場するという『売れ筋路線』の曲も加え始めた。浦辺氏は「何故、有名人のたいした事も無い全英語歌詞はそれだけで話題になって、無名の全英語歌詞は相手にもされないのか。」とこの頃から『極言』でぼやいていた。4人とも中学生の頃から洋楽に夢中だったし、もともと英語の勉強は良くできていたので(読み書き)の英語がかなり達者。「今は耐えるしかない。」とお互いに言い合った。『純メタル寄り』のファンの間では賛否両論であった。

間もなくあるレコード会社の営業の人の目に(耳に?)止まった。

この営業の人、整髪料でテカテカの短髪に(当時まだ珍しかった)小さい黒ぶち楕円眼鏡、名前を千島さんといい、実は前々から『METAL SMILE』に興味を持っていたらしい。ところがすでに会社の方が『ヘビメタは商売にならない』という方向に進んでいた所以他们の路線変更は快く食いついて来た。都内のライブハウスを通じて当時『METAL SMILE』のスケジュール管理をしていたヒデキちゃんに接触。デモテープを自腹で購入して偉い人たちに聴いてもらった。そのデモテープには『路線変更後』の新曲は一曲しか入っていなかったので「メタルだね。」「うん、ヘビメタだ。」「もう遅いって。」と、こんな反応ばかり。だが『夢は大衆音楽界のダイヤの原石を発見する事』の千島氏、頑張った。「このバンド、今はもっとポップ路線に進んでいますから。」などと偉い人達を説得し続けた結果、インディーズレーベルなどからCDデビュー予定の他のグループとの合同イベントに参加が決定。どんなイベントかというと『偉い人達を前にしての発表会』。新人発掘のコンテストも皆無になった時代。社内の人だけでなく、他のレコード会社、雑誌、ラジオの音楽番組関係の人達も出席し、場を盛り上げるために、それぞれのグループが限られた人数のファンの入場を許された秘密の発表会。ほぼ飛び入り状態の『METAL SMILE』にはファンの入場許可は無かったが何にせよ、『METAL SMILE』の4人にとっては願っても無いチャンス。「できるだけポップなパフォーマンスを。」と千島氏は彼らに念を押した。『AEROSMITHみたいなステージ衣装』をマサノンが提案したが、衣装はこれまで通りということにした。

『発表会』前夜。12月某日。閉店間際の『はがね屋』。奥のテーブルで4人は顔を見合わせる。今夜ばかりは女性抜きで4人のみ。それぞれのガールフレンドには『後でサプライズ』ということで『発表会』のことは内緒。全くデビューの保証は無いイベントなので「あまり期待させても、、、」という不安もあったのかもしれない。ちなみにヒデキちゃんは某ハリウッド女優に夢中になりかけていたので彼女と上手くいっていなかったという。

そのヒデキちゃんが「これ、、、ラストチャンスかな?俺たちの年齢からしても。」と切り出した。少し沈黙があって浦辺氏が「かもしれないな、、、時代の変化は思ったよりも手強いしな。」と重い声で続いた。それを聞いて市川氏が日本がダメならアメリカ、ヨーロッパもあるぜえ。」と冗談混じりにふざけた口調で言う。さらにマサノンが続いて「最高の演奏をするしかないんじゃないの?ステージに立つ事はもう決まってるからさ。俺たちのモットーだろ?『ステージに立ったら常に一生懸命』。」「毎日が背水の陣ってか。」と浦辺氏が天井を見上げた。

カウンターでは店長の羽賀根氏がオレンジ色の照明に照らされて一人で閉店準備をしながら4人の会話に耳を傾けている。

食事を終え4人は演奏曲の最終選考を済ませると、羽賀根さんに「ごちそーさんでした。」といつもの調子で言って会計を済ませて店を出ようとした。すると羽賀根さんがカウンターから4人を呼び止めた。「何か、大きいイベントを控えてるみたいだけど、スタイルはどうあれ『ロックの火』を消さない様に頼むよ。ははは。『ロックは役目を終えた』なんて言ってる連中は『最高の演奏』で黙らせてやれ。それが通じないなら、その連中はきっと音楽を聞く耳を持ってない連中だ。相手にするだけ無駄だ。とにかく頑張れ『ハードロッカー』。これおごり。よかったら飲んでって。好きだろ?」と4つのダブルショットグラスにスコッチウイスキーを注いだ。そして彼は『ROLLING STONES の It's Only Rock'n Roll』を口ずさみながら食器をかたづける為に4人のいたテーブルへ向かった。

「え?いいんですか?」と浦辺氏が言うと、羽賀根さんは彼らに背を向けたまま右手を突き上げて親指を立てた。4人はお互いのグラスを『コツン』と合わせて一気に飲み干した。

「「「「あぎーす。。。」」」」 (*訳:ありがとうございます。)

ちょっと体の内側から暖まった(でも懐は寒い)四人は最寄りの神社へ『願掛け

』に。滅多にしない事だが、アルコールが入ると四人とも少々『ロマンチスト』になる傾向がある。もちろん本人達はなんが恥ずかしいので否定する。酔っばらいが「俺、酔ってないよ。」と言うのと同じか。

賽銭箱の前に無言の四人が整列して手を合わせて目を閉じた。そして同時に目を開けた。その呼吸の合った様はこれまで四人が一つ一つの演奏の中で培ってきた彼等のみが共有するタイミングを表しているかの様だった。

「ビッグになってやろうじゃねえの。(市川)」とか「見ていてくれ、ロックの神様。あと天国のフレディ。(横山)」とか「あとクリフ・バートンも!(仙道)」とか「Time has come! (浦辺)」とか言いながら、ゲラゲラ笑いながら、神社を後にすると一瞬、空で何かが光った。ヒデキちゃんが光が来た方の夜空を見上げて「流れ星、、、、ですかね?」と首をかしげた。マサノンは「誰か願い事したか?」と他の3人に聞く。それに対し浦辺氏が「楽しんで一攫千金。」と冗談で呟くと他の3人の『ローキック』が彼のふくらはぎに炸裂。市川氏、「流れ星、はたまた不吉の前兆か!?!」と言ってもう一発ローキックを放つが、それを浦辺氏、上手くかわして「うりゃ。」と柔道の『出足払い』の様な技を出した。市川氏は倒れはしなかったがけっこうよろけた。そして4人で笑う。たとえ一般社会に理解されなくても、バンドを続ける限りこんな楽しい時間が続くと四人は思っていた。

「じゃあな。」と、いつもの調子でそれぞれの帰路へ。

ところが、12月の『発表会』当日、某イベントホールにてトラブルが発生。まず暖房のよく効いた楽屋にて。当時のニューヨーク風ストリートファッションとでも言おうか、ストリートバスケットをやりだしそうな服装の4人組が、黒いTシャツに黒いジーンズの『METAL SMILE』にちょっかいを出して来た。その中の中心人物と思われる『シカゴブルズ君（勝手にこう呼ぶ事にする）』が浦辺氏の『METALLICAのTシャツ』、ヒデキちゃんの『MEGADETHのTシャツ』を見て（ちなみにマサノンは『AEROSMITH』で市川氏は『BONJOVI』）、「アンタ達ヘビメタ系なの？へー。珍しいねイマドキ。」とニヤニヤしながらガムを噛みながら言った。ブルズ君の仲間もニヤニヤしながらこちらを見ていた。浦辺氏、市川氏、『カチン』と来た。『こいつ殴っていいか？』と目が訴えていたが、ヒデキちゃんとマサノンが無言でさとす様に二人を見つめて『契約までは我慢、我慢。』と訴えた。

楽屋の反対側にはヴィジュアル系バンドが3組いたらしいのだが、メイクが完了すると、どこからどこまでが一組なのか、誰が誰なのか分からなかった。あともう一組、全員が『猫の耳』を付けたソフトロック娘5人組がいて鏡張りの壁の前で振り付けの確認をしていた。

その後いまいちイライラの治まらない浦辺氏、市川氏に対し『どこかの偉い人』と思われる人が追い打ちをかけた。出場グループすべての極めて簡単なリハーサルが終了した後のこと。廊下で『偉い人』がヒデキちゃんを見つけ、「おお、君、飛び入りバンドのにいちゃんか。千島君の推してた。ヘビメタから路線変更したんだって？わはは。そうだよなあ。もうヘビメタも長いものに巻かれないと喰っていけないよなあ。わはは。売れないアートはゴミみたいなモンだって前の社長も言ってたしなあ。わはは。ま、期待しているよ、元ヘビメタのポップ。」と一方的に喋って去って行った。背を向けたまま手を小さく振って。さすがにヒデキちゃんも頭にきて、その無念さを他の3人に報告。浦辺、市川両氏はもちろん、マサノンも『ポップ』と呼ばれる事自体は気にならなかったが、これまでの活動とファンの存在を否定されたように感じたとし、何より自分たちの尊敬するミュージシャンを馬鹿にされた様で悔しかった。そして浦辺氏がある『反撃』を提案してしまった。他の3人もそれに賛成してしまった。「大丈夫。少なくともPAのスタッフはメタル好きだ。一人がIRON MAIDEN、もう一人がJUDAS PRIESTのTシャツ着てた。(浦辺)」

飛び入り扱いの『METAL SMILE』の出番は、リハーサルでは一番始め、本番では一番最後。別に『とり』でも『メイン』でもなく、単にあまり期待されていないからで、興味の無い人はすぐに帰れる様になっていただけであった。始めに登場したブルズ君のグループはいわゆるラップ／ヒップホップ系。曲はともかく、悔しい事にパフォーマンスの完成度は高かったし、たしかに『イマドキ』だった。ブルズ君の隣ではレイカース君がレコードを『きゅきゅきゅ』とやっていた。その他のヴィジュアルバンドもやはり個性には欠けたが『いいもの』を持っていたし、一番驚いたのは『猫耳5人組』のズバ抜けた歌唱力であった。

そして会場では3、4人のスーツの人が周りのスーツの人に挨拶をして席を立ち、『METAL SMILE』の登場となった。4人がそれぞれの立ち位置につき楽器を構える。エフェクターやアンプはリハーサルの時よりもはるかに『やかましい』設定に変えていた。つまり彼等にとっての『いつも通り』。リードヴォーカル兼ギターのマサノンがマイクを取ってこう言った。

「METALLUJAH（メタルヤ）です。ヘビメタではなく『ヘヴィメタル』を中心にやっています。」

『METALLUJAH』とは『メタルと神を賛美するハレルヤ』を取ってくっ付けた彼等の造語で、これこそ四人がメジャーデビュー用にとっておいたバンド名だった。契約に漕ぎついた後は『手の平を返すごとく』また純メタル路線に戻ろうと4人は企んでいたのがあった。しかし4人が子供の頃『悪戯好き』だったことも手伝って、我慢に疲れた『METAL SMILE』は「今日はとことん好きにやって偉い人達を驚かしてやろう。」「契約？そんなモンは後回し。俺達は硬派めたるバンドとして認められたいんだ。」ということになってしまった。やはり最後のチャンスと思っていたからこそ四人とも熱かった。悪く言うと一般社会にはあまり適合しない連中だった。他人を傷つける様な悪戯は一切しない連中だけども。

ステージ上の4人が顔を見合わせて『ニヤリ』と笑った。客席の方では千島氏が「一体何をやる気だ？」と心配そうに見ていた。偉い人達は事前に配布された資料を見ながら「このコ達『メタルスマイル』じゃないの？」と顔を見合わせていた。ドラムの市川氏のカウントと共に4人の『反撃』が開始された。一時は国内外のヘヴィ

メタルを『ヘビメタ』と呼び、もてはやし、そしてあっという間に見捨てた人々への『反撃』。それは無理矢理にでも『自分達で選んだ名曲』を聞かせる事。自分達の最高の演奏で。尊敬する者達への敬意を込めて。

Skin O' My Teeth / MEGADETH, Fight Fire with Fire / METALLICA, Angel Of Death / SLAYER, Die Young / BLACK SABBATH, Stone Cold Crazy / QUEEN, Breaking The Law / JUDAS PRIEST, Savage / HELLOWEEN...などをメドレーで続ける。(知ってる人が聞いたら「統一感が無い。」と言われそうだが。) 学園祭にて一度やったきりの『高速メドレー』であったが本番前のちょっとした確認だけで見事に四人は続けた。同じ大学で音楽以外のところでも苦勞を共にして(互いに助け合い、足を引っ張り合って)来ただけにその『息の合い方』はプロ並みだった。表現力もかなりのレベルであることを伝えた。それに加え、すでに演奏を終えた5つのグループとはケタ違いの『やかましさ』、、、というよりも『破壊力』か。一人の偉い人が両手で耳を塞いで『イヤな視線』を千島氏に送って、演奏の最中に席を立った。PAや照明のスタッフは何が起きているのか分からない様子だったが演奏を楽しんでいる様だった。客席の前の方ではまだ帰らずに残っていた『別のグループのファン』のうちの『メタル好き5、6名』が肩を組んで『ヘッドバンギング』を始めた。ステージ裏ではヴィジュアルバンドのギタリストの一人がノリノリで浦辺氏のギター演奏に合わせて自分の指を動かしていた。いわゆる『エアギター』。『METALLUJAH(メタルヤ)』の4人は演奏しながらその様子をおおいに楽しんでた。メドレーの締めは彼等のオリジナル曲の中でもかなりの自信作『Heavier Than Metal』。しかし『質より量』の売り上げを重視する人々、『新しいモノ』重視の人々まで惹き付けることはできなかった。

トドメの曲は『METALLICAのMaster Of Puppets』ハイスピードフルコーラス。ここ半年ぐらい彼等のライブの『お決まり』になっていた曲だ。制限時間の20分(他のグループは30分程度)をとっくに過ぎていたのでスタッフが演奏を止める様に指示を送ったが、浦辺氏とマサノンはハイキックで空を斬り「知るか！」と言わんばかりにそのまま演奏を続けた。ついに3人のステージスタッフが渋々出て来たが、ちょうど演奏は終了。終了した瞬間にステージの照明は落とされ、偉そうな人に何か言われながらスタッフ達はかたづけを開始。会場のスタッフの何人かが大きな拍手喝采をしてくれた。『やるだけやった』4人は大満足。だがホールを見回すと溜息しか出て来なかった。客席の偉い人は2人しか残っていなかった。「せめて5年早くこのバンドが結成されていたら、、、」「でも5年しかもたなかったろ。」「あのヴォーカル

はもったいなあ。ルックスも悪くないし。」なんて会話が交わされていた。

楽屋で4人が帰り支度をしていると『スゴい形相』で千島氏が現れて、「なんて事をするんだ。これじゃ今回の契約はおろか今後の契約の可能性も潰してしまうかもしれないぞ。」とのたまい。浦辺氏、市川氏、マサノン、ヒデキちゃんは横一列に並んで無言で頭を下げた。そして無言のまま楽屋を出て行った。その楽屋の奥ではブルズ君達がどこかの偉い人と『和やかムード』で何やら楽しそうに会話をしていた。

トイレの前を4人が通りかかると『さっきの偉い人』が出て来て、ヒデキちゃんを見つけてこう言った。頭には何故か『猫の耳』がのっかっていた。「だめだよ～。君たち。あんなのじゃ。これから『売れっ子』（たぶん既に死語だ。）になりたいんだったらさあ、こう、今風に、もっとかる～い感じでいかなきゃあ。ヘビメタなんてもんはとっくに、、、」ヒデキちゃんが殴りかかった、、、と思ったら『寸止め』だった。「ま、メタルを笑うヤツはメタルに泣かされるという事を覚えておいてください。」

その夜、クリスマスの飾り付けも完了した某ファミレスにて。

『METAELLUJAH(メタルヤ)』の4人は事の重大さに気付いていた。デビューを望むファンの期待を裏切ったという罪悪感を感じていた。テーブルに肘をつき、手の平を額に当てて「やっぱ、まずかったか。」と浦辺氏。市川氏は「ちょっといい？」とメンバーに言ってタバコを取り出し「よかったんじゃないの？俺達らしくて、、、と思うけど。」と言い、マサノンはメニューから視線を上げ「筋は通せたでしょ。ロッカーとして。」と言った。ヒデキちゃんは「ロッカーとしては最高にカッコイイ過去になるよ。」と言って浦辺氏の背中を励ます様にメニューで叩く。

市川氏がタバコをくわえたまま、「さて、これからどうするか。今日来てたレコード会社の間じゃ『ならず者』扱いだろうな。きっと。」と両手を突き上げて背筋を反らした。「だろうな。少なくとも『METAL SMILE』とは名乗れないだろうな。3、4社来てたみたいだけど。」と、マサノン。「とりあえず来月予定通りライブやって、、、」とヒデキちゃんが言い終える前に浦辺氏が腕を組んで「、、、そして今日の反省をしながら『普通』の社会人として身を隠すか。仕事探して。すまん。

『Unforgiven (*Metallicaの曲名、同タイトルの映画も有)』だな。」と言って頭を下げた。「いやいや、いいって。浦辺さんだけの責任じゃないし。俺だって『偉そうな人』に『偉そうな事』言っちゃったし。」とヒデキちゃん。市川氏がからかうようにヒデキちゃんのモノマネをする。「メタルを笑うヤツはいつかメタルに、、、」「もういいって。」とヒデキちゃん。顔真っ赤。

『ハッ』としたような表情でマサノンが「ん？待て、浦辺。仕事探すって、お前、、、」

「俺、一旦やめようかと思う。これが最後のチャンスって覚悟決めてやったからさ。もうモチベーションっていうか、、、それにこのまま続けても何も変わらねえ気がするんだよ。」と浦辺氏はうつむいたまま言った。

市川氏はその発言に対し『ガタっ』と立ち上がり「な？冗談だろ？諦めんのかよ。日本がダメなら海外もあるじゃねえか、、、」と言うと次に言うべき事が分からずゆっくりと腰を下ろした。

その様子を見たヒデキちゃんは落ち着いた声で「ま、浦辺さんの気持ちも、市川さんの気持ちも分からんわけでもないけどねえ、、、」と言って静かに溜息をつくと「、、、俺は今日の一件で俺達も変化っていうか成長かな？音楽の方向性以前に『人間』として成長が必要なんだと思った。」

それを聞いたマサノンは少し考えてから腕を組んで「俺は、、前に二つのバンドにいたけども、『METAL SMILE』は間違いなく一番だと思ってる。このバンドならビッグになれるって何度もライブの度に思ったし。でも俺も正直、最近迷ってる。」と言ってうつむいた。浦辺氏はうつむいたまま黙っている。少々冷静さを取り戻した市川氏は「俺は、、なんて言っているかわかんねえけど、またチャンスは巡って来ると信じてる。」といって3人の顔をうかがった。

しばらく沈黙が続いてようやく浦辺氏が顔を上げた。「お前達が別のギタリスト見つけても構わない。だけど、、その、なんだ、10年ぐらいして、まだロックやってたら混ぜてくれねえか？アホなくらいワガママ言ってるのは分かってる。オーディションだって受ける。」「そうか、、」

4人はまた真剣な顔で黙り込む。特にマサノン、ヒデキちゃん、そして市川氏の3人は浦辺氏が『愚直』を体現したような人間だと知っていたし『一度言い出したら聞かない』事も充分知っていた。

確かに4人とも『将来に対する不安』は常に背負っていたが、あまり真剣に向かい合っていなかったことに気付いた。『バンド活動』を言い訳にして『夢』という言葉に駆られてプラス思考と現実逃避の狭間を右往左往している様にも思えてきていた。そして自分の未熟さを実感して、それは自信の喪失にもつながっていた。4人は何かを言いたかったが、仲間の心境と自分の本音を理解しようとして敢えて何も言わなかった。『アレ』は確かに最高の選曲と最高の演奏だったし、彼等の信じた彼等の進みたい方向を具現化していた。しかし、それがあの舞台上で受け入れられなかったということは、、やはりこれ以上の活動は意味をなさないのか？『大きな絵画』を鑑賞するときの様に一度ステップバックして人生という曖昧なモノを冷静に広い視野で見直すことは悪い事ではないし、むしろ今の彼等には一番必要な事なのかもしれない。自分自身が『個人』としてどうありたいのかを見直す必要性を感じていた。

とにかくデビューのチャンスを失っても、この絆だけは失ったら一生後悔するような気がしていた。ここ2、3年他の誰よりも、家族よりも、ガールフレンドよりも長い時間を共に過ごした仲間との絆、、

市川氏が沈黙を破る。「まあ、俺達も、他のメタル愛好家も今のこの現実を受け止めないといけないうってことか。ははは。流行モノはいつかは廃れる運命。そのうち復活とか再ブームとかあるけどさ。俺達も、、じゃあ10年後な。だって俺達の曲の半分近くはお前の作曲だろ？お前無しじゃ、、なあ。」

ヒデキちゃんは少し悲し気な目つきで「10年後、もし4人とも成長して、でも一緒にロックやりたくなったら、、、またやりましょう。」と言って浦辺氏を見た。浦辺氏が窓の外の夜の市街地を悔しそうに見つめて「大御所は別として、これ以上の新人には居場所が無いってか。」と言うと、マサノンがメニューを見ながら「今日の事はヒデキの『名言』も含めて誰にも言わないでおこうか。『メタルを笑うヤツは、、、』。」「だーかーらー、もういいって。（ヒデキちゃん、顔真っ赤）」「、、、10年後。2006年か。」と言ってウェイトレスを呼んだ。

注文を済ませると4人は敢えて音楽の話題には触れずにお互いの私生活をからかったり、昔のTVアニメの笑い話をした。「あ、誰か金貸してくんない？（仙道）」「不受理。（市川）」店内には楽し気なクリスマスソングが流れていた。

約一ヶ月後、どこかの『偉い人』の間での評判を暴落させてしまった彼等は（予想通り）アマチュア界でも肩身が狭くなっていた。以前は友好的だったインディーズレーベルやいくつかのライブハウスからも『もったいない事をした』と呆れられていた。戒めと反省の意味を込めての『METAL SMILE』最後のライブは都内のライブハウス『JACK'S (ジャックス)』で行われた。4人の初ライブもその場所だった。都内の雑居ビルの地上一階から地下二階。地下二回は倉庫で地下一階がライブホールになっている。彼等のことを気に入ってくれていたマネージャーの岡野さん、当時49歳、が気を使ってチケット20%オフの『純関係者（ファン）以外立ち入り禁止』にしてくれた。会場に訪れたファン全員に以下の様な印刷物が配布された。

今までMETALSMILEのライブに足を運んでくれた人々へ
我々のメジャーデビューを待ち望んでくれている人々へ
さらに幸か不幸かデモテープまで購入してしまった人々へ
誠に勝手ながら我々、横山、浦辺、仙道、市川は
それぞれの不甲斐なさを反省するため
それぞれの旅に出ます。

METAL SMILEというプロジェクトは無期限で休止です。

今までの熱いサポートに心より感謝感激アメラレ。ほよよ。(死語)

ファンは皆驚いていたが、さすがメタルファン。『男のロマン』的なモノを感じたか。熱いながらも『それぞれの旅』という一言に感銘を受け、『無期限で休止』を冷静に受け止めていた。ライブでは『一切の喋り無し』で彼等のオリジナル曲より厳選されたスピード感と疾走感の溢れるもののみ6曲が演奏され、4人がステージ前に来て深々と頭を下げ、ラスト『MORTORHEADのカバー、No Voices In The Sky』で終了した。惜しめない拍手と怒号にも似た歓声の中、四人はステージを後にした。自分達を『ヒーローか何か』の様に崇拝にも似たサポートをしてくれた人々。義理とは言え、大学卒業後も会場に足を運んでくれた人々。端から見れば「何勘違いしてんの？あんだ。」と言われそうぐらい涙を流す人もいた。志半ばながらも四人の胸には達成感が満ちあふれていた。『こんな終わりでもよかったんじゃないか』という気さえした。

このラストライブまでの一ヶ月とその後の一ヶ月で四人はそれぞれの行き先を『悩んで悩んで』決定した。横山マサノンは知り合いのボイストレーナー（後の『第一』横山夫人）の紹介で子供向け番組の『ロック調の歌』を歌えることになった。その陰には『例の発表会』に出席したどこかの偉い人の推薦もあったらしい。実はマメに貯金していたという仙道ヒデキちゃんは、既にどこかへ旅に出ていた(ほとんど行方不明になっていた)ハンセンさんの(悪)影響で『全国フリーターの旅』に出る事にした。バイクにまたがって。(本人は否定したが) けっこう経済的に余裕のある家庭の市川ユート氏はMBA取得の為に渡米したガールフレンドの東尾さんを追いかけて、、、ではなくドラム技術の幅を拡げる為にニューヨークにある音楽院行きが決定。バンドのデモテープと『カッコイイことを書いたエッセイ』を送ったらすぐにいい返事が来たとか。浦辺カズキ氏は周りの人間を「少しは安心させたかった。」ということで『普通』に就職活動を始め事にした「もう少し大人になろう。」という狙いもあったらしい。とにかく『メタル野郎』の自分はしばらく封印することにした。自分の未熟な部分を変えるために『今までやりたがらなかった事』を敢えてやってみようと思ったのである。

しかし『10年後にまた』と言っても4人の心にはちょっとした不信感が芽生えていた。信じた音楽とそれに対する自分の才能への不信感。互いに互いの『20代前半という大事な時代』を狂わせたのではないかという『何よりも固いと信じたチームワーク』に対する不信感。誰も口にしなかったけど。口にするのが辛かった。そして一種の気まずさから『腹を割った話』ができなくなっていた。互いに互いの意思を尊重しようとする思いが仲間への『遠慮』を生じさせていたのかもしれない。さらにその遠慮がお互いに「俺のせいだな。」「恨まれているんじゃないだろうか?」という誤解も生じさせていたかもしれない。実際、ラストライブ前の貸しスタジオでの練習中の彼等の会話は明らかに少なかった。

何にせよ必要としてくれる人々が社会の少数派ならば、どんなヒーローでもやはり『社会の異端』になってしまうわけで。元々ロックがそういうスタイルを売りにする様なところもあったわけで。時として居場所を探すのに苦労するわけで。たとえ彼等が『人道に反した』事は一切しなくても。その時代、その社会に最も必要とされるヒーローの在り方も悪者の在り方もいろいろあるわけで。『爆音戦隊METAL SMILE』は活動休止。『METALLJAH (メタルヤ)』というバンド名も無期限で封印することにした。少なくとも、また4人そろってデビューするまでは。都内某所、ほぼ埼玉県との県境。某商店街の外れにある小さな喫茶店が『めたる屋』と名乗ることに

はなるのだけれども。浦辺氏は『はがね屋』の店長のポジションを引き継ぐ際に『METALLJAH（メタルヤ）』をなんらかの形で残したかったか、4人が帰って来れる場所を持ちたかったのだろう。真相は本人のみぞ知る。

携帯電話もE-メールも全く普及していなかった時代。四人は敢えて次の連絡先を交換することなく引っ越しをした、、、というか『すっかり』忘れていた。今まではそんな事をしなくてもお互いの行動パターンはだいたい読めていたから。そして『唯一筆まめ』だった浦辺氏がそれぞれの実家に年賀状を送るぐらいで、たいした情報交換も無く時は流れ、この四人以外で『めたる屋』の本当の語源を知る人も無く時は流れた。そして過ぎ行く時間の中で輝いた『夢』は灰色の『過去のしがらみ』に姿を変え、そして繰り返す『日常』は、それまで『蛇行する急な上り坂を駆け上る様な日々』を送っていた人間に『皮肉的な平穏』を与えた。

しかし灰色の『過去のしがらみ』はゆっくりと、静かに彼等の後を着いて来ていたようだ。いつの間にか『爽やかな空の深い青』になって。さらに真冬の早朝の河原に出る霧の様な『もやもやしたモノ』が彼等の心を包んでいた。安っぽい表現で言うなら「何か足りない気がする。」というやつだ。うーん、ありがち。

で、舞台は現代に戻って。

「正直、『METAL SMILE』も『METALLUJAH』も完全に過去にしてもいいかと思ってたんだけどさ、、、どうする？やってみっか？」と浦辺氏が指に付いたケチャップをナプキンで拭き取りながら二人に聞く。ちょっと間があって、マサノンが「どうるってもなあ。お互い仕事あるしなあ、、、でも予定が合うようだったらいいんじゃないの？一回ぐらい。ライブ。実際やってみたいし。」と言ってヒデキちゃんを見る。

ヒデキちゃんは「俺の仕事（予備校講師）は夜がメインだからねえ。どうだろう、、、なんてね、実はやる気満々。ステージ中毒みたい、俺。最近よくライブやってる自分を想像してる。」とアイスティーのグラスを眺めながら言った。しかし何か気付いた様に視線を上げると「でも、どこのライブハウスも『いきなり』は無理じゃないかね？ブッキングいっぱい。それに、もうどこもスタッフ入れ代わってるだろうし、俺達のことなんか誰も覚えていないんじゃないの？」とヒデキちゃんと言う。それに対してマサノンがフォークを指先で小さく振りながら「そりゃそうかもしれないけど、『顔パス』できなくても前のデモテープ持って廻れば時代遅れでもどこか一つくらい、、、」と言うと三人は同時に雷に打たれた様に『ハッ』として顔を見合わせた。「「「JACK'S!!!」」」

「あははは。忘れてた、あそこの『ジミヘンおやじ』ならまだ現役バリバリでやってそうな気がする。なあ、ウラベ。」とマサノンが浦辺氏を見る。浦辺氏はちょっと考えて「でも、やっぱ難しいんじゃないかねえか？どうやってお客呼ぶよ。前のファンもいかげん大人になってるぜ。俺達の『HRハードロック／HMヘヴィメタル』のライブに来るかね。大学の同期もほとんど音沙汰無しで、もう全国バラバラになっちまったし。お客集められないんじゃない『JACK'S』に悪いだろう。」と言う。するとマサノンが「そんなときゃ学生のバンドと一緒にイベントにブッキングしてもらおうさ。で、始めの頃みたいにノルマのチケット身の回りの連中に配って。タダで。今なら一回ぐらいの赤字ライブは平気だろ？お互い。それに今更『メイン扱い』されたいわけじゃねえだろ？ま、できればメインがいいけどさ。」とデザートメニューで腕を組んで難しい顔をしている浦辺氏の顔を扇ぐ。

続いてヒデキちゃんが「大人になった『METAL SMILE』で初心に帰るってのもいいね。若い人に混ざって。共感を得るかも。（誰の？）」と言いながら浦辺氏のグラスの水にタバスコを素早く振る。浦辺氏は顔の近くでマサノンがメニューで扇ぐの

で目をつぶっております。ニヤニヤしながらマサノンが浦辺氏を扇ぐのを止めると、その浦辺氏「初心ねえ。複雑な心境ではあるんだけど、俺は。じゃ、とりあえずウチの企画営業、ヒデキ、昼間暇だろ？『JACK'S』に連絡取っというて。」「え？でも連絡先とっくに捨てたよ。「どこかの楽器屋に行けばライブスケジュールとか置いてあるだろう。」と言って浦辺氏はグラスの水を一口。顔をしかめて、ちょっとむせて、ヒデキちゃんを睨みつける。「おい。ほんのり水がなんか赤く濁ってるぞ。」「何の事ですかねえ？」「てめ、火いふくぞ。火！」「あはは。久しぶりに聞いたわそれ。」

そのやり取りを見て笑いながら「そういう所はあまり成長してねえな。お前ら。」とマサノンが呆れた様な表情で言う。「お前も同類じゃ。」と浦辺氏、タバスコをマサノンのグラスへ。ま、まだまだ息が合っているという事でしょうか。「よし。やったるか。ユートには俺がE-メール送っておくから。」

「しかし、ここのチーズバーガー味落ちたな。ウチのサンドイッチの方が上だわ。」と言って浦辺氏が席を立つ。

それを聞いたマサノンが席を立ちながら「へえ。じゃ近いうちに行ってみるか。懐かしの『はがね屋』に。」と言う。続いてヒデキちゃんが財布の中を覗き込みながら「あ。誰か金貸してくんない？」と言うが完全に無視される。「さて行くぞ。」と浦辺氏が言って三人は小雨の中それぞれの帰路へ。三人の表情は明るかった。

12月某日。第三金曜日『メタルナイト』を控えた『メタルカフェ』こと『めたる屋』は夕方から何かと忙しい。表の立て看板の黒板を『メタルナイト用』に書き換えたり、カウンターの奥にあるオーディオ機器のあたりに浦辺氏がCDの山を築き上げたり（勝手に崩したりすると怒られる。）週末の始まりという事もあって『街に繰り出す前にちょっとお茶を』といった感じの客が次から次へ。

午後17時ちょうどに（一応芸能人のはしくれ）マサノンがニットキャップを深々とかぶって「ちーっす。」と現れた。すでに従業員ともすっかり仲良くなっている。特に『芸能界大好き』マキさんとレーコちゃんと。勤務時間が終了してカウンターでくつろいでいるマキさんの隣にマサノンは着席。

ところで、レーコちゃん。すでに某大学への『推薦枠』での入学が決定していた。それも浦辺氏、ハンセンさんの通った大学。それも『経済に興味ない』とか言っていたくせに経済学部。本人曰く「いいじゃない。別に。」今はセンター試験を控えた彼氏の応援で忙しいんだと。その事を知らされた時、浦辺、ハンセン両氏の反応は「何—!? 世の中そんなに甘いモンだったのか!」「大丈夫か、この国の将来は!？」と、こんな感じ。この二人はかなり苦労した受験生だったらしい。でも可愛らしいお嬢さんに可愛らしい声で「よろしくね。先輩。」と言われればまったく悪い気のしない二人。もう立派なオッサン。

その発言や行動とは裏腹にけっこうしっかりしているレーコちゃん。「大学に入る前に馬鹿になりたくないから。」ということで予備校はまだ通っている。一方彼女の相方(?)の香ちゃんは何処かの『北米留学を世話してくれる会社』を利用して留学準備を着々と進行させていた。今は志望理由のエッセイを英語で書いたり、試しにTOEFLなる英語のテストを受けてみたりで忙しいんだと。なので最近バイトの時間は少なめ。やっぱりレーコちゃんと一緒に予備校は続けている。

で、その予備校で二人にその経歴がばれた仙道先生ことヒデキちゃんが現れた。マサノンの隣に着席するなり「やっぱ、『JACK'S』決定だって。」と、えらい速さで食器を拭いている浦辺氏に告げる。「マジ？」と浦辺氏。

何が『決定』かというとならぬと彼等の再結成ライブの日程ではなくて『JACK'S』の閉館。マネージャーの岡野さん、ずうっと迷っていたのだがついに決心したという。今の時代、アマチュアの生演奏にお金払って足を運ぶ人はますます減少。さらに『JACK'S』は正直、大物と呼べる程の規模ではない。相変わらずトイレは綺麗だけど

でも完全に閉館となるのではなくて『お洒落なジャズバー』に生まれ変わるんだと。当然名前も変えて。『かなりの料理の腕前でカクテルもプロ並み』の奥さんは張り切っているみたい。野外イベントなどへの機材の貸し出しは続けるらしい。

「じゃ、俺達のライブはどうなるんだ？」とマサノンが隣のヒデキちゃんを見る。「それね。なんと、岡野さん曰く、、、来月の『JACK'S』最終日に決定。」「よっしゃー！、、、って素直に喜べないな。」と言って、浦辺氏は食器のかたづけが一区切りしたのでCDをセットする。「本日のメタルナイト一発目は我々のリユニオンを記念して『JUDAS PRIESTのPainkiller』だ。」するとマキさんが「え〜。それ私にはヘビー過ぎるから別のにして〜。」と言う。マサノンが続いてからかうように「そうだウラベ。女性には優しくするもんだ。」と言う。『ちっ』とあからさまに舌打ちをして浦辺氏、渋々『OZZY OZBOURNE』と交換。奥のキッチンからハンセンさんが出て来て「あれ、マキさんまだおったの？じゃ、このフライドチキンサラダ、あそのテーブルに持ってって。あ〜、マサノンちゃんにヒデキちゃん。」（30過ぎの男を『ちゃん付け』。）と言って二人と握手。マキさんは「え〜？」と言いながらもサラダを持って行く。ちなみにヒデキちゃんとハンセンさんは共に映画好きで大学の頃からやたら仲が良い。

『メタルチック』な革ジャンを来たお客さんが3人、そしてそれに混じって平川君が小走りでやって来た。「すいません。遅くなりました。」そうそう、平川くん、今日は16時半からのはず。やっぱり大学生、学業も忙しい時は忙しいのか。革ジャン3人組はレジでカップチーノを3つ注文した。ハンセンさんが会計を済ませて平川くん、急いでカップチーノの準備を始めるも浦辺氏に「まず、手を洗って来なさい、手を。」と『もったもな事』を言われ急いで奥のキッチンへ。マキさんが「じゃ、そろそろ帰るネ。」と言って席を立とうとすると浦辺氏が「すまん、マキさんこれ持って。」とカップチーノ3人前を出す。「え？またあ？時給上げて。」で、レジの下で落とした小銭をうずくまって拾っていた大男ハンセンさんが「大丈夫。もう手えあいてるから。」と言ってトレイにカップ3人前を乗せて窓際に座っている3人組のところへ。

『カランコロン』と音がしてマキさんと入れ違いで黒い皮のハーフコートを来た男性が一人現れた。ケニーGの様な髪型。店内を軽く見回して「相変わらず全席禁煙か、この店は。」と憎まれ口をたたく。『METAL SMILE』ドラム担当、市川勇人（35歳）登場。

「おー！ついに来たか。ユート。」とマサノンがカウンターから振り返り、ヒデ

キちゃんも振り返る。浦辺氏がエプロンで手を拭きながらカウンターから出て行って『パチン』と彼とハイファイブを決めた。「おい！ウラベ！ちゃんと手え拭けよ。なんか『ヌルッ』ときたぞ。」と言って市川氏、半笑いで駆け寄って来たハンセンさんのエプロンに手に付いたカプチーノの泡を擦り付ける。「また、背え伸びたんじゃないの？ハンセン。」「なはははは。そうかもねえ。」元炎のロッカー4人と大学の同期の大男。ほぼ10年ぶりの再会。店内では『OZZYのCrazy Train』のイントロが始まっていた。好きなモンなら誰でも知っているあのイントロに合わせて5人でヘッドバンギング。端から見るととっても異様。まあ、好きなモンにしか解らない快感とでも言いましょうか、、、お客さんの中にも何人か首を振っている姿が、、、

夕食時には軽食的なモノとデザート的なモノしか出さないのので19時を過ぎる頃にはもう店内には『HR/HM』好きの客が数人いるのみでそれぞれ店内に流れる『そっち方面』の音楽に聞き入っている。『Painkiller』が流れた時には一人で首をふる若者もいた。メタルナイトの常連。カウンターにはマサノンとヒデキちゃんと市川氏が並んで座っていて、ゲラゲラ笑いながら『解散後』のそれぞれの経過（彼等曰く『反省期間』）を話し合っている模様。浦辺氏とハンセンさんは会話に出たり入ったりしながら店内の仕事をこなす。遅刻分を取り戻すために平川クンも頑張っている。実は次の日、新しいガールフレンドとサッカーの天皇杯、準決勝を見に行くことになってたんだと。できるだけ稼いでおきたいわけね。

市川氏が浦辺氏を呼んで「おい、ウラベ。このメタルナイト用のメニューにある『アメリカン』とか『ロシアン』って何だ？ コーヒーにしちゃあ高くねえか？」と尋ねる。何かと言うと『アメリカンはコーヒーにバーボンを混ぜたの』で『ロシアンはウォッカを混ぜたの』。他にも『メキシカン』『スコティッシュ』『フレンチ』『大和魂』などなど。老酒使用の『酔拳』は不評だったので現在は『罰ゲーム (!?)』にハンセンさんか平川クンがジャッキー・チェンの真似をしながら無理矢理飲まされるだけ。「いいのか？ そんなんで金取って。」と市川氏。

「金取ってといえは、」とマサノン「今、店の中でCD流しているけど、音楽著作権上どうなの？」と浦辺氏に尋ねる。「ああ、その話な。最近ややこしくなってるから後にしてくれ。法改正後も先代がいろいろ手伝ってくれたから、、、でも悔しいけど、何にせよ『今のウチの規模』じゃ割に合わないから近いうちに有線に切り替えるかもな。」と浦辺氏は適当に答えると再び奥のキッチンへ。キッチンへ入るところで『ピタっ』と止まって振り返って「何にせよ音楽はやめないぜえ。しかも心はまだ現役ロッカーだ。いつか『反撃』してやる。俺が直接スティーヴとかジェイムズに使用料払うんだったらいいけどな。ったく、あんな金の亡者みたいな『天下り先』社団法人。やっぱりダメだね人間、楽しんで他人から搾取する事を覚えると。役人と高額弁護士と著作権保護を盾にして調子に乗り過ぎじゃ。いい面もあるんだろうが、、、」で、浦辺氏はニヤリと笑って「今に見ている。まずはインターネットから。ふっふっふ。ルッさんチマーん！（*哲学者ニーチェの書物を参照のこと）」そういうところはあまり変わらないのね。この人は。店内に流れる曲は『PANTERAのI'm Broken』。わたくし壊れてます。皮肉？ まあ、権力をかざす人から見れば『ロッカーという人種』はいつの時代も『壊れた人間』に見えるかもしれませぬね。

どういうわけか今日は客足が止むのが早く、19時45分頃になるとお客は奥のテーブル席の4人と『元METAL SMILE』だけになってしまった。新たに何か注文する様子も無いので平川くんは残業も無しに退勤。本当はできるだけ稼ぎたかっただろうが。

「暇な店だな。（市川）」「今夜はたまたまだ！たまたま！（浦辺）」

ハンセンさんが表に出て立て看板を『貸し切り』に書き換える。そこへ「コンバンは一。」と元気よくレーコちゃんが登場。ヒデキちゃんは『ハッ』としてカウンターに肘をついて手の平で顔を隠す。

「あー！仙道先生！何やってるんですかア？予備校に行ったら仙道先生の英語は『体調不良の為休講』って張り紙があったのに。代わりにやる気無さそうな若い先生が自習用のプリント配ってたけど途中で抜けて来ちゃった。」と、レーコちゃんがまだ顔を隠そうとするヒデキちゃんのそばで仁王立ち。

「講師がサボんなよ～。ヒデキい。」とカラカラ笑いながら市川氏がヒデキちゃんの肩を手の平で突く。

「いやいや。今日はさ、市川さんに再会する為に特別。リユニオンだからさ。ちゃんと自習用の問題も用意しておいたし。ははは。」「仮病かよ。学生並みだな。」とマサノン。さらに「さ、生徒に謝りなさい。」と（本当はサボっていることを知っていた）浦辺氏が追い打ち。レーコちゃんがなぜここに来たのかというと「ここに来るといろいろ人生の勉強になるから。」だそう。要は『なんとなく』寄っただけね。香ちゃんは真直ぐ帰宅したらしい。

するとマサノンの携帯電話が鳴った。着信曲は自分の歌っている某TVアニメの主題歌。「あ、はい。俺です。ええ、、、その件ね。さっきお伝えした通り明日はちょっと、、、はい。失礼します。」と言うとパタンと電話を畳んで胸のポケットへ。「何の話し？」と浦辺氏が尋ねると、「子供向け番組の収録があったんだけどさ、最近喉の調子が悪いからって嘘ついたんだ。ほら、これから俺達久しぶりに飲み明かすわけだろ？え？違うの？」とマサノンは半笑いで周りを見回す。「てめえも仮病か！」と笑いながら市川氏。「子供達の期待を、、、」と、からかう様にヒデキちゃん。

「な～んか、がっかり。」と、からかう様にレーコちゃん。「いいんだよ。どーせ、一曲歌ってちょっと喋るだけなんだから。月曜でもOKって向こうも言ってるし。それに今晚は特別。リユニオンだからさ。」レーコ嬢に悪い大人の見本を見せている気がする。

レーコちゃんは市川氏に軽く自己紹介して、コーヒーを一杯（無料）を飲んでさっさと帰宅。最後の黒尽くめの客も夜の街へフラフラと消えて行った。こうなると完全に5人の同窓会状態。どこかの居酒屋に行く予定が結局『めたる屋』で飲み続ける事に。マサノンとヒデキちゃんが近所のコンビニで缶ビールとつまみの類いを買って来た。いつの間にか店内の音楽は止まっていて天井の明かりもカウンターの周りだけ。節電。さらに店内を猫のタマがうろついている。

久しぶりの再会ということもあるのだろうが、しかしまあ、お酒が入ると不思議なモノで話しのネタが次から次へ。5人の学生時代の思い出話はもちろん、マサノンと市川氏の『ウチのカミサンは最高』ノロケ話。ヒデキちゃんの『一時期生徒の女の子にやたらモテた』という自慢(?)話。涙目浦辺氏の『まだあの人が好き』（誰だ!?)という話。ハンセンさんのアメリカとメキシコの国境で『メキシコ人指名手配犯と間違われて一晩拘留された』話。それぞれ『正直なトコロ自分の選択は間違ってたんじゃないかと不安になった』という腹を割った真面目な話。などなど。そしてあの『JACK'S』が閉館になって、さらにその最後のステージに立つのが『METAL SMILE』という話。加えて、浦辺氏とヒデキちゃんには新曲のアイデアがいくつもあるという話。さらに加えて再結成ライブへ向けての『課題曲』の選曲。そしてやっぱり酔っぱらいのクダラナイ話。

ふと時計を見るともう日付が変わる直前。市川氏が「あ、NY（ニューヨーク）のカミサンに電話しなきゃ。」と壁の時計と自分の腕時計を見比べる。浦辺氏が「で、いつまで幕張のウィークリーマンションにいるんだって？」とバーボンの瓶を片手に尋ねる。「ん？一応、二月の頭ぐらいまで。まだ実家にも帰ってないしな。年末年始にはマリコ、、、うちのカミサンも休みとって帰国するみたい。でも彼女の仕事の関係で来年の8月頃に完全帰国するかもな。」市川氏の奥さん、旧姓東尾さんは某日本企業のNY支社で勤務するばりばりのビジネスウーマン。「聞いた？『マリコ』だってよ。おい、出会った頃は『さん付け』だったくせに。ははは。」とマサノンが冷やかす。「別にいいじゃねえかよ。ちなみにその完全帰国に備えて今回レコード会社を廻ってるわけだけども、、、転ばぬ先の、、、」と市川氏が喋り終わる前に「「そんなん、ここまでの話でだいたい分かった！！」」と浦辺氏とヒデキちゃん。良い感じにアルコールがまわってきた。ハンセンさんはタマを膝に乗せてニコニコしている。脳の半分が眠っている。

最後に再会した4人そろっての初練習の日程と課題曲と現在の連絡先を再確認して解散。スタジオはマサノンが現在のコネを使えばどこかのリハーサルルームを格安で使えると言う。ハンセンさんとヒデキちゃんは深夜の映画館へ。営業している保証は無い。マサノンと市川氏は少々千鳥足で『終電に間に合うかどうか』賭けて駅の方へ。肩を組んで『QUEENのWe Will Rock You』を歌いながら。明日もちゃんと営業するつもりのお店長浦辺氏は、良い感じに酔っぱらってはいるものの、電気、ガス、冷蔵庫、戸締まりなどちゃんとチェックして、猫のタマにイカの薫製の残りをあげて帰宅。でも翌朝そのへんの記憶は5人とも途切れ途切れだったりする。

やはり『時間がすべてを解決する』のか、それとも彼等が大人になったのか『METAL SMILE』の4人は再び『腹を割った話』ができるようになっていた事を実感していた。また以前のようなライブができそうだ。そう思うと何か熱いモノがこみ上げて来た。

クリスマスも過ぎ年末ムード一色の12月末日。『めたる屋』はハンセンさんに任せた（押し付けた？）浦辺氏。年内の冬期講習を無事終えたヒデキちゃん。ハワイに行きたがっていた奥さんを説得して『ちょっと延期』にしてもらったマサノン。何故か滅多に着ないハズのスーツにネクタイ、そして綺麗に髪を束ねた市川氏。昼過ぎにこの4人が集まったのは都内某所にある某レコーディングスタジオにあるリハーサルルーム。ダブルバスドラム装備のドラムセットが『どうだ』と言わんばかりに置かれている。他にはけっこう良いアンプとモニターアンプとミキサー関係の機材とマイクスタンドなどなど。壁には『飲食禁止』『禁煙』『シールドは踏まない！』などの張り紙があって、よく見ると『飲食菌糸』『腹へったー！』などと落書きがしてある。

「じゃ、あとお願いします。」と言って係の『首からIDカードを下げた』若者はマサノンに何やら書類にサインを記入してもらおうと頭を下げて出て行った。その間、他の3人はまったく無視されていた。

「へー。」と、何が『へー』なのかしらんがギターケースを片手にヒデキちゃんがキョロキョロ室内を見回す。「なかなか、良い感じのスタジオじゃん。本当に5時間も使っているの？」と浦辺氏はもう自分の立ち位置を決定して、しゃがんだ姿勢で準備をしながらマサノンの方を見る。「おう、任せとけよ。一応、プロの歌手だぜ、俺。滅多にTVに顔出ないけど。」と、マサノンはギターケースを床に置いて慣れた手つきで室内の空調やらミキサー機材なんかをチェックする。市川氏はドラムの椅子の高さを調節しながら「やっぱり貸しスタジオは『日本の方が』はるかに綺麗だよなあ。機材も状態良過ぎるし。」といかにも『アメリカ在住的』な事を言う。「「けっ。このアメリカ野郎が!!」」と浦辺氏とマサノン。

ここで4人のパートの確認。マサノン：ヴォーカル兼ギター、速弾きは苦手。浦辺氏：ギター兼コーラス、その顔からは想像しかねる良い声出します。ヒデキちゃん：ベース兼コーラス、4人の中で唯一まともな楽譜を書けます。市川氏：ドラム兼（気が向いた時に）コーラス。かつてのような安定した『高速ダブルキック』ができる

かどうか不安。

さて、4人とも準備完了。ほぼ10年ぶりに楽器を構えて、少々老けたお互いを見合わせると何故か顔がニヤついてしまう4人。「みなさん、ちゃんと復習やってきましたか？」とヒデキちゃんが予備校講師らしい事を言って3人を見る。それに対抗して「先週のテスト返しまーす。」と浦辺氏が学校の先生の口調で『METAL SMILE時代のオリジナル曲の歌詞にコード記号が書かれた紙』を名前を呼びながら配布する。

「市川。仙道。えー、それから横山。」「うわー、最悪。」などと高校生口調で受け取る市川氏。

ともあれ練習開始。そして休憩。初めに休憩を申請したのは市川氏。やはり長い間ジャズばかりだったせいか、ひさびさの『高速ダブルキック』で足がつった。ハンガーにかけておいたジャケットのポケットからタバコとライターを取り出して外の喫煙コーナーへ。マサノンは廊下の飲料水の自販機へ。再び練習開始。それぞれがだいぶかつての感覚を取り戻して来たので、浦辺氏とヒデキちゃんの持って来た『新曲』を検討。大人になった(?)浦辺氏の『爽やかなバラード調のモノ』を一曲、そしてヒデキちゃんの歌無しのいわゆる『インスト』の曲が選ばれた。お互いに細かい約束事を確認しながら練習。ヒデキちゃんは今まめに楽譜の作成。なんとか二曲とも4人の頭にインストール完了。「本っ当に悔しいが、ウラベとヒデキは良い曲書くな。『素人』にしては。」とはマサノンの弁。「まったくだ。この暇人が。」と市川氏。

また休憩。マサノンが「実は俺も一時期タバコを吸っていた。」と喫煙休憩に行く市川氏を見て暴露する。「てめー、それでもヴォーカルか？歌手か？」と『嫌煙家』浦辺氏にからかわれると、「二回目の結婚を機に禁煙したから。」と言ってなんとか避難をかわした。また思い出話をして休憩終了。残り時間約30分。マサノンがマイクスタンドの前に来て「じゃ、最後に日頃のストレス解消しますか。」と言って『HR/HMの名曲大会』の開始。それぞれが覚えている範囲で。演奏中に誰かが『名曲』のリフやコード進行を間違おうものなら「なさけねー！」とか「信じられねー！」とか暖かい罵声が飛ぶのであった。

いくら防音がしっかりしていても外に少々音と振動が漏れるもので、廊下を通る人が「一体何事か？」と一瞬立ち止まってドアのガラス部分から中を覗き込んだ。受付ではさっきの『首からID』君が彼等の演奏に合わせて足でリズムをとりながらファッション雑誌を読んでいた。誰のなんという曲か知らなかったけれども。

4人汗だくで練習終了。受付でマサノンがまた何かの用紙にサインを記入する。外に出ると完全に陽は沈んでいた。「さて、これからそうするよ？ウチ（めたる屋）に来るか？」と浦辺氏が3人に尋ねる。「とりあえず、そうしますか。」とヒデキちゃんが言う。ところがマサノンは「奥さんと約束が、、、」と言う。市川氏も「これから『奥さんの実家』に挨拶に行く。」と緩めていたネクタイを締め直しながら言う。ああ、それでスーツ来て来たわけね。「あそこの家な、何かやたら緊張するんだよ。やたら古風だし。（市川）」それを聞いてマサノンが「ああ、それ何となく分かるよ。俺の奥さんのお父さんも警察官だからか、家の雰囲気なんかもう固い、固い。」と言う。それを聞いて浦辺氏が「でも気に入られてんだろ？」と言うと「まーね。えへへへ〜。」とマサノンがわざとらしく後頭部を掻く。一同ちょっとむかついた。

次回の合同練習日を確認して、『新宿駅で奥さんと待ち合わせ』の市川氏はマサノンが車で送って行くというので地下の駐車場へ。浦辺氏とヒデキちゃんは『めたる屋』の方向が逆なのでギターケースを持ったままで最寄りの地下鉄の駅へ。「歳をとったせいかギターが重いなあ。」とか言いながら。

「じゃあな。」

別れ際、4人の頭にはかつてのバンドにすべてを注ぎ込んでいた日々の記憶がフラッシュバックしていた。少々状況は変わったが再び4人そろって『ロックができる』喜びを感じていた。4人の心には大きな爽快感と小さな懐古が混在していた。

二人が『めたる屋』に到着すると店内は年末にしては忙しそうだった。カウンターには『これから帰省』のイラストレーター鈴木氏がいた。その鈴木氏、ヒデキちゃんの姿を見るなりたいそう驚いた様でコーヒーを吹いた。「おおおお、仙道君ひさしぶり。覚えてる？」「あ、、、どうも。」とヒデキちゃん。たぶん、あまり覚えていない。「おかえりー。どうだった？練習。」と大男ハンセンさんがキッチンから出て来た。流しではえらいスピードで巨人平川くんが食器を洗っている。店内の様子を見て店長浦辺氏「やっば。キツかったか。二人じゃ。」と言って急いで二階へ。荷物を置いてエプロンを装着。ヒデキちゃんはカウンター席についてアイ스티ーとカツサンドを注文する。浦辺氏が念入りに手を洗って出て来て「さ、働くぞ。」と気合い入れた途端に客足は止んで、店内のお客も少しずつ帰り始めた。ま、こういうこともありますね。

浦辺氏は自分で『オリジナル野菜ジュース』をグラスに注ぐとエプロンをつけたままカウンター席に回る。鈴木氏が浦辺氏に「香ちゃんもレーコちゃんもいないと店内が寂しいなあ。」と言う。それに対し「とっとと長野に実家に帰りなさい。」と浦辺氏が冷たくあしらう。すると鈴木氏は「みんなは年末年始どうするの？」と体の向きを変えて尋ねる。浦辺氏、ハンセンさん、ヒデキちゃんは一日が二日に実家に『ちょっと挨拶』程度に帰ると言い、平川くんは静岡の実家に明日帰るといふ。ちなみに浅草生まれの山田マキさんはすでに大阪の旦那さんに実家へ。

流しの食器かたづけを終えた平川くんが「今日、昼過ぎに赤戸選手が来たんですけどね。」と言って、客のいなくなったテーブル席へ食器を片付けに行く。それを聞いて浦辺氏「何？あの野郎、自慢しに来たのか？」と言って野菜ジュースを一気に飲み干す。「何の事？」と鈴木氏が尋ねる。「鈴木さん、スポーツあまり興味ないでしょ？あそこにずっとヤツのサインが飾ってあるんだけど。赤戸ってのは俺の高校の同級生でサッカー選手で、そいつの所属チームが元旦の天皇杯決勝に進出したんですよ。」と浦辺氏が適当に説明すると、平川くんが混ざって来て「そう、そしてその相手は我が『清水エスプリ』なんですよ。」とニコニコしながら言う。赤戸選手のファンだけどちゃんと地元静岡県のチームを応援するわけね。カウンターの一方では手の空いたハンセンさんとヒデキちゃんが来年の映画のアカデミー賞の予想で盛り上がっている。

常連客や平川くんが浦辺氏やハンセンさんに「良いお年を。」と言いながら店を出て行く。

20時30分頃閉店。夜空には少しの雲も無く明日の朝は冷え込みそうだ。『めたる屋』の前には白い息を吐く独身男が3人。浦辺氏「ハンセン、営業はしないけど明日大掃除だから。」とハンセンさんに念を押す様に言う。「休むなよ。」「え〜。」とハンセンさん。あからさまにイヤそうな顔をする。ヒデキちゃんは『巻き込まれる』と勘違いしたのか「また来年！」と言って逃げる様に去って行った。

2006年、一月一日。浦辺氏は昼過ぎに埼玉県某市の実家へ。ひさびさに家族が集まっているその居間のTVにはサッカー天皇杯、決勝のピッチに立つ赤戸選手が映っていた。リーグ優勝を惜しくも逃した『フレイムス』の新システム。赤戸選手を守備的ミッドフィルダーとしてスタメン起用。ストライカーへのこだわりを綺麗さっぱり払拭した彼は献身的な守備への参加、これまでの経験による相手パスコースの推測、前線への的確なパスで明らかに『中盤の支配者』になっていた。相手のスキを見てはディフェンダーの『裏を取る』飛び出しも見せた。『限界説』を唱えていた一部の関係者をあざ笑うかのように不得意としていた左足での鮮やかなコーナーキックも見せた。（後に本人曰く「俺が一番驚いた。」）やがて主審の笛が鳴り響き、試合は2-1、『フレイムス』の勝利。チーム初の天皇杯制覇となった。表彰式後の国立競技場には『さいたまサポーター』の数ある応援歌の一つ『バーニングキャノン赤戸』の大合唱がこだましていた。彼の年齢を感じさせない『スタメン、フル出場』を讃えるかのように。

「、、、ヤロー。優勝しやがった。」と、餅を食べながら浦辺氏はボソッと呟いた。画面にアップになった赤戸選手の口が「見たか、ウラベー。」と言う様に動いた気がした。

その後浦辺氏は親戚への挨拶回りも適当に済ませて陽が沈む頃には都内のアパートへ帰宅。『めたる屋』の様子を見に行く。この店長、強面のわりにはけっこう心配性。入り口の鍵を開けようとする店の裏手の方から何やら人の気配が。いったん鍵を開けるのを止めて、『何かの映画で凶悪犯を追跡する敏腕刑事』を頭に浮かべながら『恐る恐る』お隣サンとの間の暗い細い道を進んで行くと、、、出た。怪しい、え？女？その女性も浦辺氏に気付いて驚いたようである。誰かと思ってよく見たら、なんと香ちゃん。香ちゃんこの福田家は両親とも3代続く東京の人。都内に住んでいる親戚宅への新年の挨拶回りも済んで、TVの正月番組もいまいちで、ちょっと暇になったので猫のカステラ（別名：タマ）のためにネコ缶を持って来たのだという。誰に見せるわけでもなく奇抜な髪型の結い方をして。足下ではそのカステラが『ネコ缶CMのごとく』食事中。

「今月の半ばだって？どこの大学が正式に決まるの？」と浦辺氏が店を開けながら香チャンを振り返る。「はい。たぶんワシントンDCの『なんとか』っていう大学だと思いますけど。彼等（留学を世話してくれる会社の人達）の話だと。」と香チャン。って『なんとか』じゃ分らないだろうに。

浦辺氏がいろいろ点検を終えてキッチンから出て来るとカウンター席に座っている香チャンが「カズさん、初詣行きました？」と尋ねる。「いんや、まだ。香チャンは？」と浦辺氏が聞き返す。「家族で浅草寺まで行ったんですけでね、一つ祈願する事忘れちゃって。どこか、この辺の神社まで一緒に行きませんか？初詣。」君は『二回目』の初詣？困った時ぐらいしか神仏の類いをあてにしない浦辺氏、正直面倒くさかったので迷ったが「ま、いいか。」と誘いに乗った。戸締まりを二回確認して出発。

最近は元旦から営業する飲食店もデパートも珍しくなくなってきたので、けっこう夜の街には人がいる。そして香チャンはアルバイト従業員とはいえ高校生なのである。どう見ても兄と妹、父と娘には見えない二人。「援助交際か何かと勘違いされるんでは？」と周りを気にしながら浦辺氏は歩く。この店長、強面（悪人面？）のわりにはけっこう心配性。で、到着。初詣の人が3、4人境内にいる。「こんな小規模な神社じゃ御利益薄そうだけど、ここでいいの？」と浦辺氏。「大きさは関係ないじゃないですか。あははは。」と笑いながら香チャン。

賽銭箱の前で二人が小銭を投げ入れてパンパンてを叩いてそれぞれ祈願。

お願いごと終了。浦辺氏ちょっと気になって尋ねてみる。「忘れてたお願いごとって何か聞いてもいい？留学のこと？」香チャン「世界平和。」と即答。普通なら冗談かと思ってつつ込むところなのだが、このお嬢さんの場合真剣。手を合わせたままで香チャンが浦辺氏を見て曰く「小学生の頃から毎年欠かさないんですよ。」浦辺氏ちょっと言葉を失ったが「君は『脱力系』の『癒し系』だよ。」と言う。「何ですかソレ？」と言って香チャンが笑った。そして「カズさんは何を祈願したんですか？」と聞き返す。「ん？俺は、、、商売繁盛、家内安全、五穀豊穣と、、、それから今度のライブの成功。」「いい年にしたいですね。」「お互いにね。」と言って二人は何気なく空を見上げた。この神社の周りは派手なネオンもコンビニにも無いので星がケッコウ見える。二人はしばらく無言で見上げた。白い息を吐きながら小声で「綺麗ですね。」と言う香チャンがなぜか『大人っぽく』見えて浦辺氏、一瞬『ドキッ』としたが「いかん、いかん。高校生、高校生。」と首を横に振りながら自分に言い聞かせた。

「あ！人工衛星！誰を監視しているのかな？（福田香）」「、、、、、、、、（店長浦辺）」

で、そう遠くないとはいえ、夜なので浦辺氏は香嬢を彼女の家の前までエスコート。この店長、強面のわりにはけっこう心配性。浦辺氏「じゃ、お父さんによろしく。」と小さく手を振る。「はい。いい年にしましょうね。」と言って香嬢は家の中へ。

独りでの帰宅道。浦辺氏「いい年ねえ、、、いきなり赤戸に『優勝』なんていう『めでたいうえにカッコイイ』モンを見せつけられたしな。俺はどうすっかな？」と考えてふと空を見上

げる。赤戸選手が大勢のサポーターの大合唱に応える様に両腕を突き上げて『勝利の雄叫び』をあげた姿は彼にステージ上で会場に集まったファンの声援に応えた『かつての自分』を思い出させた。「あの頃、一番『自分の理想』に近かったんだろうか？」あの頃は遠くに在るのか近くに在るのかも解らない目標に近づく為にステージに立った。喫茶店店長にも生き甲斐を感じている今日この頃、今回は何の為にステージに？考えても無駄なことに気付き『フッ』と笑った。なんとなく夜空に向かって右手をのばして拳を固める。『ハッ』と我にかえり、恥ずかしくなって辺りを見回す。幸い誰もいない。また空を見上げる。一筋の光。

流れ星。「さて、あれは願いをかなえるモノか、それとも不吉の前兆か。」再び下を見て歩き出す。「そーいや、あの時も4人であの神社行って流れ星見たっけな。何にせよ、またステージに立ちたいって言うこの衝動は本物だ。やるだけのか。よし。」

再結成ライブを二日後に控えた『METAL SMILE』は再び都内某所にある某レコーディングスタジオにあるリハーサルルームに集合。前回同様、『首からID君』が受付にいたのだが今回はマサノン以外の3人も無視される事無く「ライブやるんですってね。がんばってください。」と声をかけてくれた。マサノン曰く「俺達の演奏を大分気に入ってくれたらしい。」

ライブ当日の演奏曲の最終選考。そして演奏順を決定。練習。休憩。練習。

で、再び汗だくになって終了。「いやー、いい汗かいたあ。」と今日はラフな服装の市川氏、持参したスポーツタオルで汗を拭きながら。「がんばってんなー。俺達。」とドラムセットの前でしゃがみ込んでいるマサノン。「『誰か何かくれー』って感じだよな。ははは。」とギターをかたづけている浦辺氏。その隣でベースギターをかたづけているヒデキちゃんが「『何かくれ』っていうか、、、実際、俺達世間から、『誰かから褒められたい』のかもね。今も昔も。」と言う。特に深い意味は無かったのだが、それを聞いて他の3人は黙ってそれぞれ考え込んでしまった。突然、市川氏が「俺達はロッカーだ。ファンの声援があればそれで充分じゃないか。」とふざけた口調（おそらく誰かのモノマネ）で言う。

リハーサルルームを出て廊下を歩きながら先頭のマサノンが「そーいえば、みんなチケットどうした？」と振り返る。もう最後だから特にチケットのノルマは無いというもの『JACK'S』の岡野さんに悪いので従来のアマチュアバンドに課されるノルマの枚数を承諾していた。浦辺氏もヒデキちゃんも市川氏も適当に『無料で知人に渡した』という。ただヒデキちゃんは現在の職場（予備校）の人には内緒なのだそうで、ライブの話すらしていないという。ライブの行われる日曜日は予備校も休みだけでも。ヒデキちゃん、受験シーズンの忙しい時。実はこの後講義を2コマ行うと言う。市川氏が「みんなで見にってやろうか、ヒデキの講義。」とからかうと、「やめてくれよ。入り口で警備員につまみだされるから。」と苦笑いでヒデキちゃんが答える。おそらくバンド内での彼とはまったく別人の予備校講師ヒデキちゃんを見られたくないのだろう。浦辺氏が「でも、ウチの香ちゃんとレーコちゃんは見に来るって言うてるよ。」と言うと、「え〜。何か照れるなあ。」とヒデキちゃん。「え？あのコ達来るの？それじゃあ、張り切っちゃおうかなあ。」とマサノンが両手をグーにする。そうじゃなくても張り切ってくれ。

「しかし、俺達さ、それぞれ同じメーカーの楽器にこだわってるじゃない。学生の頃から。俺、そろそろ『ギブソン』からオリジナルモデル制作のオファーか『何

か表彰』があってもいいと思うんだけどさあ。」と浦辺カズキがのたまひ。もちろん冗談で言っている。他の3人はそれを分かっているので「ほざけ。(ユート)」「残念賞。(マサノ)」「NG大賞。(ヒデキ)」と冷たくあしらう。で、4人で笑う。

受付の『首からID』君が「じゃあ、ライブ頑張ってください。俺は仕事で見に行けませんけど。」と4人に言った。新しいファン層を早くも開拓か？

その頃、喫茶店『めたる屋』では、またしても二人で店内を切り盛りする『ハンセン&平川』組が「平カーくん。こんだけ頑張ったら、俺達そろそろウラベツちゃんから『何か表彰』されてもいいよねえ。」「そおっすね。せめて時給上げてくれないっすかね。」なんて会話をしていた。

一月某日。日曜日。午後14時頃。『METAL SMILE』リユニオンライブ当日。マサノンは二人目の奥さんの京子さん（25歳、TVアニメの声優さん）と自動車で『JACK'S』へ。市川ユート氏は奥さんのマリコさんが先にアメリカに戻ってしまったので独りで幕張のウィークリーマンションより電車を乗り継いで。スティックケースとこの日のためにワザワザ買った『マイスネア』を携えて。ヒデキちゃんはなんとタクシーで。本人曰く「明け方の夢の中に映画『タクシードライバー』の時のデ・ニーロが出て来たから。」よく分からん理由です。店の方を『本日休業』にした浦辺氏はハンセンさんと香チャン&レーコちゃんと一緒に地下鉄を乗り継いで現れた。ちなみに香チャンは無事にアメリカの進学先が決定し、レーコちゃんはボーイフレンドが『まだ受験生』なので誘うのを断念。平川くんはガールフレンドと一緒に来るかもしれないという。山田マキさんは「行けたら行く。」と言ってたらしいが浦辺氏とハンセンさん曰く「彼女の『行けたら行く』は9割『行かない』と同じ。」なんだそうで、イラストレーター鈴木しもそんな感じ。しかし彼は『香チャン&レーコちゃんも行く』と知ると少し迷っている様であった。その他常連客、永井アナ、田中アナ、室井先生やエイミー先生にもとりあえずチケットは渡しておいたという。後浦辺氏はパン屋のヤマギッさんも半分冗談で誘ったのだが、「殺す気か？」と断られた。モダンなロックコンサートに何やら悪い偏見を持っているらしい。Jリーガー、赤戸選手には「今度は俺がカッコいいところ見せてやるから来い。」と半ば脅迫めいた電話を入れていた。ついに4人の10年ぶりのライブ。何か嬉しい様な照れくさい様な複雑な笑みが30過ぎの4人のロッカーからこぼれるのであった。

『METAL SMILE&大男&お嬢さん二人&横山夫人』は閉館（そしてリフォーム）直前のライブハウス『JACK'S』へ。一階受付カウンターにはスタッフの年齢不詳のちょっと目つきの怖い『金髪ねーちゃん』がいて、なぜか『METAL SMILE』の姿を見た途端に少し慌てた様子で、ガムを噛みながらバックステージパス代わりにステッカー（衣類の上から貼付けるやつ）を用意してくれた。この人見た目よりもはるかにいい人で出演者でない4人（大男&お嬢さん二人&横山夫人）にもパスを作ってくれた。お嬢さん二人は「偉くなったみたーい。」と大喜び。暖房のせいか『金髪ねーちゃん』の顔がなんだか赤くなっていた。

「やあ、来たね。あ、美穂ちゃん、ありがとう。休憩入っていいよ。」とカウンター後方の事務所の方から岡野さんが出て来た。ヒデキちゃん以外の3人は10年ぶ

りの再会なので岡野さんが大分老けたように見えた。「おおおお。岡野さん、お久しぶりです。」と浦辺氏が力強く握手する。「お前ら、みんな老けたなあ。」と岡野さんがマサノンに目をやる。「岡野さんに言われたくないっすよ。」とマサノン、続いて市川氏が歩み寄って握手する。で、メンバー以外の4人の自己紹介を簡単に済ますと岡野さんと『METAL SMILE』は事務所の中へ。残りの4人はロビーのモダン彫刻(?)の鎮座する丸いテーブルの周りに着席してあたりをキョロキョロする。かつては『ライブの告知』だの『メンバー募集』だので埋め尽くされていた大きな掲示板には『今月のライブスケジュール』以外には何も無く何とも言えない寂しさが漂っていた。ハンセンさんをのぞく3人は初めてなので何も感じないのだけど。最盛期の様子を知る人が見れば記憶に残る会場に集まった人々のざわめきが天井に吸い込まれて行く様な感覚に襲われるだろう。

事務所内の丸いテーブルにそれぞれ着席すると、岡野さんが「あのさ、いきなりで悪いんだけど、実は今日君たちの他にもう一組うちの最後のステージに立ちたいって言うグループがいてさ、『New Joke Junkies (ニュージョークジャンキース)』って言うんだけど、半年ぐらい前から活動してて、若いコにけっこう人気のあるグループでさ、君たちとはかなりジャンルが違うんだけど、『集客力』があるからさ、、OK?」と、『すまん』といった表情で『聞いてないよ顔』の『METAL SMILE』を見る。ヒデキちゃんが初めに口を開く。「俺達は別にかまいませんけど、、、ねえ?」残りの3人もうなずいている。そりゃあ誰だって稼げる時に稼ぎたいわな。特に何か新しい事をやろうとする前は。

「で、実は、、、」と岡野さんが真剣な表情で何かを言おうとすると事務所のドアが開いて「こんちゃーす。」と20代前半ぐらいの5人組が入って来た。どうやら彼等が岡野さんの言う『集客力がある』グループらしい。浦辺氏は先頭のニットキャップをかぶった『つまようじみみたいな眉毛』の若者になんとか見覚えがあったのだがよく思い出せない。実は『めたる屋』にて浦辺氏とハンセンさんに「「出て行けえっ!!!」」と一喝された『寝癖頭』君である。その後ろには『黄土色頭』君もいる。彼等もまた浦辺氏を見て『どこかで見た様な、、、』という顔をしているが思い出せない様であった。時々世界はより狭い。

とりあえず『METAL SMILE』は用事が済んだので『寝癖頭』君たちと入れ代わる様に事務所を出た。浦辺氏が事務所の戸を締めると中から「何だよー。俺達がメインじゃないのかよー。」と憤慨した様子の『寝癖頭』君の声が聞こえてきた。続いて「それは始めから言っているだろう。」と、いらついた感じの岡野さんの声がした。「悪いな、若者と書いてバカモノよ。」と思って浦辺氏は戸を閉めた。

楽屋で『METAL SMILE&大男&お嬢さん二人&横山夫人』が談笑したり楽器の手入れをしたりしていると『New York Junkies』が入って来て楽屋の反対側に荷物を置いて着席した。着席するなり、あからさまに浦辺氏の方を見ながら『寝癖頭』君たちが「ざっけんなよー。何で俺達がメインじゃないんだよー。」「昔どんだけ人気があったか知らねーけど、メタルだって。」「『まだやってたの?』って感じい？」などと明らかに聞こえる様に無礼極まりない事を言っている。レーコちゃんが小声で「あの人達感じ悪う。」と言う。マサノンとヒデキちゃんの脳裏に過去の記憶が『デジャヴュの様』に蘇りハツとして浦辺、市川両氏を見るが二人とも落ち着いていた。

「ン?どうしたヒデキ?」と市川氏。続いて浦辺氏が「安心しろ。過去10年間、俺達はいろんな所でいろんな悔しい思いを克服して来たんだ。それに、あの時ほど『切羽詰まった』生活じゃないしな。ははは。」と朗らかに言う。

突然楽屋の入り口が開いて「おーす。」と『タランチュラの足の様な睫毛』の女の子が二人入って来た。どうやら『寝癖頭』君の関係者らしい。「いつもの連中にはだいたい声かけといたから、そこそこ売れると思うよ。」などという会話が聞こえて来た。この会話の意味するモノが数時間後に明らかになるのだが、この時点ではたんにチケットの売り上げの話だと思われた。

で、やっぱり「え〜。あんなのがメインなの?」などと『METAL SMILE』をあからさまに見て言っている。しかし、まだまだ大人は余裕。「ま、若者の言う事だから。」と市川氏。「そう。言いたいだけ言わせておきましょう。」とヒデキちゃん。「さすが大人。」と香ちゃん。

再び『ガチャリ』と入り口が開いて今度はさっき岡野さんに『美穂ちゃん』と呼ばれた『金髪ねーちゃん』が顔を出した。「じゃ、『METAL SMILE』さんから準備ができ次第お願いしまーす。」リハーサルの開始。それぞれ楽器を携えて楽屋の奥にある出演者用の階段から地下のライブホールのステージ裏へ。大男とお嬢さん二人と横山夫人は『本番を楽しみに』ということで近所を散歩。

リハーサルといっても全曲フルコーラス演奏する立派なのではなくて、PA、照明スタッフに希望する『効果』を伝えたり、ステージ上の機材の音合わせが目的。演奏するのは『サビの部分だけ』とか『間奏だけ』とかという感じ、、、のはずだった。ところが彼等のリハーサルの様子を会場後方のドリンクサービスカウンターのあたりで床に座り込んで見ている『N.J.Junkies』の連中が『ブーイングしたり中指立てたり』するもんだから（スタッフに注意されても聞きやしない。）「あのコ達まだ不満みただね（仙道ヒデキ）。」「ちょっとお灸をすえるか。（浦辺カズキ）」ということになった。

で、マサノンがマイクに向かって「ちょっと準備運動していいですか？」とスタッフに言って彼等は『MEGADETHのHoly Wars...The Punishment Due』を歌無しで演奏。この緩急の起伏に富むうえに正確でエッジの効いた演奏を必要とする曲を4人は通常よりも遥かに速いスピードで完璧にやってみせた。息もぴったり。例の『金髪ねーちゃん』も含めスタッフからは大きな拍手が送られた。で『N.J.Junkies』はというと、ジャンルは違うとはいえ、それなりに楽器の心得があるだけに格の違いを感じたか。無言でそそくさとホールから出て行った。継続は力なり。

『METAL SMILE』の4人は何も言わなかったが、心の中では『勝った』と小さくガッツポーズをしていた。彼等は『N.J.Junkies』のリハーサルには興味無かったので散歩中のハンセンさん達に合流して軽い食事を取った。

午後17時30分。『METAL SMILEと仲間達』が『JACK'S』に戻って来ると『N.J.Junkies』目当てと思われる若いお客がロビーに集結していた。その中に混じってマサノンの仕事関係者（スタジオミュージシャンやレコード関係者やフットサル仲間）が数人すでに来ていて彼に挨拶をした。楽屋に入ると『とっくにステージに上がっているはずのN.J.Junkiesがまだ外出から戻って来ない事をスタッフから知らされる。「しょうがねえ連中だ。」と、時間に厳しい浦辺氏、これにはケッコウご立腹。

しばらくして岡野さんに注意されながら『N.J.Junkies』が楽屋に姿を現したが、まったくもって注意を聞いていない様子。なにやら楽しそうにニヤニヤしていた。『METAL SMILE』への挑発的な発言はもう無かった。で、結局予定よりも30分遅れの18時開演。

『N.J.Junkies』の構成はリードヴォーカル（寝癖頭君）、ギター、ベース、ドラム（黄土色頭君）、レコードをキュキュキュとやる人の5人。ジャンルは音の軽いパンクとラップの融合みたいな音楽。従来の『HR/HM』とは明らかに違う種類のやかましい音楽。一応オリジナル曲もあるらしい。パフォーマンスは『まあまあ』といった感じだったが『エルヴィス・コストロのPump It Up』のヒップホップ調アレンジはケッコウはまっていて浦辺氏を感心させた。しかし『METAL SMILE』にはハッキリ言って『善し悪しの解らないジャンル』だったので、別に恨みは無いのだが、彼等は冷静に辛口コメントをしていた。会場後方の壁に並んで寄りかかって。「バスドラ二つもいらねえよなあ。（市川）」「あのベース、5弦使いきれてないよね。（仙道）」「たぶんギター、チューニング合ってるねえ。（浦辺）」「あのヴォーカル、上半身脱がない方がいいよな。（横山）」確かに視覚的にカッコイイ体系ではない。さらにその『寝癖頭』君はアドリブも肩のイレズミも『FUCK』なので「あれじゃあ、アメリカのTVじゃ放送できんな。」と市川氏。そう、その単語は一般放送じゃ発声する事も視覚的に映す事も規制されているのだ。日本人にはあまり知られていないけども。

それでも会場はほぼ満員であった。若者との感覚のズレ。「こうやって歳をとっていくんだなあ。」と普段若者を相手にしている予備校講師のヒデキちゃんが『ボソッ』と言った。「まったくだ。」と会場の真ん中辺りでピョコピョコ飛び跳ねてけっこう楽しんでいる様子の方とレーコちゃんを見ながら浦辺氏。「ぜったいあのギター、チューニングずれてるぞ。」「このバンドのファンの8割ぐらいの男の子、女の子が同じ顔に見えるのは俺だけですかねえ。浦辺さん？」

しかし、ナンボナンボでも一部の若者のノリの良さは尋常じゃなかった。ちょっと思い当たる事があり市川氏は会場を出て階段を駆け上り、若者がうろうろしているロビーを通過してトイレへ。『イヤな予感』は的中。トイレのゴミ箱の中には四角い小さなビニール袋が十数枚捨てられていた。そして鏡に映る自分を凝視して固まっている若者、黙々と手を必要以上に洗っている若者、個室の中で大声で歌を歌っている若者。市川氏が振り返ると、見ようによってはまだ高校生にも見える若者が手に何かを握りしめて入って来て、市川氏の視線を気にしながら『サッ』と個室に入って鍵をかけた。どこかで『ヤバいくスリ』がさばかれている。それも幻覚症状を引き起こす強力なヤツが。

「どうしたユート？ 歳にとってトイレが近くなったか、って、うお！ なんだこいつら？」と浦辺氏が入って来て驚いた顔で市川氏を見る。市川氏は真剣な顔つきで「ストーン、、、こいつらクスリをやってる。アメリカのダンスクラブとかで似た様な連中を見た事がある。」と小声で言う。「じゃあ、まさかとは思ったけど、さっきのちょっと独特な臭いだった煙はタバコじゃなくてマリファナか？」と浦辺氏も真剣な大人の顔つきになる。「あの状況でよく気付いたな。さすが嫌煙家。」

二人はトイレから出て辺りを見回す。いつの間にか芽生えていた大人としての責任感か。二人には明らかな怒りがこみ上げていた。『人をボロボロにするような金儲けえをするヤツは許さん。』特に彼等は今も昔も『楽しくて、激しくて、人を良くするロック』が信条。いい大人のすることじゃないが、国家権力に逆らう様なところが多少あっても聞く人、特に若者の将来を潰すようなことは絶対にあってはならない。

ロビーの若者をさり気なく観察する。あの『タランチュラ睫毛一号』が丸いテーブルに黒い革のバッグ置いてテーブル中央の『モダンアート』に隠れる様に座っていて、携帯電話を操作している。市川氏は彼女の監視を続けることにして浦辺氏はもう一人を探す。すべてアイコンタクト。さすが付き合いが長い。

『いつもの連中にはだいたい声かけといたから、そこそこ売れると思うよ。』チケットの話ではなかったのだ。女子トイレが怪しかったのだが、香ちゃんなど巻き込むわけにはいかず、とりあえず外へ。向かいの建物の脇、駐車場の街頭に照らされていないところに若者が4人座り込んでいる。浦辺氏は静かにそばの『屋外非常階段』を上がり中二階の踊り場から座り込んでいる若者を観察。『タランチュラ睫毛二号』が（といっても会場のほとんどの女の子が『タランチュラの足の様な睫毛』をして

いたが) 淡く光る携帯電話の画面を見つめている。すると『JACK'S』の出口からマサノンと奥さんの京子さんが出て来て仲良さそうにどこかへ行った。その後から一人の『白いフード付きのスウェット』を来た若い男が出て来て駐車場に向かい『タランチュラ睫毛二号』の隣にしゃがみ込んだ。次の瞬間、浦辺氏ははっきりとその男が財布をポケットから取り出し、紙幣を彼女に渡すのを見た、そして『タランチュラ睫毛二号』は携帯電話の操作を始めた。おそらくメールの送信か。

浦辺氏、「そうか。いちいち手の込んだ事を。」と静かに急ぎ足でロビーの市川氏のところへ。二人で他のライヴハウスのスケジュール表を見るフリをしてテーブルのところの『タランチュラ睫毛一号』を監視。さっきのとは違う携帯電話の画面を見ている。『タランチュラ睫毛一号』は二つの携帯電話をジャケットのポケットにしまうと辺りを軽く見回してからバッグを持って地下ホールへの階段とは反対方向の廊下の奥の飲料水の自販機へ急ぎ足で向かった。さっきの『白フード』が外から戻って来た。『タランチュラ一号』はバッグに素早く右手を突っ込んで、次にその右手を自販機の取り出し口の左隅に入れ、その右手を抜き、廊下を折り返して来た。『白フード』とは目も合わせない。男はまっすぐ廊下の奥へ進み、ちょっと自販機の前で商品サンプルを眺め、コインを入れるフリをして、さらにボタンを押した。そして取り出し口に手を入れた。その手を左隅に移動させて、明らかに何かを握りしめた手を引っ込めてトイレへ入って行った。

集金係の居場所を知られていても商品の出所は不明ということ。集金係は肝心の商品を持っていないので集金現場を押さえられてもナンボでも言い逃れができるし、よほどの中心人物でない限り誰がその『商品』を持ち歩いているのか知らないのだ。

浦辺氏、市川氏、お互いの顔を見た。「現行犯逮捕だな。」

タイミング良く近所のコンビニで『おでん』を食べていたというハンセンさんが来たので協力を要請。なかなか会場に戻って来ない浦辺、市川両氏を不思議に思いヒデキちゃんもロビーに上がって来た。彼等は簡単に状況を説明し『タランチュラ一号、二号』と『所持か使用の現行犯、白フード』の身柄を確保することに。

浦辺氏が『まだ販売目的のクスリ』をバッグに所持しているであろう『タランチュラ一号』の方へ、ヒデキちゃんがトイレへ、そして市川氏とハンセンさんが外の駐車場へそれぞれ向かおうとすると『金髪ねーちゃん』が4人を止めた。「大丈夫です。うちも知ってました。もうすぐ警察の人が来ます。」

へ????

```
@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }
```

「実は岡野さん、ずうっと迷ってたんですよ。」と『金髪ねーちゃん』は若者がうろうろしてる中をすり抜けて事務所へ向かう。4人がその後続く。全員着席して彼女の話聞く事に。彼女の話によると半年ぐらい前から『Junkies』のライブの『悪い噂』が同業者から流れて来たらしい。始めは岡野さんは『少々古いタイプのロックンローラー』だったので、「ロックとドラッグの組み合わせはしょうがないじゃないの？」などと言っていたという。ところが恐ろしい速さで彼等のネットワークは拡大。ライブの集客力も拡大。一体どこから彼等が『あれ』を仕入れているのかも全く解らない。『60年代、70年代の愛と平和とロックロール』の時代を『古き良き時代』とする岡野さんはロックの歴史を深く考えるあまり『ドラッグカルチャーとロックの関係において何が正しいことなのか』という葛藤に悩まされて、結局『見て見ぬフリ』をしていたという。そこへ『経営難』という衝撃的事実。そして気付く『今日の若者は愛も平和もロックも必要としておらず、ただ快樂と逃避とドラッグ』という事実。常に綺麗で有名な『JACK'S』のトイレだが個室の戸を『ハイになった』若者に二回程破壊されている。自分の心身だけでなく他人の家（ひとんち）まで破壊する愚かで哀れな者達。おまけにますます『悪化する日本の治安』。『劣化する法律』。少年犯罪に外国人窃盗団に少子高齢化社会（最後のはちょっと違うか）。『戦争』を放棄したものの全然『愛も平和も』無い国。で、『JACK'S最後の日』にライブそのものの邪魔はしないという条件で警察捜査に協力を決定。『愛と平和』を最優先したわけだ。『JACK'S』をなくしても悪いやつらの活動は止まらない。きっとどこかに皺寄せが行く。元を絶たねばならない。

『ガチャリ』と事務所のドアが開いて、ダウンジャケットを来た岡野さんが手袋をはずしながら入って来た。「ああ、美穂ちゃん。留守番ありがとう。『そろそろ演奏が終わる』って伝えたら、あと5分ぐらいで『突入』してくるって。浦辺君達に話してくれた？ リハの前に話すつもりだったんだけど、彼等が来ちゃったから。ったく、どこから仕入れてんだか。警察も前から目をつけてたらしいよ。かなり大掛かりな組織の可能性もあるってさ。、、、彼等のお客さん、ちゃんとチケットも定価で買ってたし、ビールなんかかなり飲んでくれて、ウチの売り上げには助かってたんだけどなあ。残念だなあ。」などと遠くを見つめて冗談とも本気ともつかぬ事を言う。

「しかし、」と岡野さん、ジャケットをハンガーに掛けながら振り返る。「やっば、『俺の城』の中で勝手に悪い商売するヤツは叩きのめさねえとな。」とニヤリと悪代官の様に笑みを浮かべる。『なんなんだ、この人』といった感じで浦辺氏一同は『ぽかん』とする。彼のTシャツ

には大きく『いつも心にジミヘンを』と筆の殴り書きの様な字体でプリントされている。どこで売っているんだ？ ついでにいうと、『JACK'S (ジャックス)』という名は『ジャニス (ジョプリン)』と『(ジミ) ヘンドリックス』をくっ付けただけです。この人もたいそうなロック好き。「それにかっこいいアーティストの定義が変わっても、ギャングの収入源だけが変わらずにアーティストとそのファンにまわりついて儲け続けてるっていうのも不公平だしな。」

```
@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }
```

演奏を終えて『New Joke Jankies』の面々が出演者用の階段を昇り楽屋に戻って来るとビックリ。警察官が5人いる。ふて腐れた顔の『タランチュラー号、二号』が手錠を掛けられて立っている。『寝癖頭』君は状況を理解して脱兎のごとく楽屋を上半身裸で飛び出したが、ロビーで若者の麻薬所持の有無を確認していた別の警察官（ラグビー経験者）に『見事なタックル』をされて御用。渋々楽屋へ荷物をまとめる為に連行される。彼の目に『二人の30代』が目に入った。浦辺氏とハンセンさん。そしてようやく彼はどこかの喫茶店を思い出した。その『強面と大男』が彼を哀れむ様な目を見てこういった。「出て行け。。」そして「、、、でも音楽は止めるなよ。」と『強面の方』が付け加えた。

ちなみに浦辺氏とハンセンさんの方は『寝癖頭』君のことはまったく思い出せていなかった。歳のせいかな？ その隣で市川氏が「あのドラマー。後で『ツーバス』のこつを伝授してやろうと思ってたのに残念だ。」と言った。「ロックとドラッグは一心同体みたいな時代はもう終わったんだよ。」と岡野さんがロビーを見回して寂しそうに言う。数人の若者が連行されて行く。

香チャンとレーコちゃんが『タタッ』と浦辺氏のところに駆け寄って来た。「ビックリしたー。いきなり警察の人が来るんだもん。どこかの警察マニアかと思った。（んなアホな。）カズさんとかいつの間にかいなくなるし。」と香チャンが後ろの人ばかりを振り返りながら言う。浦辺氏「ゴメンな。なんかエライ事に巻き込んだみたいで。お父さんに怒られちゃうかな？ 俺達。ははは。」と頭を掻きながら言う。レーコちゃんはハンセンさんに「ねえねえ、聞いて、聞いて。私たち5人ぐらいの人にナンパされちゃったあ。」と嬉しそうに言う。たぶん事の重大さが解っていない。「ナンパされても、ああいう『おっかない』人達にホイホイついて行っちゃだめだよ。」とハンセンさんが注意する。そるとレーコちゃんは「でも、『おっかない顔』の人ならカズさん見て慣れてるから全然警戒しないかも。ね、香。」などと事の重大さなど『おかまいなし』での発言をする。ヒデキちゃん、市川氏、大笑い。浦辺氏が非常に苦い顔で彼女を睨みつけた。

一台のパトカーを残して、もう一台のパトカーと側面に『移動交番』などと書かれた警察車両が走り去った。『JACK'S』ロビーでは一人の中年警察官が岡野さんと浦辺氏になにやらしつこく質問している。岡野さんは後日、現場の責任者なので警察に出頭することになっていたのだが、未成年にビールを販売したとかなんとかで『ドリンクサービスカウンター係』と共にいろいろ責任を問われるそうだ。一方、浦辺氏は『いい歳してロックバンドやってる』上に『顔が怪しい』ので『New Joke Junkies』との関係だとかドラッグの流通に関わってないかとか「きみらも所持してるんじゃないの?」とか、しつこく聞かれている。クスリの方はともかくマリファナの出所は別にあるらしい。いくら否定しても信用してもらえない浦辺氏。

「このままだとライブ中止かも、、、頼むぜ岡野さん、、、って、マサノンはどこ行ってんだ?」などと浦辺氏が心配していると「あ、酒井さーん。ご無沙汰してます。何があったんですか?」と『横山夫人』こと京子さんが横山マサノンと仲良く手をつないで現れた。そういえば京子さんのお父様は警察官だと言っていたっけ。「あ、小野さんのお嬢さん。何をしてるんですか?こんなところで。」と中年警察官は言って彼女に状況を説明する。マサノンも側にいるヒデキちゃんに状況を説明してもらっている。

そして京子さんが「大丈夫です。この人達は真面目な人達だし、彼等とは無関係です。主人の友人で私もよく知っていますから。」と、数時間前に出会ったばかりなのに『いいこと』を言ってくれた。すると「じゃあ、安心ですね。分かりました。お父さんによろしく。」と言って二人の若い警察官と共にあっさり撤収。浦辺氏は「俺って、顔でかなり損してるよな。」と思ったという。すでに会場に来ていた『METAL SMILE』目当ての人々は予期せぬ警察の持ち物チェックを受けて「いつからこんな『大物待遇』に?」と少々驚いていた。機嫌を損ねた人々には浦辺氏が仕方なく『めたる屋サービス券』（普段から持ち歩いているらしい）を配っていた。その中には室井先生はエイミー先生もいた。活動休止前からのファンは『METAL SMILE』の浦辺カズキが喫茶店をやっていることを初めて知った。奥さんと一緒に赤戸選手（子供はお隣で預かってもらってるような）もいて「抜き打ちのドーピング検査」かと思った。などと冗談を言った。

何はともあれ再結成ライブはできそうだ。

『Junkies』の遅刻と『一連の騒動』で開始が遅れたので「開演に間に合わないかも。」と言っていた『METAL SMILE』目当ての人々もなんとか開演に間に合った。その中には永井アナと田中アナもいた。二人は変装の為か、普段と違う髪型とメイク。さらに帽子に眼鏡。永井アナは『一連の騒動』のこと浦辺氏から聞かされるとすぐに携帯電話でTV局の報道班に電話をいれていた。ところで女性客が多い程『METAL SMILE』は燃えるタイプ。その辺は学生バンドと同レベル。

ハンセンさん、香ちゃん、レーコちゃん、横山夫人こと京子さんはすでに客としてホールの方へ。時間は午後20時30分ぐらい。岡野さんは「もう最後だから時間無制限で思いっきりやってくれ。」と言ってホールへ。本番直前の楽屋。30代の半ばにさしかかった『METAL SMILE』の4人はお互いに「いよいよだな。」といいながらストレッチをしたり指の関節をポキポキいわせたりしている。ステージ衣装はいたってシンプル。ジーンズに有名『HR/HM』バンドのロゴやアルバムジャケットがプリントされたTシャツ。活動休止より10年間、別々の場所でいつかは実現させたいと思っていた再結成ライブのステージが迫っている。過去のいろいろな場面が4人の脳裏に蘇る。学生時代に初めて4人で『音合わせ』をした日。マサノンの手がけた『ラヴソング』の歌詞の内容に他の3人が赤面した日。方向性を巡り『はがね屋』で口論した日。メジャーデビューのチャンスを自ら潰した『発表会』。狭いホールを埋め尽くしたファンからの大声援を受けて去った最後のステージ。この同じ楽屋から言葉少なくそれぞれの帰路についたあの夜。

楽屋の奥の出演者用の階段を『金髪ねーちゃん』が何か『シーツの様な物』を抱えて上がって来て「じゃ、お願いします。」と妙に明るい声をかけた。「「「「よっしゃあ!!!!」」」」4人がピンと背筋を伸ばす。すると『金髪ねーちゃん』がその『シーツの様な物』を拵げて「コレ覚えてますか？ よかったら使ってください。」とそれまで年齢不詳だった顔を高校生のごとく若々しい表情にして言う。4人が目をやるとそれには『METALLICAのロゴによく似たMETAL SMILEのロゴ（学生時代の浦辺、市川合作）』が描かれていて、左下には何かの日付が書かれている。最後に『JACK'S』でライブをした時にステージ上、ドラムセットの後ろに掛けていたものだ。あの時涙を流すファンの中にとりわけ『涙ボロボロ』の女性がいたので4人でその『シーツの様な物』を贈呈した事を思い出した。4人でそろって『金髪ねーちゃん』を指差して『まさか、あの時の!?!』状態。『金髪ねーちゃん』はニコニコしてうなずいた。「大ファンでした。」

ロックの神様か何かの啓示か。今こそ『その時』であるみたいだ。

メンバー一人一人が『金髪ねーちゃん』とパチン、パチンとハイファイブをきめて階段を下って行く。ヒデキちゃんが「やべえ。なんか緊張して来た。」と言えば「ベースソロでとちなよ。お前が作った曲だかな。」と市川氏が笑いながら言い、マサノンが「あ、あ、あ〜」と発声練習をすれば浦辺氏が「タバコ止めて喉が全盛期に戻ったか？」などとからかう。

薄暗いステージ上に4人の姿が見えると会場に集まった人々から歓声が沸き上がった。4人がそれぞれ楽器をチェックして、PAスタッフの指示に従い順番にサウンドチェックをする。ステージスタッフとPAスタッフがペンライトで合図を送り合って準備完了。4人の表情が引き締まる。

まだ暗いステージ上。リードヴォーカル（兼ギター）のマサノンがマイクに口を近づけて「METAL SMILE 復!活!」と叫ぶと同時にドラムの市川氏のスティックによるカウント。ヒデキちゃんと浦辺氏が同時に左手の指を低音弦の上で『ぐおーん』と滑らせる。一曲目、いわゆるジャーマンメタル調の『Time Has Come』。ゆっくりとしたイントロ、そしてマサノンが歌いだすと同時に曲調は加速する。ステージ上の照明も一気に明るくなり観客を照らす。『金髪ねーちゃん』が「楽器屋の掲示板に今日のライブの告知を張っておきました。」とは言っていたが、会場がそれほど広くないせいもあるだろうが、浦辺氏の予想に反して会場はほぼ満員だった。テーブルをすべて撤去してのオールスタンディング。最前列中央には香チャンとレーコちゃん、その隣にはデジタルカメラを片手に構えた録画係の京子さん。『大男』ハンセンさんは他の人に気を使って壁際に立っている。その隣にもう一人の『大男』平川くんが見える。おそらくその隣の女性は例のガールフレンドだろう。明らかに年上だ。他にも見覚えある顔がちらほら見える。間奏。浦辺氏のギターソロはかつてあるファンに『ディストーター』と形容された様に再び空間をねじ曲げた。ステージ中央のモニタースピーカーに片足をのせて激しく首を振りながらギターを弾くマサノン。彼に向かって『現在のバックバンド』から激しい声援が飛んだ。京さんはマサノンが『HR/HM』の演奏をするのを見るのは初めて。メンバー全員を平等に録画するつもりが旦那にばかり気を取られてしまっている。当然か。

喋り無しで二曲目『Metal Smile』に突入。この曲は始めから速い。しかし、一番の懸念であった市川氏のダブルキックは絶好調。ベースのヒデキちゃんの『鬼の十六分音符』も練習以上に安定していた。サビの部分では以前のファンがマサノンに合わせて「メタルスマイル!!」とシャウト。香チャンとレーコちゃんもその部分だけはすぐに覚えて（さすが頭いい）一緒に腕を突き上げてシャウト。

三曲目の前によくマサノンが観客に向かってあいさつ。これまでのバンドの経過を適当に話す。四曲目のミドルテンポの曲の前には『お約束』のメンバー紹介。一人一人の名前を紹介する度に歓声が沸き上がった。普段『芸名：大空マサノ』でマサノンの事を呼んでいる彼の仕事仲間は初めて彼の本名を知った。比較的『ポップでキャッチーな』旋律を持つ五曲目と六曲目が『タイトルを告げるだけの喋り無し』で続けて演奏され、そして七曲目。ヒデキちゃん作曲、歌無しインストの新曲。見せ場は16小節にわたる『METAL SMILE』初のベースソロ（初めは20小節の予定だったがメンバーの『猛』抗議により削減）。誰もが初めて見るヒデキちゃんのベースソロ、加えて10年間で演奏の幅をかなり広げた市川氏のややジャズ風味の効いた渋いドラム。そのソロが終わるとエフェクターを巧みに使い分ける二人のギターが加わり全盛期と変わらないチームワークを見せつけた。最前列の二人のお嬢さんの「「仙道先生カッコイー!!」」にちょっと照れたヒデキちゃん。ちょっと間違えたがアドリブで上手くごまかした。経験のなせる技か、その辺の対応は4人とも速い。

大歓声の中、八曲目。ギターのヴォリュームを0にしてマサノンがマイクを掴む。「次の曲

も新曲です。作詞作曲はウラベカズキ。アレンジは『METAL SMILE』タイトルは『Words Out Of Void』。バラード調のあいつの顔からは想像できないくらい良い曲です。」会場に笑いが起こった。ステージの照明が青に変わる。再び歓声がわき上がる。清涼感のある爽やかな感じのイントロが始まる。

Words come out of void, mind sways back to the moment

I felt powerless and tired, I wanted a different talent

Words come out of void, souls are waiting to be sent

I wish I could try to live till the final day

We will never share

The blue sky seems so calm

Nothing I do lasts forever

No way back there

Unless I'm ready to shed my blood

But I don't want to surrender

Deep inside, dwells in my heart

Nothing I do lasts forever

Self-denial and distrust, why am I here?

Do we deserve what we are?

Words come out of void, our latent emotion

Will never be revealed out till the final day

We will never share

The blue sky seems so calm

Nothing I do lasts forever

No way back there

Unless I'm ready to shed my blood

But I don't want to surrender

Deep inside, dwells in my heart

Nothing I do lasts forever

Self-denial and distrust, why am I here?

Do we deserve what we are?

But our will never dies!

「バンド活動を停止して、いろいろあって、心にポッカリ穴が空いている事を自覚した時に書いた。」というこの曲の最高責任者の浦辺氏はどことなく悲し気で、でも力強い叙情間溢れるギターソロでさらに聴く者を惹き付ける。そしてスロウでヘヴィなドラム&ベースが会場の一体感をさらに促進させる。ステージ上の4人の脳裏にはこれまでの、それぞれの10年間で駆け巡っ

ていた。再び歌唱力の増したマサノンの高音域が冴え渡るサビへ。「オ————— The blue sky seems so caaaaaalm」

『JACK'S』の照明設備最大の明度でステージと会場の人々の顔が照らされた。

歓声の中、マサノンが再びマイクに顔を近づけて、ついでにカメラを構える奥さんに向かってVサイン。「最後の曲です。おまちかね、、、ヘヴィアああああ ザアああああんン メタアアああああ!! (Heavier Than Metal)」市川氏のスティックカウント。当然のごとく古くからのファンが今日一番の盛り上がりを見せる。サビの部分の「Heavier than!!! (マサノン)」 「メタール!!!! (客)」という『METAL SMILE』と観客のシンプルかつ激しい掛け合いが完璧に決まった。皆が『HR/HMは最高だ!』という感情を体で表していた。

一旦、終了と見せかけて、そのサビの部分が普段よりも一回多く繰り返される。当然、意表をつかれたファンは予期せぬ『嬉しいサプライズ』に大喜びで答えた。

ものすごい歓声の中、メンバー4人がステージに整列して頭を下げた。が、しかし拍手と『アンコール』が鳴り止まず困った顔で会場後方のスタッフブースを見る。暗いブースの中で岡野さんが頭上で両手で輪を作り『OKサイン』を出しているのが見えた。

しかし、正直ここまでは予想していなかった4人。何を演奏すべきか顔を見合わせる。「やっぱ、アレか。ちゃんと覚えてるか? (市川)」「そだね。でもみんな大丈夫? (仙道)」「何回もやった曲だ。忘れるわけねえ。『生まれ変わって復活』って意味を込めて。(浦辺)」「よし、決まり。あのどっかのレコード会社の『発表会』以来か、人前でやるの。(横山)」「そう、あの曲でイヤな思い出を葬ろう。

4人がそれぞれのポジションに戻る。会場のアンコールが再び拍手と歓声(一部奇声)に変わる。マサノンがギターを構えてマイクに近付く。「いやいやいや。ほんっとうに感謝。でもこれが最後です。明日は月曜日だし〜(オカマ口調)。」笑いが起こった、、、が、しかし次の瞬間、市川氏のカウント無しでいきなりイントロの始まったその曲に会場の『メタル好き』からは歓喜、驚き、少しの狂気が混じった歓声が起こり渦になって天井を突き上げた。曲は『METALLICAのカバーでMaster of Puppets』。

次はいつになるか分からない。だからこそ最高の演奏をしてできるだけ後悔の要因を減らす。風化してただの『忘れ去られる過去』になるとしても。10年前と同じ。そしてその10年前に人生の転機を4人に与えた大好きな、でも少し苦い記憶のある曲を敢えて演奏することでさらに進化した自分を認識したかった。4人はほとんど無心。無我。言い方を換えると『ほとんど酔っていた』。アルコールもドラッグも無しに。二つの新曲も含めて以前の『若さと勢いだけにまかせてガンガン行った4人』とは明らかに違う事を古いファンに証明したかった。彼等の表情や動作による感情表現は以前と同じ、いや、それ以上にロックならではの『一曲にかける一生懸命さ』を伝えていた。おそらく『それ』が彼等の一番の魅力なのだろう。でも単に老化と体力の衰えにもたらされたのかもしれない。会場に集まった人々も『次はいつになるか分からない』演奏の音符の一つ一つを楽しもうと拳を振り上げ、共に歌い、その一体感に酔いしれていった。

間奏部分ではリードギターの浦辺氏によるアドリブアレンジが新たに加えられ、他の3人もそれを引き立てるアレンジを見事にやってのけた。そしてそれは『純粋なMETALLICAファン』にも新鮮さを与え、さらに深い『METAL SMILEワールド』に引き込んだ。歌のサビの部分。本来ならばマサノンと浦辺氏と観客と一緒に歌詞にある一語、『ますたー!』と叫ぶところでは各メンバーの名前を叫ぶ声も聞こえた。もちろん曲の流れをすぐに掴んだ香ちゃん&レーコちゃんも最前列でそれに加わった。会場後方には『人差し指と小指を立てた』両手を振り、頭も激しく振っている『金髪ねーちゃん』の姿があった。

曲は終了。大歓声と奇声の中に続く市川氏のドラムロール。ベースと2本のギターが打楽器の様に激しくアドリブでかき鳴らされる。で、マサノンのリードで『教科書通りのジャカジャン!』ってな感じでライブも終了。ステージ上の照明が消されてホールが明るくなった。集まった客は急な周囲の明度の変化に戸惑いながらもステージ上でかたづけを開始する4人に惜しめない拍手を送り続けた。その4人の心には今までのそれとは明らかに違う『達成感』が満ちあふれ、それが風になって10年間続いた『もやもやしたモノ』を塵の様に吹き飛ばしていった。

浦辺氏はシールドをまとめながらホールに集まっている人々を見て手を振った。会場が明るくなって初めてはっきりと客の集まり具合と顔を確認した。30代がほとんど。「お互い歳をとったな。世間から見ればまだまだ若い方なのかもしれないが、、、こいつらがさっきまで首振ってたんか。あんたらも好きね。」

ぞろぞろと人の流れが出口へ向かう。ステージ前にはハンセンさん、香ちゃん、レーコちゃん、京子さん、さらに永井アナ、田中アナ、室井先生、エイミー先生などがいてステージ上の4人を『絶賛』している。特に初めて見た『バンドマン浦辺』と普段のギャップに『良い意味で驚愕』したらしい。そこへ平川クンがきて「お疲れさまでしたー。」と言って帰ろうとする。浦辺氏、「ちょっと待て、それだけか? もう帰るんか?」と呼び止める。「いや、ほら、彼女が外で待ってるんで、、、」と平川クンは出口を指差す。するとハンセンさんが「ホント? もう先に帰っちゃったんじゃないの?」とからかう。「縁起でもない事言わないでくださいよ〜。」と言って小走りで出口へ。よほど急いでいたのか赤戸選手の姿に気がつかなかった。

缶ビール片手に赤戸選手が来た。「よー、ウラベー。お前のライブは高校以来か。スゲーな。やっぱステージに立つと『誰でも』かっこよく見えるもんだな。」それを聞いたレーコちゃんが「あ、それ私も思った。」などと言う。「それはどういう意味か?」と浦辺氏が睨みつける。「ハハハハハ。ロックが似合ってるってことだよ。俺にグラウンド。お前にステージ。じゃあな。カミサンも『みんなカッコ良かった』って言ってた。あ、永井さん、今年はウチがリーグ制覇するからよろしく。」と言って出口へ。数人のサッカー好きの男性からサインやら握手やらねだられた。

赤戸選手の後ろ姿を見て室井先生が腕時計を見る。「私たちもそろそろ行かなきゃ。今日は『タダ券』、どうもありがとうございました。ハードロックとかヘビメタとか興味無いんですけど良かったです。さ、長谷部さんも早く、寄り道しないで帰りなさい。」エイミー先生は初めは日本語で喋ろうとしたが良い表現が出て来なかったようで「Thank you for inviting me tonight ...aaaaand you guys are great!」と言って出口の方へ。ステージ脇の方ではマサノンが『現在のバックバンド』と市川氏と何やら談笑している。

田中アナが「あの一、この後『打ち上げ』とかやるんですかあ?」といつもの調子で浦辺氏に尋ねる。「『打ち上げ』? 種子島のロケットの?」などとクダラナイ事を言ってあしらう。永井アナが「後でウチの報道に協力してもらえます? さっき捕まった若いコ達のバンドの印象とか、、、」と仕事熱心な事を言う。浦辺氏の頭によくTVで見かける『顔にモザイクがかかって声に変

な加工』された人の姿が浮かんだ。「あはは。冗談ですよ。今頃ココのスタッフにうちの取材にいったるはずですから。みなさんはライブの余韻に浸っててください。今日はありがとうございました。このジャンルは普段聞かないんですけど、『みなさんに興味があった』ので最後まで楽しめました。あはは。いいですねハードロック。」と言って「打ち上げは〜?」としつこい田中アナに「アンタ明日、朝早いんだから!!」と言って彼女を引きずるように出口へ向かった。

その他にもかつてのファンだという人々がぞろぞろやって来て「昔を思い出しました。」とか「仕事のヤなことふっきました。」とか目頭赤くしてヒデキちゃんの手を両手で握りしめて「ありがとうございます!」とか言ってさっていった。大旨好評、今夜の再結成。しかし「あの『METAL SMILE』もバラードやる様になったかあ、、、」などという賛否のどちらともつかぬ声も聞こえた。

「じゃ、みんな、後は楽屋で。」と言って4人はステージを感慨深く見回して、ドラムセット後方に吊るされた『シーツの様なモノ』を綺麗にたたんで楽屋へ。ヒデキちゃんは最後に見納めになる会場を見回して「やっぱいいね。生ロックは。」と言った。ちょっと涙目。

事務所でチケットの清算やら入場者数の確認やらが終わって浦辺氏ら4人が楽屋に戻って来ると『ぱぱぱーん!!』とパーティ用のクラッカーが三つ鳴った。「お疲れー!」とハンセンさんが出迎える。「あーあ。こんなに散らかして。最後に掃除するスタッフの見にもなれよ。」と浦辺氏は言うが顔はけっこう嬉しそう。他の3人も同じ。パイプイスに腰を下ろすと『ドっ』と疲労が出て来た。「しんどー。やっぱ、こたえるな。この老体には。で、今何時?」と市川氏が両足を投出し、振り返って壁の時計を見ようと首を後方にひねる。「やべ、首つった。」「アホか。」とマサノン。「うるせー、アニメ歌手!」ちなみに21時37分。マサノンが右手で首をさすっている市川氏に『ヘッドロック』をかける。それを見たヒデキちゃんが市川氏の足首を楽しそうに関節技で固める。「てめ! こら! いてててて!」浦辺氏は平和主義を決め込む。

そこへ岡野さんがやって来て、「まいった、まいった。警察だけじゃなくてTVの人にもいろいろ聞かれちゃったよ。おまけにこの場所とも『おさらば』だし。ま、生まれ変わるだけなんだけどさ。長い一日だった。」と溜息混じりに言う。「ま、何にせよ、お疲れさん、いいライブだったよ。お客さんの入りも『ノリ』も予想以上だったし、、、って何やってんの?」パイプイスに座った人間に二人の人間が首と足首をそれぞれ関節技で固めている。「心配なく。いつものことですから。」とマサノンがニヤニヤしながら言う。彼の『ヘッドロック』は『スリーパーホールド』へ。「やめっ! ギブ! ギヴ! (*ギブアップ)」と市川氏が叫ぶ。

それを見てレーコちゃんと香チャン、ハンセンさんが笑っている。京子さんは『ウチの主人がドーモすいません』みたいな視線を市川氏に向けている。解放された市川氏が首を押さえながら「くそー。お前ら、俺はニューヨークジャズ界の『期待の新人(もちろん自称)』なんだぞ。」「30過ぎで『期待の新人』も何もないだろう。」と呆れたように浦辺氏。「何をー!? この『しがない喫茶店店長』!」市川氏、今度は浦辺氏の『コブラツイスト』の餌食に。いつの間にか京子さんがデジカメを取り出してその模様を撮影している。

香チャンがそんな『ヤンチャな30過ぎ』の男どもを見て「さっきまではあんなにカッコよかったのに。表情も別人で、チームワークもばっちりで。仲がいいんだか悪いんだか。」と呆れた様に言う。「君とレーコちゃんも似た様なモンだよ。」とハンセンさんが彼女の肩を叩く。「「え〜??」」と香チャン&レーコちゃんの見事なユニゾン。

岡野さんがヒデキちゃんにカセットテープを二本渡す。「はい、ライブ音源。さっき行った通りノーチャージでいいよ。」「あ、すいませんね。」そこへ『金髪ねーちゃん』が来て「できましたあ。」と行ってビデオテープを差し出した。「美穂ちゃんありがとう。はい、そんじゃコレがライブ映像。『JACK'S』最後の。」マサノンが近付いて来て「え? 今どきDVDじゃないんですか?」などと分かりきったことを笑いながら聞く。「ははは。悪かったな。無事にジャズクラブになったらデジタル機材を導入するよ。」

「そうそう、その感じ。俺の親指を上にな、、、、イテテテ!(浦辺)」「なるほど。こうか。死ぬね!(市川)」楽屋の反対側の床では浦辺氏が市川氏に『逆十字固め』を指導していた。なぜそういう事になったのか、まったくもって不明。苦しむ浦辺氏をみながらハンセンさん「学生時代に

全く同じ光景を見た気が、、、」とボソッと呟く。そして香ちゃんとレーコちゃんに「あの4人。それぞれ個性的だけど、面白い共通の過去があるんだよね。分かる?」と尋ねる。「何ですか? (香ちゃん)」「あ、4人とも野球部退部とか? (レーコちゃん、何故そうなる?)」「いや、全員小学校の頃『放送委員』だったんだって。」要するにその頃からすでに『目立ちたがり屋』だったわけね。

で、岡野さんや、大事そうに『シーツの様なモノ』を両手で抱えて、口に『めたる屋』のサービス券をくわえてお辞儀している『金髪ねーちゃん』やその他のスタッフに挨拶をして『JACK'S』を出る。別れ際、岡野さんが「もしかしたら明日、警察署に呼んで俺に有利な発言をお願いするかもな。」と半ば洒落にならない冗談を言った。その隣で『ドリンクサービス係』が気まずそうな顔をしていた。

もう時間がけっこうな時間なになってしまったので『打ち上げ』は延期。二人のお嬢さんはマサノンが自動車で送ってゆくことにした。「頼んだぞ。くれぐれも事故るなよ。」と浦辺氏がマサノンに言って後部座席のドアを閉めた。助手席では京子さんが自分がデジカメで撮影した映像を見ながら笑っていた。何が映っていたのだろうか。「じゃあ、俺達はとりあえず、、、」何が『とりあえず』なのかしらんが、浦辺氏、ヒデキちゃん、市川氏、そしてハンセンさんは居酒屋へ。懐かしのアニメソングを歌いながら。

二月某日。日曜日。午後17時。『めたる屋』からハンセンさんが出て来て外の黒板看板を『貸し切り』に書き換えた。そして香ちゃんも出て来て可愛いイラストを付け加えた。

市川氏が缶ビールを片手に立ち上がって「いやあ、今日は俺の為にありがとう。ありがとう。ありがとう。」と周囲にお辞儀をする。花束を受け取るような動作をする。「ふざけんな、ユート。（浦辺）」「何様？（マサノ）」「早く行かないと飛行機に遅れるよ。（ヒデキ）」と暖かい憎まれ口がとぶ。店内にはヴォーリウムを低めにしてHR（ハードロック）やHM（ヘヴィメタル）が流されている。

『市川氏が明日アメリカに戻る』ということと（なかなか皆の予定が合わなかった）『先月のライブの打ち上げ』の為に『めたる屋』に集まったのだった。『METAL SMILE』の4人と『めたる屋従業員』（ハンセンさん、平川くん、お嬢さん二人、それからライブには来てなかったけどマキさん）とマサノンの奥さんの京子さん、それから面白そうだと行って店に残っている鈴木氏。念願叶って『打ち上げ』参加の田中アナとその監視員の永井アナ。相変わらず二人とも首から携帯電話を下げています。それから室井先生。エイミー先生は最近風邪気味なので欠席。店の奥のテーブルを寄せてパーティーモード。

『カランコロン』とドアが開いた。「すいませーん。道路がなんか混んでて。」とヘルメット片手にあの『金髪ねーちゃん改め赤毛ねーちゃん』が現れた。その姿を見るなり鈴木氏が「げ、来た。休みかと思った。」とイヤそうな顔をする。皆驚いたのだが、実はこの『赤毛ねーちゃん』こと鈴木美穂さん（32歳）はイラストレーター鈴木氏の実の妹！鈴木氏は先日のライブの会場が『JACK'S』以外なら出席していたという。しかし決して仲が悪いわけではない。たぶん人前で顔を合わせるのが照れくさいのだろう。たぶん。

しかし、最近は顔を合わせなくてはいけない。なぜなら『JACK'S』の閉館後、彼女はここ『めたる屋』で働くことになったから。先月のライブの三日後ぐらいに『めたる屋サービス券』に記載されていた住所を頼りに現れて「ジャズバーにはあまり興味無いんで、ここで働きたいんですけど。」と言った。ライブの時に浦辺氏やお嬢さん二人に好印象を与えていたので面接無しで即採用。目つきはちょっと怖いけど。それを知った時、鈴木氏は「浦辺君と美穂。最強の『強面』コンビだな。」と言った。ところで『赤毛ねーちゃん』美穂さんの『METAL SMILE』への情熱はどうなったのかというと、歳をとったことと彼等が『あまりにも身近』になったので、まだ尊敬はしているしファンでありたいと思うが『なんだか冷めた』という。そんなモンですかね。

永井アナは『春の人事や新番組に向けて不安な事がいっぱい』だという。一方、田中アナは嬉しそうに『いろんな新しい出会いがありそうでドキドキ』だという。相変わらず目標は『永井先輩』。

幸運な事に市川氏はマサノンの人脈を通じてスタジオミュージシャンの道を見つけた。今後は奥さんの会社次第で日本に帰国。もしもの時は『ジャズバーになったJACK'S』で演奏させてもらうか、『めたる屋』を当てにしているらしい。

室井先生は最近勤め先の英会話学校で『外国人講師』の『日本人講師』のクラスの受講料の差がまた開いたらしく「ひとの足下見てるみたい。」で気に入らないそうな。教える側の責任として『もっと良い講師』を目指すため、教わる側の立場になるために韓国語会話を習い始めたとか。立派。

マサノンは不本意ながらも始めた子供相手の仕事にますます生き甲斐を感じていると言う。春からは再びTVの『特撮ヒーローもの』にたまに出演するらしい。

鈴木氏の仕事はイラストも芸術雑誌のコラムも順調。最近是个展も視野に入れているとか。「俺の妹も香ちゃんやレーコちゃんぐらいに可愛ければなあ。」と軽い冗談で言って、その『俺の妹』美穂さんにトレイ（の角）で『ガッ』と頭を叩かれた。

ヒデキちゃんは一応予備校講師を続けるつもりらしいが、何か副業を模索中とのこと。ちなみに大事にしていたバイクは3年ぐらい前に『お金に困って売った』そうで、安いのでいいからまたバイクが欲しいと言う。できれば『イージーライダー』みたいのだと。日本で手に入るのか？

マキさんは最近ようやく我が子（五歳）がサッカーに興味を持ち出してダンナさんと喜んでいるという。ちなみに彼女の夢は我が子のヨーロッパサッカー進出。

浦辺氏は（大嫌いな）確定申告など無事に終えたら札幌の羽賀根氏に『経営上の助言』を求めに（遊びに）行くかも、と言う。ハンセンさんがそれを聞いて「じゃ、俺も行くー。」と言うが「店の経費からは何も出んぞ。」と言われ少々がっかりした様子。

ふと香ちゃんが「バンド活動はもうしないんですか？」と『METAL SMILE』の4人に尋ねた。レーコちゃんも「そうそう、どうするんです？」と尋ねる。横山、仙道、市川、浦辺、4人はお互いに顔を見合わせた。そしてちょっと間を置いて、浦辺氏が「う～ん。どうするんだろうね。」と曖昧な返答をする。マサノンが口を開く。「俺達もねえ、大人になったっていうか変わったっていうか。以前の様に『切羽詰まった』状況じゃなくなっただよね。」ヒデキちゃんがそれに続く。「そう、前はこのバンドでなんとかしなきゃ『喰っていけない』みたいな不安とか強迫観念みたいなのがあったんだけどさ。バンドの他にもやってみてじっくり来る生き方があったというか、、、」「ま、俺とマサノンは初志貫徹で音楽で喰ってるけど。」と市川氏が冗談っぽく、でも自慢げに浦辺氏を見た。「ン？ なんだその勝ち誇った様な視線は？ この『似非ジャズドラマー』。」市川氏『カチン!』。そこへヒデキちゃんが「『似非は失礼でしょう。せめて『三流』ぐらい言わないと。』などと付け加えた。で、「死にて一か、てめえら!!」市川氏ついに叫ぶ。ハンセンさんが「ままままま。ユートちゃん落ち着いて。」と立ち上がった彼を後ろから羽交い締めにする。「、、、もっと硬派でカッコイイ人達だと思ってたんですけど。」と、美穂さんが呟くと「気付いて良かったじゃない。」とマキさんが彼女の肩を叩いた。さらに「ホント、スゴいギャップよね。演奏中と。」と室井先生。

浦辺氏が口を開く。「なんかさ、お互い生計をなんとかたてられるようになって、このバンドの位置づけが変わったみたいなんだよね。あ、平カーくん、あれ、キッチンに行って火い止めて鍋ごと持って来て。」マサノンが加わる。「そう、そんな感じ。それに俺達はバンドで演奏するのはいいけど契約とかプロモーションとかさ、ロクに顔も知らないし尊敬もしていない人の顔色をうかがったり、自分のロックに商業的な要素を要求されるのがヤッパリ苦手なんだよね。」「プロとしてやってく為には必要なことなんだけどね。」と言って浦辺氏はビールの缶を潰した。「それって、言い換えると『単なる頑固者』ってこと?」とマキさんが言っている調子でケタケタ笑う。誰も否定できず。

美穂さんがハンセンさんに缶ビールを手渡ししながら「それは結局『以前程の情熱』がなくなったってことですか?」と尋ねる。『METAL SMILE』の4人は一瞬言葉を失って静止した。ヒデキちゃんが苦笑いを浮かべ「そう言われても仕方ないかな? ははは。」と言った。それに対して市川氏が「お前だけな。」と言う。「あ、ひでえ。」とヒデキちゃん。

「機会があればまた何かするつもりだけどね。」とマサノン。「そう、俺達は『バンドブームの生き残り』だからな。はっはっは。その次の機会がいつ来るかまったくわからんけど。」と浦辺氏。美穂さんが「すぐに来るといいんですけど、ファンとしては。」と言いながら本日3本目の缶ビールを開けた。香ちゃんが「何か隠してませんか?」と言って浦辺氏を見るが4人とも笑みを浮かべるだけで何も言わず。

そこへ平川くんがキッチンから湯気の出ている鍋を両手で運んで来た。「ドコに置きます?」「ごくろー。ああ、この辺でいいか。」と浦辺氏がグラスや皿をどけて鍋のスペースを作る。鍋を覗き込んだ京子さんが「へー。こってますね。おいしそう。」と言った。ちょっと離れた

席から鈴木氏が「何ソレ?」と尋ねる。浦辺氏「豚の角煮だ。」と即答。すると「え〜? 豚の角煮出す喫茶店なんて初めてだぜ。(市川)」「ま、ここのトップが変だから。(ヒデキちゃん)」などと反応が帰って来た。「そんなことを言うやつには喰わさん。せっかく長時間かけて作ったのに。酒に合うんだぞ。」「失礼しました、社長。」

なんだかんだ言っても、浦辺氏の調理したモノは味はかなり良いので大旨好評。ハンセンさんが本当に幸せそうな顔で「ん〜。時間かけてじっくり煮込んだだけあって良い味してるねえ。」と言う。すると浦辺氏はちょっと考えてから「『METAL SMILE』もね、ゆっくり時間かけてもっと良いものにしていくつもり、、、とだけ今は言うておくよ。以前はパフォーマンスはともかく精神的な部分の『煮込み』が足りなかったんだよね。早くデビューしたくて若さと勢いに任せてたから。」と言って空になった鍋を持って立ち上がる。「どっかのグルメ漫画のオチか。(市川ユート)」「勢いに任せてたのは浦辺さんだけでしょ?(仙道ヒデキちゃん)」「アホ。俺はまだ若い。(横山マサノン)」

「パラディ特製デザートやらんぞ。(浦辺)」「失礼しました、社長。(全員甘党)」

お互いに普段しないような話をして、笑い声が絶えず外に漏れ続けるような『打ち上げ』を皆が楽しんで、まだまだ続けたかったのだが翌日は月曜日。『メタルカフェ』こと『めたる屋』は定休日だが他の人はいろいろすることがあるので一人減り、二人減り。で、現在午後21時頃。残っているのはバンドマンとしての顔を持つ4人、彼等の大学の同期の大男、アニメ歌手の奥さん、高校卒業間際の二人、それから鈴木兄と妹。

市川氏が席を立つ。「よし。マジで明日飛行機に遅れるとマズいからもう帰るわ。」ウィークリーマンションはすでにチェックアウト済みで現在はヒデキちゃんのアパートに居候中。したがってヒデキちゃん「え？ じゃあ俺も帰らなきゃ。部屋勝手に荒らされたら困るし。」と言ってジャケットを着る。「お前の部屋はすでに荒れ放題だろうが。」「な？居候のクセに。」などと言いながら出口にむかう二人。浦辺氏が市川氏に向かって「じゃ、また夏にな。」と手を振る。「おう、ギターの練習さぼるなよ。」続いてマサノンが「旧姓東尾さんによろしく。」と言った。他の皆の適当に別れの挨拶をした。

そして鈴木氏が立ち上がる。「じゃ、俺も行くわ。ごちそーさん。あ、美穂、」「何？ おにい（*お兄さん）？」「食器割るなよ。」で、その妹に紙くずを投げつけられて鈴木氏は皆に背を向けたまま手を振りながら出口へ。最後に振り返って「美穂。バイク、気を付けてな。」と言った。「良いお兄さんだ。（浦辺）」「普段あんなこと言わないのに。アルコール恐るべし。（鈴木妹）」「じゃあ、我々も変な事を言い出す前に解散しますか。（ハンセンさん）」もちろん未成年の香チャンとレーコちゃんはノンアルコール（浦辺氏に可愛い声で『ちょっとだけ。』などとねだっていたが、、、）。浦辺氏もハンセンさんもそのへんの道徳と責任感はしっかりしています。後片付け開始。

後片付け終了。ガスやら電気やらのチェックを終えて浦辺氏がキッチンから出て来た。他の皆は出口のところで待っている。香チャンがふと思い出した様に「カズさんも、マサノンさんもバンド始めたもともとのキッカケは何だったんですか？」マフラーを首に巻きながら浦辺氏「え？まだ言ってなかったっけ。」と言ってマサノンを見る。マサノンはクスクスと笑い出した。「それね、俺達別々の場所でスタートしたんだけど、『そもそもの理由』はほぼ一致してたんだよね。4人。ま、だからこそ大学入って、出会ってすぐに意気投合できたんだらうけど、、、」「何だったんですか？」と、とても興味深気な美穂さん。「ズバリ、目指せ『カッコいい人生』。」と浦辺氏が言って、続いてマサノンが「それから『誰かのヒーロー』。」と言って、二人で肩をガッシリと組んで空いた方の手の親指を立てて見せた。アルコールのせいでちょっと赤い満面の笑みで。

そこまでシンプルな返答をまったく予想していなかったのか、一同一瞬言葉を失った。「俺達、4人とも『メンバー探し』に大学に入ったみたいなのところもあったしな。ははは。」とマサノン。ダメ学生のサンプル。

レーコちゃんが「みんな『カッコいい人生』はともかく『誰かのヒーロー』にはなれたんじゃないですか？」と言う。それを聞いた横山夫人こと京子さんがダンナのマサノン（まだ浦辺氏

と肩を組んでる)をチラリと見て「だといいいんだけど。」などと言う。「どーいう意味？」で、店内に笑い声が響いた。ハンセンさんが「この人達を見にあれだけ人が来てたんだからねえ。今さらだけどスゴい事だよね。」と言った。

@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }

挨拶をしてマサノンと京子さんは手を繋いで最寄り駅の方へ。今夜は『飲みたかった』ので自動車の運転は控えたという。一方、驚異的な肝機能を発揮していた美穂さんは「じゃ、失礼します。」と言ってヘルメットをかぶり、バイクで夜の市街地へ。レーコちゃんと香ちゃんが「「かっこいい。」」と走り去る彼女の後ろ姿を見届ける。浦辺氏は「でも、不安だから、一応後で電話してみるか。」と呟いた。この店長、強面のわりにはけっこう心配性。で、何か手持ち無沙汰だったので浦辺氏とハンセンさんは二人のお嬢さんを徒歩で家まで送ることに。ハンセンさんは自転車を押しながら。レーコちゃんが携帯電話でボーイフレンドからのメールを確認。ものすごく嬉しそうな顔で（えらいスピードで）返信。内容は不明。

二月の夜空の下を4人で談笑しながら歩く。やや風がふいている。

レーコちゃんが「あ～あ。春から大学生なんだけど。どうしよう。不安。」とブティック店のマネキンを眺めながら言う。それに反応するように隣の香ちゃんが「私は5月に渡米！ 8月末の入学までいろいろ留学生向けの英語の講習とか受けられるンだって。」とレーコちゃんと同じ方向を眺めている。

その二人の後ろのハンセンさんが「ほらほら、わき見歩行は危ないよ。」と注意する。3人の自転車に乗った高校生が彼等の脇を通過する。浦辺氏は「人の道に反した事をしない限り、どんな学生生活を歩もうと構わんよ、俺は。」と偉そうな事をのたまい。レーコちゃんが振り返る。「二人の大学生活はどうだったんですか？ 前にも聞いたかもしれないけど。」初めにハンセンさんが答える。「ん？ 誰でもそうだと思うけど、楽しいこともやなこと半々だったんじゃないかな？ トータルで、、、でも、そのおかげで今の自分があるなら充分肯定に値する学生生活だったと思うよ。もっとも、まだまだ向上心はあるよ、人として。また旅に出たい。というわけでウラベツちゃん。休みくれ。」この人はきっと『旅が人を賢くする』と信じている。「前向くに検討しておくよ。」と浦辺氏。「俺はさっき言ったみたいに『かっこいい人生』を歩む為にいろいろ考えてたね。その一つが俺にとってはロックだったんだけど。中学ぐらいの時から『硬派なロッカー』のイメージを大切にしてくてさ、、、ま、世代のかなり違う君たちに『ロックを聴け』とか『ロックをやれ』とか言わないけど、誰か『かっこいい人』に憧れて、『かっこいい人生』を模索して。あ、でも現実逃避はいかんぞ。」

「そーいえば、ウラベツちゃん『ヤバい時期』があったよねえ。二十歳ぐらいの時に。」「それは言うな。」いったい何があったというのか。「私は彼がカッコイイからまだいいや。」

とレーコちゃんがノロケると隣を歩く香チャンの『アハハハハー!!って笑いながらショルダータックル』が炸裂。

いつの間にか4人が横一列になって歩いている。レーコちゃんは今度は歩道の反対側を見ながら歩いている。「何か、ひっさしぶりにお二人から『まともな事』聞いた気がするんですけど。」ハンセンさん「そうかね。はっはっは。」と、腕を胸のところで組んで高らかに笑う。香チャンは歩道に施されたモダンな模様を眺めながら「でも、いいですよ。本当に『カッコいい人生』を送れたら。」と言う。浦辺氏はその隣で「この国の全員が『カッコよさ』を追求すれば、今の社会問題のほとんどが解決する気がするんだけどね。それぞれの職業、それぞれの立場での『カッコよさ』。みんな子供の頃に憧れたはずだと思うんだけどね。妥協の必要性で倫理をねじ曲げて、、、」と溜息。すると香チャンは今度は空を見上げて「単にそれが難しいということ『平和の皺寄せ』じゃないですか？ ルールとして悪い事や争いを禁止するだけで納得してしまって。法のスキを探して楽な方へ、楽な方へ。人の心がもっと『自分に厳しく』ならなきゃ。法律は後回しにして。」と少々大人びた意見を述べた。正直驚いて浦辺氏とハンセンさんは言葉を失った。しかしレーコちゃんは香チャンを指差して「出た！ 香の『自分に厳しく、他人に優しく』発言！」と、からかうように言った。聞き慣れているのか？ 毎年『世界平和』を神社でお願いしているのは伊達じゃない。

「何かの英才教育もいいけど、もっとしっかりした道德教育を優先するべきで、でもそうすると誰かしら『詰め込み教育は悪だ』とか『型にはめずに子供の個性をもっと尊重してノビノビと』とか曖昧な理想論を言い出すわけで、、、（柏田ハンセン）」「『社会道德の型』も知らない子供をノビノビさせても悪さ繰り返すだけじゃねえか。（浦辺カズキ）。」「うわー。カズさんとハンセンさんが何か大人の会話してるよ。香。」「珍しい。明日は大雪かな？ あ、オリオン座の頭！」そんな感じで、4人で信号待ち。

北風が急に強くなって来た。浦辺氏が「いつの時代もロッカーにはこれぐらい風当たりが強い方がちょうどいい。」と呟いて『フッ』とカッコつけるように笑った。横の3人は心の中で「「「酔っぱらってる??？」」」

費やす時間に個人差はあるものの、若い頃からの夢を実現させる人もいれば、実現できない人もいる。せっかく望んだ仕事に就いても理想と現実の差に戸惑い、自分の選択を疑う人もいれば、第一志望を諦めて選んだ不本意な道の中でそれまでの偏見と現実の差を実感して新しい生き甲斐を見つける人もいる。金銭的な理由や精神的な理由や健康面の理由から何かを諦める人もいれば、無茶をしても、ボロボロになっても、とにかく耐える人もいる。ゆっくりと確実に堅実に歩む人もいれば、リスクと冒険で早い結果を好む人もいる。どんな生き方が正しいことなのかは誰にも解らない。ただ『人としての道德』と『最低限の根性と人情』そして『志の一番深いところにある何か』を見失わなければ『カッコいい』人生を歩めるのかもしれない。次の世代が憧れる様な、、、その有様は当然『人の数だけ』。その数だけの『人生劇場』。その鑑賞の仕方『人の数だけ』。きっと個人の秘める可能性もそれぐらいあるはず。

時は流れて約半年後。八月。やや風の吹いている夕暮れ時。『メタルカフェ』こと『めたる屋』にて。店内には有線放送の『QUEEN』特集が流れている。

カウンターで平川くんが「あ～あ。就職活動か～。めんどくせ～。」とグラスを拭きながら溜息をついた。それを聞いた隣の『喫茶店の接客をするようになって顔つきがなんだか優しくなった』と評判の『すっかり小ボスの地位を獲得した』美穂さん、「いっそのこと、ココに就職しちゃえば?」とからかうように言う。「それはちょっと、、、」そうか、ココはイヤか。ちなみに世間はお盆休み直前。マキさんは既に夏休み。

『カランコロン』とドアが開いて『一人旅帰り』のハンセンさんが「ただいまーん。出迎えて苦勞、みななもの。

あれ? ウラベツちゃんは? 『昨日』で終了って言ってたよね?」と両手に紙袋を下げてやって来た。足下に猫のタマが顔を擦り付けている。長距離列車アムトラックでアメリカを横断してきたらしい。オレゴン州ポートランドから首都ワシントンDCまで。当初はニューヨークが終着点だったのだが『娘命の福田パパ』の依頼で『その娘』、香ちゃんの様子を見て来ることになったのだった。ハンセンさん曰く、「元気そうだった。国際的な友達に囲まれて。」奇抜な髪の手入れ方もさらにバージョンアップ。福田パパの一番の懸念(?)のボーイフレンドらしき人物は一応「まだ見当たらなかった。」という。一方、彼女の親友であるところのレーコちゃんは順調に日本の大学生をやっています。現在夏休みを満喫中。しかし彼女のボーイフレンドは予備校生。彼は『あくまでも東京大学』を目指すんだそうで、『某有名私立大』の合格を悩んだあげく蹴ったそう。レーコちゃん曰く、「日本一かっこいい予備校生。ちょっと複雑な心境だけど。」

店の奥の方から春先からバイトを始めた井原孝子(いはらたかこ)さん、28歳、がグラスを乗せたトレイを『カタカタカタカタカタ』いわせて出て来た。マキさんの知り合いらしいのだが、この人『おっとり型』というか、ちょっと『動きが遅い』。しかし仕事熱心ですごく人柄も良いので『頑張り屋さん大好き』の大ボス、浦辺氏と中ボス、ハンセンさんから信頼されている。「あ、ハンセンさん。お帰りなさい。あ、お土産ですか? うわっ。何ですか?」

「あ、ターコ(*たかこ)さん。元気? ン、そう。お土産。みんなの分あるよ。たいしたモンじゃないけど、、、」とハンセンさんが『がさごそ』とカウンターでお土産(アメリカで買ったアフリカ?の民芸品。何故だ!?)を陳列していると『カランコロン』「しゃーっ!! 無事に終わりましたー!」と浦辺氏の声。

皆が夕日に照らされている入り口を振り返った。美穂さんが「お疲れさまでしたー。」と笑顔で『METAL SMILEメタルスマイル』改め『METALLUJAHメタルヤ』の4人を迎え入れる。美穂さんはハンセンさんをチラリと見て「、、、今日ですよ。予定通り。」と言って『にこり』と笑った。浦辺氏が「おお。ハンセン、どうだった? アメリカ横断は?」とハンセンさんの高い肩を叩いた。

で、何が『終わった』のかということ、六月ぐらいまで内緒にしていたのだけど、デビューアルバムのレコーディング。世の中、十年に一度ぐらいは事が上手く運ぶ事があるもので、マサノ

ンが『TVアニメの主題歌など』で契約している会レコード社は、5年前に社長が変わってから、外国モノを中心にHRハードロック/HMヘヴィメタルを現在でも『しぶとく』扱っている部門を持つ会社の一つ。マサノン本人は「気が付かなかった。」そうだが。

彼の周りの人間から噂が広まって（本人は『METAL SMILE』としての過去を封印していたからね。）一月のライブ音源や映像が『上の方』でけっこう評判がよかったんだと。さらにタイミング良く過去に一時代を築いた日本の有名メタルバンドがオリジナルメンバーで再結成。彼等が国内及び欧州の一部で再び脚光を浴びているという状況が追い風になって『過去にイイトコまで行ったバンドが不良オッサンになって再結成』といった感じの宣伝文句でとりあえずアルバム一枚を契約。彼等の悲願、『METALLUJAH』名義のアルバム。六月にドラマーの市川氏が帰国して即レコーディング開始。音楽以外の仕事を抱えている浦辺氏とヒデキちゃんが上手く時間を工面してなんとか予定通り終了。

美穂さんが嬉しそうに「で、いつ発売になるんですか？」とカウンター席に並んで着席した4人に尋ねる。浦辺氏は「ん～、これからミックスダウンして、その後いろいろあって、でもそんなに大量に生産するわけじゃないから12月頃の予定だって。」と言って店内のカレンダーを眺める。ハンセンさんが「これが上手く行けば『勝ち組』ってやつですか？」と尋ねると、「何ソレ？今の日本で流行ってンのか？（市川）」「別に誰かと戦ったわけでもないし。（横山）」「誰かを叩きのめして蹴落としたわけでもなし。（仙道）」「強いて言えば『カッコイイ組』？（浦辺Vサイン）」

「「「なんだそりゃ!?!?!?（市川／横山／仙道）」」」

平川クンが「ついにデビューっすか。かっこいいっすね。」そしてターコさんが「アルバムタイトルは？」と二人でハンセンさんのお土産を物色しながら尋ねる。浦辺氏が答える。「いろいろ迷ったんだけどね。『ファーストアルバムなのにベストヒッツ』とかね。でも結局バンド名と一緒に、『METALLUJAHメタルヤ』。4人のいろいろな思いを込めて。」

「って言うとなんかいいけど。嘘ではないけど。（横山マサノン）」「正直に言うと、いくつかあった候補の中から、、、なんだっけアレ。（市川ユート）」「迷ったあげく、『アマダ』で決めた。（仙道ヒデキ）」

え？

『アルバムタイトル論議』は深夜まで及び、疲労と睡魔で終いにはどうでもよくなっていた4人であった。

「で甚だしく失敗したらまた『それぞれの旅』に出るから。（浦辺）」

オイ。

とは言うものの、4人の顔に自信と若返ったかのような生命感が満ち溢れている。それをハンセンさんと美穂さんは見逃さなかった。『まったく、この人達は、、、』という感じで美穂さんが暖かい表情で溜息。市川氏が浦辺氏を指差して「きっと、コイツ、店の方の『めたる屋』の知名度向上も考えてるんだぜ。」とからかうと、その店長は「あたりまえじゃねーか。」と開き直った様に胸を張ってみせた。

見慣れない若い男性客が一人やって来た。右手には『フェンダー』のギターのハードケースを持っている。アイスコーヒーを注文すると奥の四人掛けのテーブルに着席。カウンター席から彼を見て過去の自分の姿と重ねた浦辺氏が呟く「彼のバンドメンバーがこれから来て、昔の俺達みたいに『口論』始めたりしてな。」

約5分後。3人の若者がドアを開ける。一人は黒い革のケースに入れたベースギターを右肩に背負っている。一人は『アイバニーズ』のロゴの入った革のギターケースを携えている。最後の一人は革のスティックケースを脇に抱えている。服装はメタルやハードロックというよりは『今どきパンク』だが明らかにバンドマン。平川クンとターコさんが対応（接客）する。『んなアホな。』といった感じで浦辺、横山、仙道、市川の4人が顔を見合わせる。

「次の店長?」「かもな。」「な? この店は誰にも渡さん。」「いや。世の中わかんねえぞ。」

ドアが閉まる直前に風が入って来て風鈴が『チリーン』と爽やかな音色を響かせた。店内に流れるQUEENのフレディの声に合わせてハンセンさんと美穂さんがモノマネ混じりで歌う。

「「えええにいうえいざういんぶろおおおおおう...」」

そう、目に見えない風のようにただ時間が流れてゆく。人の都合など『お構い無し』に。だからこそ目の前を過ぎてゆく一つ一つのイベントを大事に、すみずみまで鑑賞したい。過ぎたイベントのうちできるだけ沢山のモノを『有意義な過去』にして、頭のどこかにしまい込んで『カッコよく』風に吹かれていたい。そんな夏の夕暮れ時。かすかにヒグラシの声が聞こえる。

@font-face { font-family: "Times New Roman"; }@font-face { font-family: "M S 明朝"; }@font-face { font-family: "Century"; }@font-face { font-family: "@M S 明朝"; }p.MsoNormal, li.MsoNormal, div.MsoNormal { margin: 0mm 0mm 0.0001pt; text-align: justify; font-size: 12pt; font-family: "M S 明朝"; }table.MsoNormalTable { font-size: 10pt; font-family: "Times New Roman"; }div.Section1 { page: Section1; }

相変わらず時間は流れてゆく。そして生きる人すべてに何年かに一回ぐらいは『よっしゃーっ!!』ってガッツポーズとりたくなる様な出来事への『キッカケ』を運んで来る、、、ハズなのだが、次の『それ』がいつになるのか皆目見当がつかん。当たり前か。ま、その『キッカケ』を見逃さない様にしたいものです。

9月某日。日曜日。晴天。午前10時頃。久々に日曜の休みをとった浦辺氏。

『METALLUJAH(メタルヤ)』のファーストアルバム（と、いってもセカンドの保証は無い）の制作もCDジャケットやブックレットのデザインも低予算で順調に進行中。バンドメンバーはそれぞれ忙しく、誰も『かまって』くれない。つまり浦辺氏は特にすることが無い。たまっていた家事も昨夜かたづけてしまった。天気がいいので部屋にこもっているのもなんだかもったいない。久しぶりに仕事もバンドも忘れてのんびりしてみようか。

で、ふと思い立って都心部にある『HRハードロック/HMヘヴィメタル』マニア御用達』の中古CD屋へ随分と久しぶりに足を運んでみた。ちなみにこの人は都会の人ごみがなんとなく苦手。店内に入ると大型レコード屋（CD屋?）では見ることのほとんどない『そっち方面』のCDがトコロ狭しと（もともと店自体が正直狭いのだが）陳列されていて浦辺氏にとってはたいへん居心地のよい場所。店内に流れている音楽も当然『そっち方面』がガンガンにかかっていますますますいい気分。「うん。よろしい。よろしい。」と、特に何かを買いたいわけでもないのだが、ニコニコしながら「掘り出し物があるかもしれん。」と棚に『ズラーっと』並んだタイトルをくまなくチェック。するとレジの前にお客（全員黒いTシャツ）の列ができ始めた。若い店員の『長髪ニイちゃん』がなにやらアタフタしている。どうやらレジの機械が調子悪いらしい。狭い店内にお客の列。浦辺氏はまだチェックしたい棚があったのだがそこまで侵入できず。

もっと時間を潰すつもりだったのだが店を出て、たまたま大型レコード店の看板が目に入ったのでそちらへ行ってみる。さすが大型店。J-POP、映画のサウンドトラック、英米ヒットチャート、ジャズにクラシックに癒し系など各ジャンル充実している。浦辺氏は本能的に『HR/HM』コーナーを探す。

どこだどこだ? と探していると、あった。隅っこの棚一個分。「これっぽっちか!?’と叫びたくなったが我慢した。こういうことは今に始まったことじゃないから。バンドブームを懐かしく思いながら辺りを見回すと、洋楽DVDコーナーは『ABBA』と『IRON MAIDEN』が隣り合うカオス。50音順にすべてが『いっしょくた』にされている。

ワールドミュージックのコーナーで最近お気に入りのフランス人歌手の作品を探してみる。その歌手のセクションはあるのだが、すでに浦辺氏が持っている古いアルバム一枚しか棚になかった。

なんだかますます自分が浮いている感じがしてきて今度は近くの大型書店へ。音楽雑誌と料理の本を立ち読みする。すると、漫画雑誌のコーナーが急にやかましくなった。そちらに目をやると3人の高校生が床に座り込んで大笑いしながら漫画を呼んだりケータイで会話したりしている。他の客も店員も迷惑そうに彼等を見るも誰も注意しない。仕方なく浦辺氏がその子供達に注意をすると、彼等は失礼極まりない悪態をついたり中指を立てたりして店を出て行った。（殴りたいのを必死でこらえる浦辺氏。）そして、その場の責任者らしき人物が出て来て「お気持ちは分かるのですが、店内でのトラブルはできるだけ、、、（以下省略）」ってなことを言われる浦辺氏。なんとなく気分が悪いので何も買わず書店を後にした。

腹がへったのでゆっくり食事ができそうな飲食店を探す。日曜日の昼時、どこも『おばちゃんや若者や家族連れ』でごった返している。仕方なくちょっと都心部から離れてコンビニで弁当とペットボトルの緑茶を購入し河原の土手を歩く。河川敷のグラウンドで少年サッカーの試合が行われている。見たところけっこうレベルが高いようで「こいつはいいや。」と浦辺氏、少々グラウンドから離れているが、土手を下る階段に腰を下ろして試合観戦をしながらコンビニ弁当を食す。「そうそう、そこでサイドチェンジで、一気に空いたスペースへ、、、（*解説者気取り）」

すると浦辺氏の傍に立てておいたペットボトルをゴルフボールが直撃。「うおっ!？」と、浦辺氏は跳ねる様に立ち上がってゴルフボールが飛んで来た方を見る。ゴルフクラブをもったオッチャンが浦辺氏の方を見て硬直していた。クラブを振りきった、スウィングを終えたままの姿勢で。その姿勢の向きから察するにミスショットらしい。浦辺氏は『怒りの形相』で「子供に当たったらどーすんだ？ しかもここはゴルフ禁止だろう。火い吹くぞ。火。」とオッチャンに注意する。こういう時は浦辺氏の『おっかない顔』がよく効く。とりあえずボールは返してあげる。再びなんだか気分が悪くなってコンビニ袋に空になった弁当の容器とペットボトルを入れて歩き出す。

で、その『ゴミと化した』モノをどこかのゴミ箱で始末させてもらおうと、さっきのとは別のコンビニへ。すると店内で『めたる屋』によく来る『キレーなお姉さん』がファッション雑誌を立ち読みしていた。浦辺氏は特に下心は（たぶん）なかったのだが、せっかくだから挨拶でもしておこうと店内へ。入り口のチャイムに反射的に反応してその『お姉さん』は浦辺氏の方を見て二人の視線が合ったのだが、また雑誌の紙面に目を戻してしまった。「『めたる屋』店内でエプロンでもつけてないと誰だか分かんないか、、、」となんだか虚しくなって浦辺氏は雑誌コーナーへは行かず、でも何もせずに店を出るのも気まずいので（*この人は心配性）スポーツ飲料の1.5ℓボトルを買ってコンビニを後にする。

まだなんだか手持ち無沙汰なので今後の『めたる屋』の経営のことやらバンドの

『METALLUJAHメタルヤ』のことやらぼんやりと考えながら散歩を続ける。知らん人の家の玄関先の犬に吠えられる（しかも3軒）。洗車中のオッチャンに水をかけられそうになる。ケータイ片手に自動車を運転する女性に轢き殺されそうになる。ゆっくりと自転車で進むジーサンが30mぐらい離れているにもかかわらず浦辺氏に対して自転車のベルをしつこくならす。

あっち、こっちで跳ね返される。俺はピンボールの玉か?? いかん、このままではせっかくの休みだというのにストレスが溜まる。どこか落ち着ける場所で一休みせねば、、、と、あたりを見回すと見慣れた和菓子屋『胡満堂（こまんどう）』の看板が。浦辺氏は『フッ』と一人なんか可笑しくなった。で、さらにその商店街を進むともっと見慣れた喫茶店が、、、苦笑いを浮かべながらドアを開けて店に入る。

『カランコロン』とドアの上のカウベルが聞き慣れたリフを奏でた。

「いらっしゃいませえ、、、って、あれ？ ウラベツちゃん？ どしたの、今日は休みなのに？」と身長2メートルはあろうかという大男の店員がカウンターから声をかけた。そしてカウンター席に座っているイラストレーターが「どうしたの浦辺君？ なんか疲れた様な顔して？ 今日は休みじゃなかったの？」と言った。続いてトレイにのった食器を『カタカタカタカタカタ』音をたてて『おっとり』した感じの女性店員が店の奥のテーブル席の方から来て「あ、カズさん。カズさんは今日はお休みですよ、、、ねえ？」と言ってそのままカウンター裏の流しへ。

浦辺氏、溜息をついてカウンター席に腰掛けて「ここが一番落ち着く、、、」とカウンターに顔を隠す様にうつ伏せになり、独り言の様に呟いた。なんとなく悔しそうに。それを聴いた隣のイラストレーター鈴木氏が「え？ なんだって？」と尋ねるので浦辺氏ちょっと考えて顔を上げると、苦笑いを浮かべながら「鈴木さん。アンタ他に行く所無いんですか？」と皮肉っぽく言った。鈴木氏はちょっと面食らって「な!? とことん失礼な店だなここは!？」と言り返す。

ハンセンさんが浦辺氏が隣のカウンター席に置いたコンビニ袋を指差して「ん？ ウラベツちゃん、そのスポーツドリンクはまさか、従業員に差し入れ？ 悪いねえ。」と勝手な解釈を始めた。「え？ 差し入れですか？ わーい。」とニコニコ顔のターコさんが食器を洗いながら顔を上げて浦辺氏の方を見た。二人の中年男性の常連客が「「こんちゃ。おつかれー。。」」と浦辺氏に挨拶をして店を出てゆく。キッチンから両手にサラダを持った平川くんが出て来て「カズさん。聞いてくださいよお。昨日彼女が、、、」「あ、カズさんだ！ 久しぶりー！ 見てー、香からエアメール!! (レーコ嬢)」そして『カランコロン』とドアが開いて「おう、二代目！ ちょっといいか、、、(ヤマギッさん)」さらに店の外から『ばふおん!!ばふおん!!』と美穂さんのバイクのエンジン音が。

「だあー!! うるせーっ!!、、、まあ、いいや。これからもこの店をよろしく。」と浦辺氏は大きく溜息をついて再びカウンターにうつ伏せになった。皆に幸あれ。

都内某所、ほぼ埼玉県との県境。某商店街の外れにある小さな喫茶店『めたる屋』通称『メタルカフェ』。居場所の無いように感じる人、世間で浮いてるように感じる人、未だにHR(ハードロック)やHM(ヘヴィメタル)と言われる音楽を愛する人。カッコイイ人生を模索中の人は是非一度お立ち寄り下さい。変わり者の店長と個性豊かな従業員が『有意義な無駄な時間』を提供してくれます、、、たぶん。

つづく、、、かもしれない。